

猪

ノ

鼻

(2)

遺

—一般国道 45 号天間林道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

跡

猪ノ鼻(2)遺跡

二〇二一年三月

青森県教育委員会

2021年3月

青森県教育委員会

猪ノ鼻(2)遺跡

—一般国道45号天間林道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2021年3月

青森県教育委員会

小川原湖



猪ノ鼻(2)遺跡から南西方向を望む



南側調査区全景

巻頭図版 1



縄文土器、剥片石器、土師器、須恵器



沢跡出土砾石器

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、一般国道45号天間林道路建設事業に伴い、令和元年度に猪ノ鼻(2)遺跡の発掘調査を実施しました。当センターでは、これまで本事業に伴い後平(1)遺跡、後平(2)遺跡、後平(3)遺跡、後平(4)遺跡、猪ノ鼻(1)遺跡の調査を行っており、縄文時代と平安時代の集落跡などが発見されてきました。

猪ノ鼻(2)遺跡では、縄文時代の竪穴建物跡や落とし穴、奈良・平安時代の竪穴建物跡などが発見されました。特に縄文時代中期前葉～中葉の集落跡の発見は同じ七戸町に所在している史跡二ツ森貝塚との関連を考察する上で大きな成果と言えます。また、平安時代の竪穴建物跡からは槍やりがんな鉋と思われる鉄製品が出土しており、生業状況の一端が明らかになりました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

令和3年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤禎人

例　言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所による一般国道45号天間林道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和元年度に発掘調査を実施した七戸町猪ノ鼻(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は1,330m²である。
- 2 猪ノ鼻(2)遺跡の所在地は青森県上北郡七戸町字猪ノ鼻地内、青森県遺跡番号は402154である。
- 3 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

　　発掘調査期間　　平成31年4月23日～令和元年6月28日

　　整理・報告書作成期間　令和2年4月1日～令和3年3月31日

- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター小山浩平文化財保護主幹、小田川哲彦文化財保護主幹が担当した。依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務を依頼および委託により実施した。

地形と地質現地鑑定	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師　根本　直樹
火山灰分析	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師　佐々木　実
石質鑑定	元青森県立浪岡高等学校教諭　山口　義伸
測量基準点の設置	株式会社　青秋
遺構測量	株式会社　青秋
空中写真撮影	有限会社　無限
遺物の写真撮影	有限会社　無限
剥片石器実測図等作成	株式会社　アルカ
遺物写真切り抜きおよび土器実測図トレース	

株式会社　知立造園CUBIC事業部　青森営業所

- 7 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告書等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 8 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「乙供」、「七戸」、「銀南木」、「上清水目」を複写・加工して使用した。
- 9 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 10 掘図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 11 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を遺構ごとに付した。使用した略号は、以下のとおりである。

　　竪穴建物跡-SI　　土坑-SK　　柱穴-SP　　焼土跡-SN

　　また火山灰に関して、B-Tmは白頭山・苦小牧火山灰、To-aは十和田a火山灰の略称として使用した。

- 12 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2005 年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。
- 13 各挿図中の遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴建物跡・土坑は1/60、竪穴建物跡の炉、カマドは1/30 とし、スケールを示した。路線図、遺構配置図等は適宜縮尺を変更し、挿図中にスケールを示した。
- 14 土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付している。
- 15 遺構内から出土した遺物等には、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を必要に応じて付した。遺物に使用した略号は、土器—P、石器—S、金属製品—F 炭化材—Cで、その他の記号を用いた場合は各図中に示した。
- 16 遺構規模に関する計測値で、調査区域外に延びているもの、他遺構・攪乱によって壊されているものは() を付して現存値を記載した。
- 17 遺構図版中で使用した網掛けは概ね以下の通りである。
 燃土、
 粘土範囲等
- 18 遺物実測図の個別番号は、図版ごとに1 から付した。
- 19 遺物実測図の縮尺は、土器・土製品類1/3、剥片石器類1/2、礫石器1/3（台石1/4）、金属製品1/2 を原則とし、各挿図にスケールを示した。遺物実測図に使用した網掛けは挿図中に凡例を示した。
- 20 遺物観察表の土器類計測値の() 内数値は、口径・底径は復元値、器高は残存値である。石器類の欠損が明らかなものは() を付した。
- 21 遺物写真には遺物実測図と共に図番号を付した。縮尺は不同である。
- 22 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 23 発掘調査及び整理、報告書作成に際して、下記の機関と方々からご協力、ご指導を得た(敬称略、順不同)。

七戸町教育委員会、宇部 則保、小山 彦逸

目 次

卷頭図版

序

例 言

目 次

図版目次

表目次

写真目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
1 発掘調査の方法	1
2 整理・報告書作成作業の方法	3
第3節 調査の経過	5
1 発掘調査の経過	5
2 整理・報告書作成作業の経過	7

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の歴史的環境	9
第2節 基本層序	13

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 堅穴建物跡	14
第2節 土坑	45
第3節 燃土跡	58
第4節 沢跡	59
第5節 遺構外出土遺物	65
1 士器	65
2 石器	65

第4章 自然科学分析

猪ノ鼻(2)遺跡出土の火山灰について	74
--------------------	----

第5章 総括

引用・参考文献	79
---------	----

遺物観察表	80
-------	----

写真図版	85
------	----

報告書抄録	125
-------	-----

図版目次

図1 遺跡位置図	2
図2 遺跡範囲・路線図	4
図3 グリッド・基準点配置図	6
図4 周辺の遺跡	8
図5 遺構配置図	12
図6 基本層序	13
図7 第1号竪穴建物跡・出土遺物(1)	15
図8 第1号竪穴建物跡出土遺物(2)	16
図9 第2号竪穴建物跡・出土遺物(1)	17
図10 第2号竪穴建物跡出土遺物(2)	18
図11 第3号竪穴建物跡・出土遺物(1)	20
図12 第3号竪穴建物跡出土遺物(2)	21
図13 第4号竪穴建物跡	22
図14 第4号竪穴建物跡出土遺物(1)	23
図15 第4号竪穴建物跡出土遺物(2)	24
図16 第4号竪穴建物跡出土遺物(3)	25
図17 第4号竪穴建物跡出土遺物(4)	26
図18 第5号竪穴建物跡(1)	27
図19 第5号竪穴建物跡(2)	28
図20 第5号竪穴建物跡出土遺物	29
図21 第6号竪穴建物跡(1)	31
図22 第6号竪穴建物跡(2)	32
図23 第6号竪穴建物跡出土遺物(1)	33
図24 第6号竪穴建物跡出土遺物(2)	34
図25 第6号竪穴建物跡出土遺物(3)	35
図26 第6号竪穴建物跡出土遺物(4)	36
図27 第7号竪穴建物跡(1)	38
図28 第7号竪穴建物跡(2)	39
図29 第7号竪穴建物跡出土遺物(1)	40
図30 第7号竪穴建物跡出土遺物(2)	41
図31 第7号竪穴建物跡出土遺物(3)	42
図32 第8号竪穴建物跡・出土遺物	44
図33 土坑(1)	52
図34 土坑(2)	53
図35 土坑(3)	54
図36 土坑出土遺物(1)	55
図37 土坑出土遺物(2)	56
図38 土坑出土遺物(3)	57
図39 土坑出土遺物(4)	58
図40 沢跡	59
図41 沢跡出土遺物(1)	60
図42 沢跡出土遺物(2)	61
図43 沢跡出土遺物(3)	62
図44 沢跡出土遺物(4)	63
図45 沢跡出土遺物(5)	64
図46 遺構外出土遺物(1)	68
図47 遺構外出土遺物(2)	69
図48 遺構外出土遺物(3)	70
図49 遺構外出土遺物(4)	71
図50 遺構外出土遺物(5)	72
図51 遺構外出土遺物(6)	73

表目次

表1 周辺の遺跡一覧	11
表2 SI07床面Pit計測表	37
表3 土器観察表	80
表4 石器・石製品観察表	82
表5 鉄製品観察表	84

写真目次

卷頭図版 1 上段 猪ノ鼻(2)遺跡から 南西方向を望む	写真29 土坑(5).....	113
下段 南側調査区全景	写真30 沢跡.....	114
卷頭図版 2 上段 繩文土器、剥片石器、 土師器、須恵器	写真31 壺穴建物跡出土遺物(1).....	115
下段 沢跡出土縄石器	写真32 壺穴建物跡出土遺物(2).....	116
写真1 遺跡位置.....	写真33 壺穴建物跡出土遺物(3).....	117
写真2 調査区全景(1).....	写真34 壺穴建物跡出土遺物(4)、 燒土跡出土遺物.....	118
写真3 調査区全景(2).....	写真35 壺穴建物跡出土遺物(5).....	119
写真4 調査前現況、作業状況、基本層序	写真36 壺穴建物跡出土遺物(6)、 土坑出土遺物(1).....	120
写真5 壺穴建物跡(1).....	写真37 土坑出土遺物(2)、 沢跡出土遺物(1).....	121
写真6 壺穴建物跡(2).....	写真38 沢跡出土遺物(2).....	122
写真7 壺穴建物跡(3).....	写真39 遺構外出土遺物(1).....	123
写真8 壺穴建物跡(4).....	写真40 遺構外出土遺物(2).....	124
写真9 壺穴建物跡(5).....		
写真10 壺穴建物跡(6).....		
写真11 壺穴建物跡(7).....		
写真12 壺穴建物跡(8).....		
写真13 壺穴建物跡(9)、焼土跡(1).....		
写真14 壺穴建物跡(10)、焼土跡(2).....		
写真15 壺穴建物跡(11).....		
写真16 壺穴建物跡(12)、焼土跡(3).....		
写真17 壺穴建物跡(13).....		
写真18 壺穴建物跡(14).....		
写真19 壺穴建物跡(15).....		
写真20 壺穴建物跡(16).....		
写真21 壺穴建物跡(17).....		
写真22 壺穴建物跡(18).....		
写真23 壺穴建物跡(19).....		
写真24 壺穴建物跡(20).....		
写真25 土坑(1).....		
写真26 土坑(2).....		
写真27 土坑(3).....		
写真28 土坑(4).....		

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

一般国道45号天間林道路建設事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、青森県文化財保護課（以下、文化財保護課）と国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所及び青森県県土整備部道路課（以下、事業者）が平成25年度から継続的に協議および現地踏査を行っており、状況が整い次第、文化財保護課が試掘・確認調査を実施してきた。

猪ノ鼻(2)遺跡は平成29・30年度に行われた文化財保護課による試掘調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が確認され、平成30年度に周知の埋蔵文化財包蔵地として新規に登録された。同年度に文化財保護課と事業者が協議し、平成31年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行うこととなった。

文化財保護法第94条第1項による土木工事等のための発掘に関する通知は、青森河川国道事務所長から平成31年3月13日付け国東整青二調第56号で提出され、これを受けて工事着手前の発掘調査の実施が、青森県教育委員会教育長から平成31年3月20日付け青教文第1886号で通知されている。

なお、本遺跡のほか、本事業では平成28年度からこれまでに、後平(1)・後平(2)・後平(3)・後平(4)、猪ノ鼻(1)、舟場向川久保(2)遺跡の発掘調査が行われている（図1）。

第2節 調査の方法

I 発掘調査の方法

包含層の有無や遺構密度等を確認するためトレンチ調査を先行させた。遺構・包含層を検出後は遺構の構造や遺物の構成を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定〕測量基準点及び水準点の設置は委託業者が行った。基準点はスタティック法によるGPS測量で設置された4級基準点・水準点を元にして、任意のグリッドに基準点等を設置した。調査区内における、公共座標軸と位置関係、及び主要基準点についてはグリッド・基準点配置図（図3）に示した。グリッドは国土座標（世界測地系）X=84560・Y=28140を起点として4×4mで設定した。グリッド名は南から北へ算用数字、西から東へアルファベットを組み合わせた名称を付し、その南西隅の組み合わせで呼称した。

〔基本土層〕基本土層については表土から順にローマ数字をつけて呼称し、細分が必要な場合は小文字のアルファベットを付した。

〔表土等の調査〕文化財保護課が実施した確認調査、及びトレンチ調査の結果を踏まえ、状況を確認しながら重機を使用し、掘削の省力化を図るように努めた。

〔遺構の調査〕検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的に4分割又は2分割で設定した。なお、遺構の重複や付属施設が検出された場合は必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付ける基本土層と区別した。遺構測量に関しては業者に委託しており、遺構平面図、地形測量、セクションの図化などについて、3Dスキャナーを用いた「3Dレーザースキャナー計測」などを行った。現場職員は遺構平面図などをトータルステーションを用いて計測した

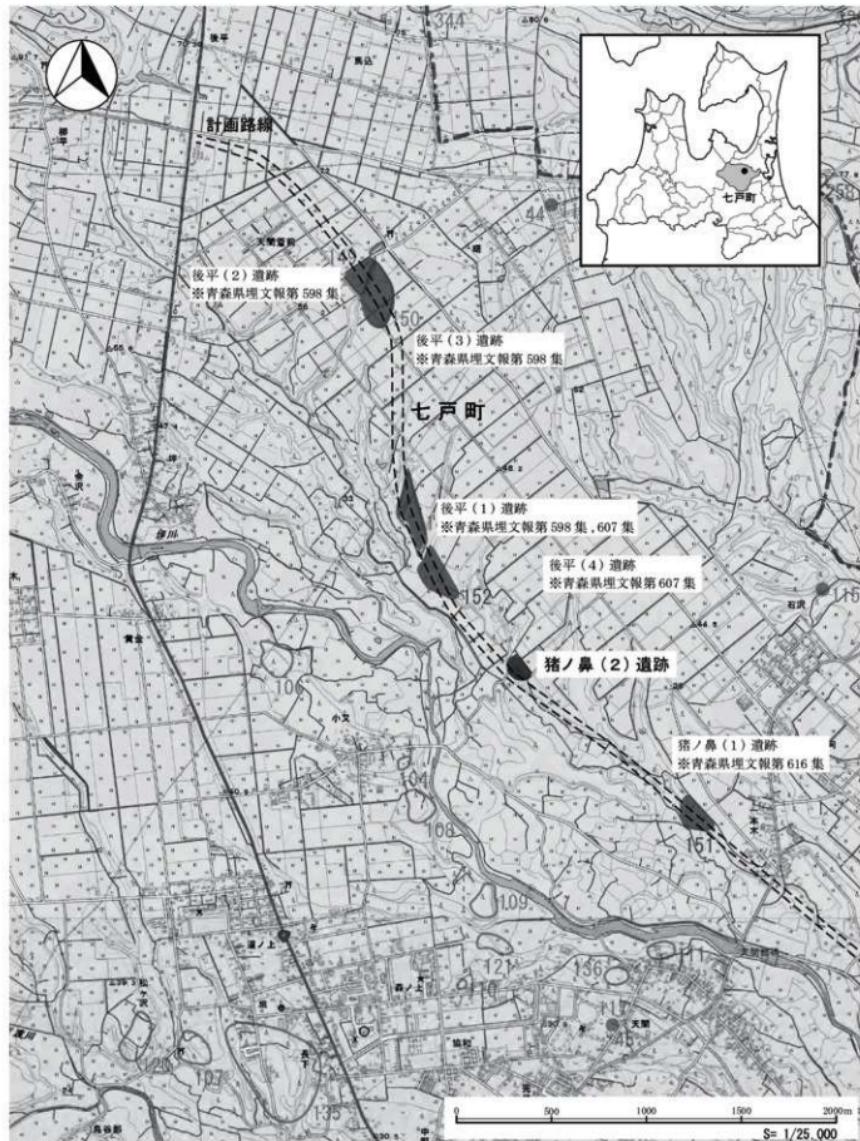


図1 遺跡位置図

ほか、簡易遣り方測量で断面図や遺物の微細図などを作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位ごと又は堆積土一括で取り上げたが、床面・底面の出土遺物については、必要に応じて縮尺1/10、1/20のドットマップ図や形状実測図等を作成した。

〔遺物包含層の調査〕層位ごとに人力で掘削した。遺物は散発的な出土状況である事から、原則としてグリッド単位で層位ごとに取り上げた。

〔写真撮影〕35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び約1800万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ドローンによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影も行った。

2 整理・報告書作成作業の方法

猪ノ鼻(2)遺跡では、堅穴建物跡8棟、土坑21基が検出され、縄文時代、弥生時代、統縄文時代、奈良・平安時代の土器・石器類が段ボール箱で24箱出土した。

整理・報告書作成作業は、主に縄文時代における集落の時期と構造等を解明するため、堅穴建物跡をはじめとする各遺構の構築時期や性格等の検討に重点をおいた。

〔図面類の整理〕遺構の平面図は、「3Dレーザースキャナー計測」やトータルステーションで作成された測量データを、株式会社CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）で読み込み、整理を行った。堅穴建物跡や土坑などは原則として縮尺1/20で図化し、簡易遣り方測量等で作成した土層断面図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕35mmモノクロームフィルムは撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理を行い、ハードディスク・DVD等に保存した。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕遺構内出土遺物を優先的に接合し、復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等も留意しながら行った。

〔報告書掲載遺物の選別〕遺物全体の分類を適切に行つた上で、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕充分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。土器の中で、拓本で表現しきれない文様・調整等の凹凸がある遺物については実測図を作成した。また、種別毎に遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕業者に委託して行い、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔自然科学分析〕火山灰の分析を調査員に依頼して行った（第4章）。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、株式会社CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）、「トレースくん」（遺物実測支援システム）を用いてデジタルトレースを行った。国版の版下作成はAdobe社製Creative Cloudの「PhotoShop」、「Illustrator」、「InDesign」を用いて行った。なお、土器実測図のトレースの一部と遺物写真の

猪ノ鼻(2)遺跡

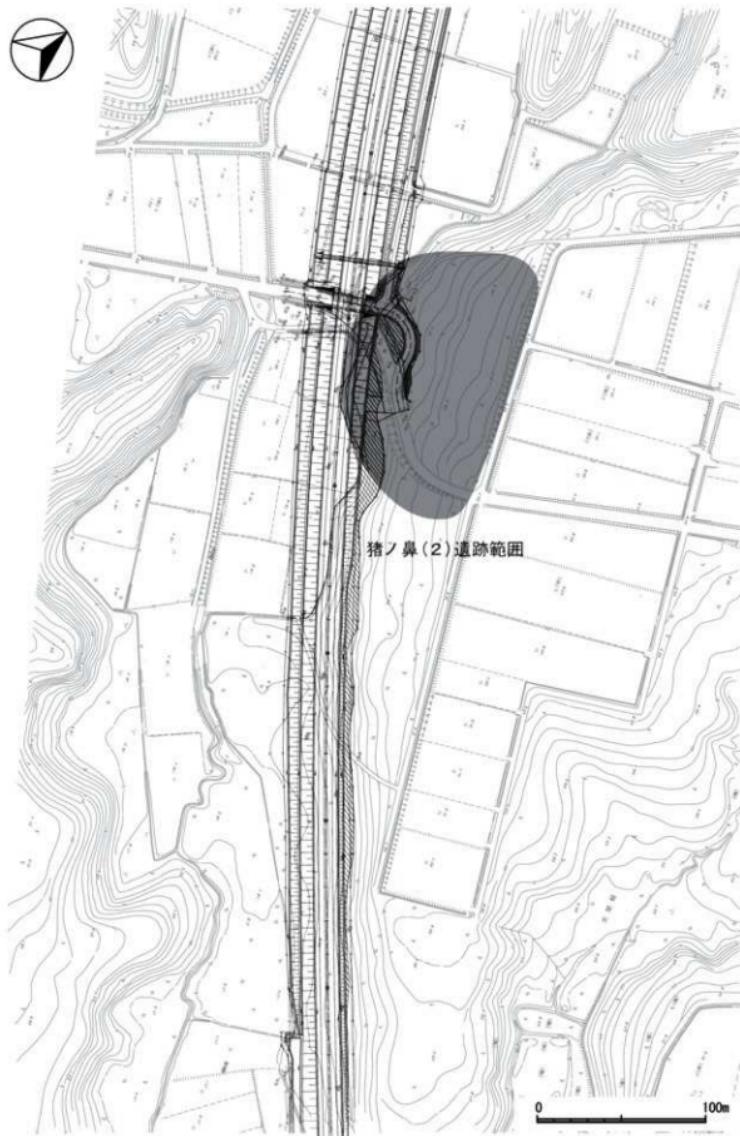


図2 遺跡範囲・路線図

切り抜きは業者に委託して行った。

遺構内出土遺物のうち床面（底面）出土遺物については、必要に応じて遺構の平面図にドットマップ図・形状実測図等を掲載した。

〔遺構の検討・分類・整理〕 遺構ごとに種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕 遺物を時代・時期・種類ごとに整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

第3節 調査の経過

平成31年4月23日～令和元年6月28日までの期間で1,330m²を対象として調査を行った。整理・報告書作成業は写真類や遺構データの整理作業など調査終了後に先行して行ったものもあるが、主として令和2年4月1日～令和3年3月31までの期間で行った。

1 発掘調査の経過

〔調査体制〕

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 鈴木 学 (令和2年3月定年退職
現スポーツ健康課総括主幹専門員)

次長 川村 和夫

調査第一G.M 小田川哲彦 (令和2年3月定年退職
現埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹)

文化財保護主幹 鈴木 和子 (現調査第一G.M)

文化財保護主幹 佐々木雅裕

文化財保護主幹 小山 浩平

専門的事項に関する指導・助言

調査員 藤沼 邦彦 前国立大学法人弘前大学人文学部教授 (考古学)

〃 三浦 圭介 青森中央学院大学非常勤講師 (考古学)

〃 上條 信彦 国立大学法人弘前大学人文社会科学部准教授 (現教授、考古学)

〃 根本 直樹 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

〃 島口 天 青森県立郷土館学芸主幹

(現青森県立郷土館学芸課長、地質学)

〔調査経過〕

4月23日 発掘調査機材を搬入して調査を開始した。

4月下旬 南側調査区から調査を開始した。前年度に文化財保護課が試掘調査を行ったトレンチの再調査を優先させた。その結果、土器埋設炉を再検出したほか、平安時代の所産と思われる火山灰が集中している箇所などを検出し、縄文時代と平安時代の複合遺跡である可能性が想定された。

5月上旬 南側調査区の表土剥ぎを、重機を使用して進めた。その間、北側調査区のトレンチ調査を進め、遺物包含層の有無など内容把握に努めた。重機による掘削終了後は人力で検

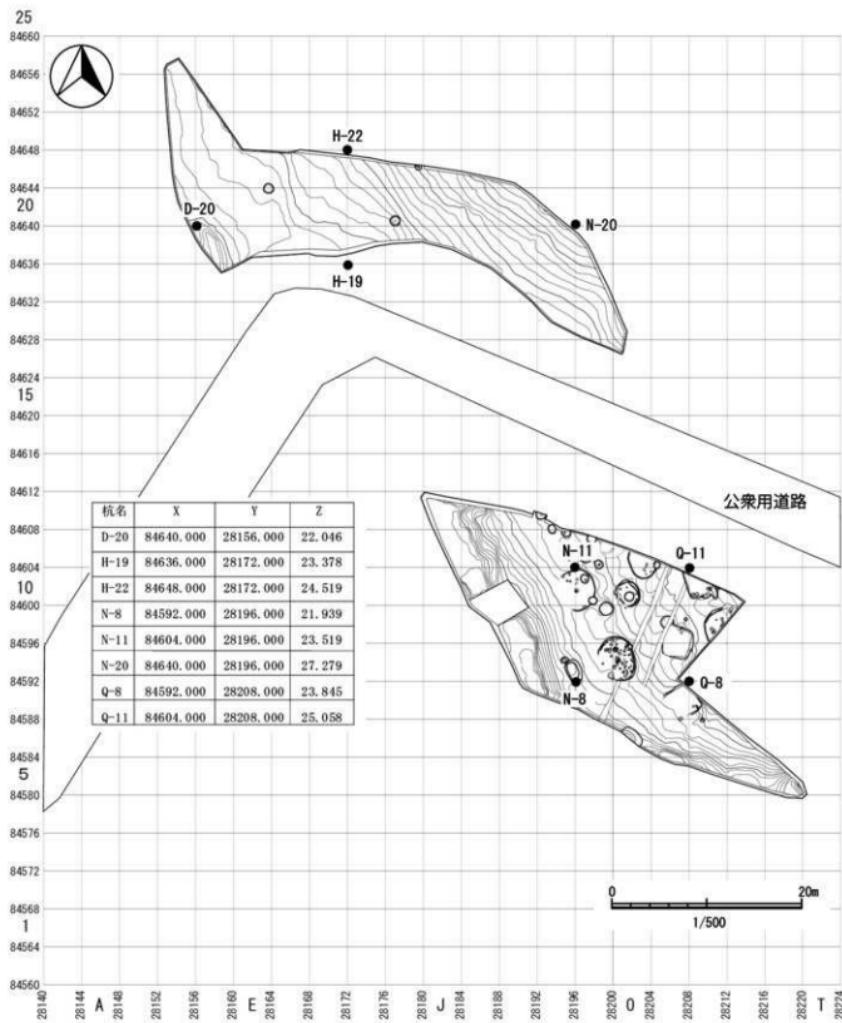


図3 グリッド・基準点配置図

出作業を行い、堅穴建物跡、土坑などを検出したほか、調査区の西側で、比高2m以上ある沢跡を検出した。掘削土量の多さや湧水などで調査が難航することが見込まれたため、沢跡から精査を開始した。

- 5月下旬 北側調査区の表土剥ぎを、重機を使用して進めた。掘削終了後に検出作業を行った結果、土坑3基を検出し、5月中旬に調査を終了した。
- 6月 南側調査区の調査を再開した。5月中旬に沢跡の調査がほぼ終了したことから、台地上の遺構精査を中心に進めた。根本調査員(弘前大学大学院理工学研究科講師)から地形・地質についての現地鑑定を受けた。
- 6月27日 同じ事業で調査を行っている猪ノ鼻(1)遺跡へ調査器材等の移動を行った。
- 28日 全ての作業を終了し、撤収した。

2 整理・報告書作成作業の経過

[整理体制]

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	佐藤 植人
次長	川村 和夫
調査第一GM	鈴木 和子
文化財保護主幹	小山 浩平
文化財保護主幹	小田川哲彦

[整理・報告書作成作業の経過]

- 4~8月 遺構やグリッド、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。計測作業の終了後、遺構・グリッドごとに土器類の接合作業を行い、その後復元作業を行った。遺物の検討・分類・整理作業を経て、報告書掲載予定遺物を選定した。選定された遺物には種別の整理番号を付し、遺物台帳を作成した。遺構の図面調整を開始した。
- 遺物の拓本作業、実測作業を実施した。また、石器実測の委託を行い、佐々木実氏(弘前大学大学院理工学研究科講師)に火山灰分析の原稿執筆を依頼した。
- 9~12月 繰石器の実測を開始した。修正・図化作業が完了した遺構・遺物のトレースを行った。有限会社無限に委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。図面の版下作成を行なながら遺構一覧表を作成し、各遺構の所見をまとめた。修正・図化トレースがまとまった遺構から、版組を開始した。
- 12~2月 調査成果を総合的に検討しながら原稿や遺構・遺物図版、写真図版等を作成し、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月10日 校正を経て報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類・出土品を整理して収納し、全ての整理作業を完了した。

(小山)

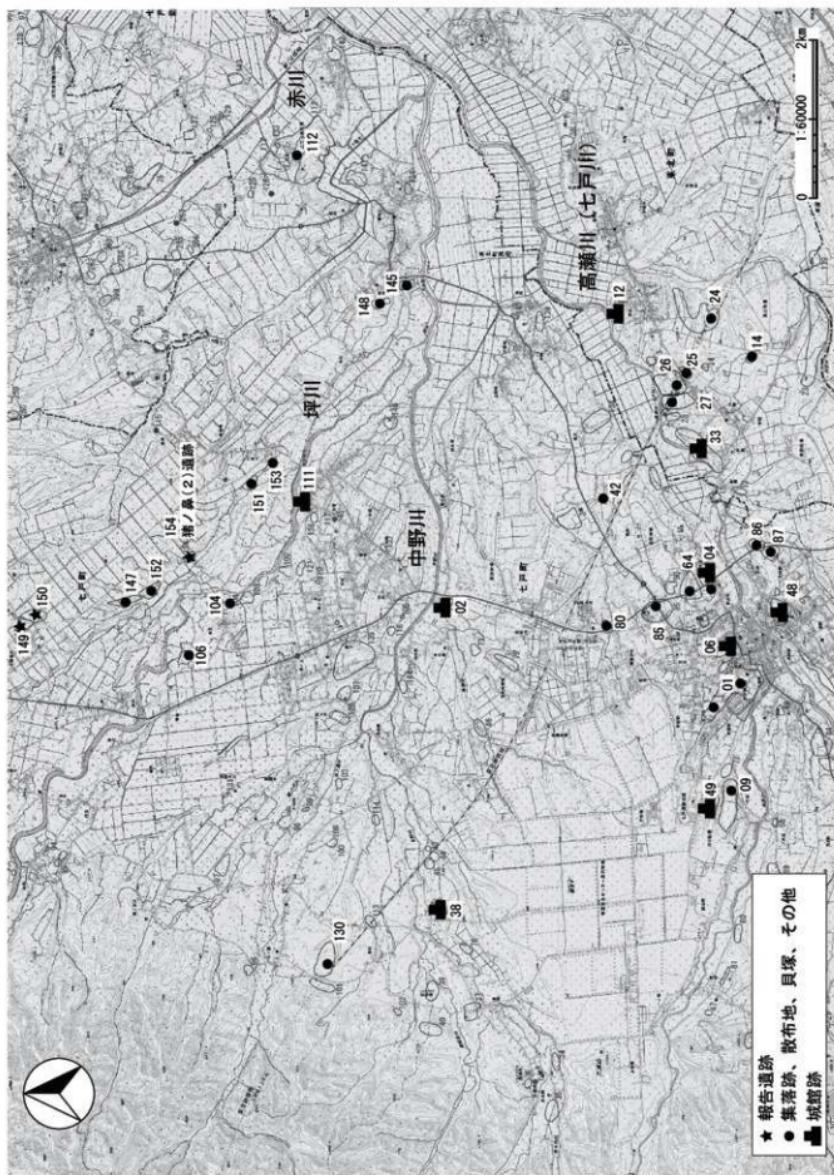


図4 周辺の遺跡

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の歴史的環境

七戸地域は小川原湖へと注ぐ坪川、中野川、赤川、高瀬川が流れしており、これらに面した台地上には、多くの遺跡が分布している（図4）。縄文時代、または平安時代の遺跡が多いが、弥生時代や中世の遺跡もみられ、縄文時代以降断続的に遺跡が営まれてきた地域といえる。

猪ノ鼻（2）遺跡は七戸町中心街から北へ9kmほど行った坪川中流域の台地上に所在している。流域上には国史跡二ツ森貝塚（縄文時代）（図4-112）や、国立歴史民俗博物館が学術調査を行った森ヶ沢遺跡（弥生時代～古墳時代）（図4-104）が所在するなど考古学的に注目されていた地域でもある。しかし、著名な遺跡はあるものの、本流域周辺はこれまで遺跡の空白域であり総体的な状況は不明な点が多かった。それが、一般国道45号天間林道路建設事業に伴い、本遺跡のほかに後平（1）、（2）、（3）、（4）遺跡、猪ノ鼻（1）遺跡、舟場向川久保（2）遺跡が、新たに発見・登録され、本発掘調査が行われたほか、本事業に関連する周辺の開発事業に伴い夷堂遺跡、塚長根遺跡の本発掘調査も行われており、考古学的状況が明らかとなってきている。ここでは、これまでの調査成果を概観する。

夷堂遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第590集）

縄文時代の土坑8基、溝状土坑19基、平安時代の堅穴建物跡41棟、掘立柱建物跡4棟、柱穴列8基、土坑41基、溝跡9条、焼成遺構13基が検出され、縄文時代には狩猟場、平安時代には集落跡であったことが明らかとなった。集落跡は9世紀後半～11世紀前半にかけて存続したと考えられる。10世紀後半になると集落内において精鍛または鍛錆鍛冶炉などの鍛冶遺構や、鉄滓、羽口などの遺物が急増していることが明らかとなり、本集落の生業が鉄生産に大きく転換したことが推察された。

塚長根遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第590集）

縄文時代の溝状土坑16基を検出し、狩猟場として使用されていたことが明らかとなった。

後平（1）遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第598集）

縄文時代の堅穴建物跡4棟、フラスコ状土坑2基、円形で底面に逆茂木痕を有する土坑4基、溝状土坑12基、弥生時代の可能性が考えられる堅穴建物跡1軒、統繩文時代の土坑5基が検出された。遺物は縄文時代中期後葉～後期前葉の土器を主体として、弥生時代前期、中期後葉～後期、後北C2・D式土器、これらに伴う剥片石器、礫石器などが出土した。検出された縄文時代の堅穴建物跡はいずれも中期後葉～後期前葉期のものと考えられる。

後平（2）遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第598集）

土坑3基、溝状土坑3基が検出された。遺物は縄文時代早期中葉～後葉、後期前葉の土器と石器が出土した。土坑のうち1基は平面形が円形で底面に逆茂木痕を有しており、落とし穴と考えられている。

後平（3）遺跡（青森県埋蔵文化財報告書第598集）

土坑1基が検出された。11世紀中頃～12世紀後半の放射性炭素年代測定結果が得られている。

後平（4）遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第607集）

縄文時代の土坑14基、溝状土坑9基、平安時代の堅穴建物跡3棟が検出された。土坑は底面に逆茂木痕を有することなどから円形の落し穴とされている。縄文時代は狩猟場、平安時代は集落跡であったことが明らかとなった。なお、非ロクロ成形の皿形坏が複数出土した堅穴建物跡も検出されている。遺物は、早期中葉～後期、弥生時代の土器が出土しているが、破片資料であり、出土量も僅少である。

猪ノ鼻(2)遺跡（本報告書）

縄文時代中期前葉～中葉の堅穴建物跡5棟、縄文時代の土坑17基、奈良・平安時代の堅穴建物跡3棟、土坑3基、時期不明の土坑1基が検出された。遺物は縄文時代中期のものを主体として、弥生土器、続縄文時代の後北C2・D式土器、土師器などが出土している。

猪ノ鼻(1)遺跡（令和3年3月刊行予定、青森県埋蔵文化財調査報告書第616集）

報告書が今後刊行予定であるため（令和3年3月）これまで公開されてきた内容を記す。堅穴建物跡54棟（縄文時代後期中葉～後葉17棟、奈良～平安時代15棟、平安時代22棟）、土器埋設遺構2基（縄文時代早期）、堅穴状遺構3基（平安時代）、土坑89基（縄文時代の円形落し穴35基、古墳時代の土坑墓6基、奈良～平安時代14基、時期不明34基）、溝跡2条（中世以降）、柱穴・小穴972基（縄文時代～近世）、焼土遺構2基（時期不明）、掘立柱建物跡10棟（縄文時代～中近世）、カマド状遺構3基（中世）、井戸跡1基（近世）などが検出された。

舟場向川久保(2)遺跡（令和3年度以降刊行予定）

報告書が今後刊行予定であるため（令和3年度以降）これまで公開されてきた内容を記す。縄文時代の円形落し穴55基、弥生時代中期の土器埋設遺構1基、平安時代の堅穴建物跡1棟および円形周溝1条、時期不明の土坑墓9基などが検出された。円形落し穴は、台地の縁辺上に整然と並んで確認された。土坑墓の詳細な時期については不明だが、細型管玉が約130点出土した土坑であること、確認面付近から弥生時代と考えられる土器が出土したことなどから、弥生時代中期に帰属する可能性がある。遺物は縄文～弥生時代の土器や後北C2・D式土器、土師器、石器類、管玉等が段ボール箱で約6箱分出土した。

調査によって明らかとなった坪川中流域の状況

本流域に初めて人間活動の痕跡を確認できるのは、縄文時代早期中葉からである。早期～前期前葉までは落し穴が多数発見されており、台地縁辺部が狩猟場として使用されていたことがうかがわれる。集落としては前期後葉、円筒下層式期の堅穴建物跡が二ツ森貝塚で検出されたのが初見となる。その後、二ツ森貝塚では中期になると集落が拡大していき、中期末葉頃に最盛期を迎えるようである。他の遺跡では中期前葉～中葉、円筒上層式期の堅穴建物跡が本遺跡から、中期末葉～後期前葉期の堅穴建物跡が後平(1)遺跡から検出された。続く後期中葉～後葉期には猪ノ鼻(1)遺跡で大規模な集落跡が検出されている。しかし、晩期になると遺構・遺物がほとんど発見されなくなる。

続く弥生時代になると遺物が散見し始める。前期よりも中期から後期の遺物が多く出土する傾向にある。遺構は坪川流域の森ヶ沢遺跡で弥生時代前期の土坑2基、中期の土器棺土坑墓が1基検出されたほかに、舟場向川久保遺跡では弥生時代中期の土器埋設遺構が検出され、当該期のものと考えられる土坑墓も検出されている。なお、土坑墓から130点もの管玉が多出した事例があり、玉の流通や交易の状況を考える上で大きな発見である。縄文時代晩期から弥生時代前期までは活動の痕跡が希薄だったにもかかわらず、突如として高い交易力を持った集団が現れるのは興味深い。弥生時代の終末期から古墳時代前期にかけて（3世紀代）は、森ヶ沢遺跡、後平(1)遺跡、猪ノ鼻(1)遺跡から遺構と遺物が発見されている。いずれも北海道系の土器である後北C2・D式が出土しており、猪ノ鼻(1)遺跡では土坑墓が検出されている。続く古墳時代中期（5世紀代）には森ヶ沢遺跡で土坑墓群とともに北大式土器などの北方系文化、土師器、須恵器、玉類、黒曜石、鉄製品など南方系の文化的ものが発見されており、盛んな交易を行なう事ができた集団の存在が想定される。しかし、本流域ではこれ以後8世紀後半に至るまで、七戸地域全体でみても7世紀中葉代まで遺構・遺物は発見されていない。

8世紀後半になると猪ノ鼻(1)遺跡で堅穴建物跡が検出され始める。猪ノ鼻(2)遺跡でも8世紀中頃～9世紀初頭の堅穴建物跡が検出されている。その後、9世紀後半以降に集落が増加する傾向があ

り、特に10世紀後半になると飛躍的に増加する。また、この時期には夷堂遺跡のように集落に堀や大溝を巡らす事例が増えるほか、鉄生産に大きな画期を迎える事になる。10世紀前半までは集落内で鍛錬鍛冶を行う程度であったものが製錬・精錬鍛冶が行われるようになる。夷堂遺跡では、精錬鍛冶炉が発見されており、集落内で精錬から鍛冶まで行われていたことが明らかとなった。また、猪ノ鼻(1)遺跡では鍛冶炉を有する竪穴建物跡は検出されなかつたが、製鉄関連の遺物が出土し始めるのは10世紀後半以降の竪穴建物跡からであり、夷堂遺跡の状況と符合する。このような状況から10世紀後半以降に鉄生産の技術を有する集団が当地域に流入してきたことが想定される。なお、夷堂遺跡では詳細な時期は不明であるが、集落の最終段階において区画溝と柱穴、鍛冶炉で構成される工房が構築されるようになる。

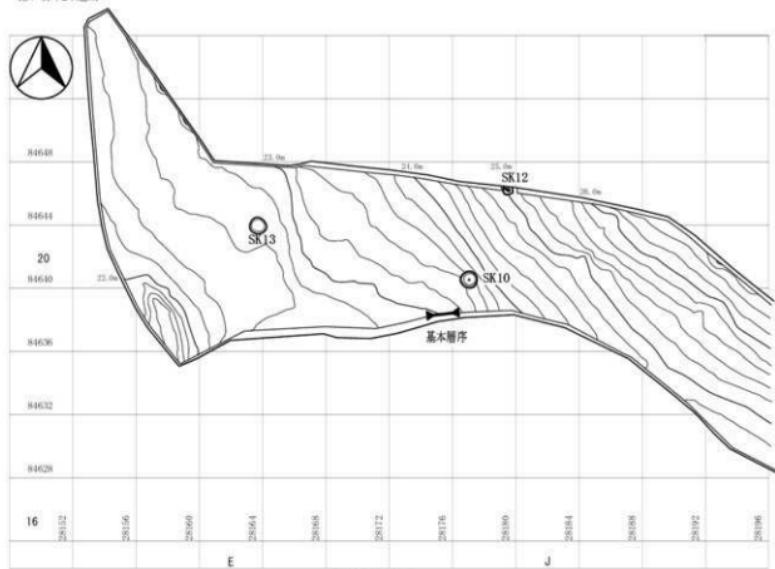
(小山)

表1 周辺の遺跡一覧

流域	遺跡番号	遺跡名	時代	種別	所轄
坪川	402147	後平(1)遺跡	縄文、弥生	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第599集
	402149	後平(2)遺跡	縄文	散布地	
坪川	402150	後平(3)遺跡	縄文	散布地	天間林村文化財調査報告書第10集
	402106	大平遺跡	縄文、平安	集落跡	
坪川	402111	家ノ下遺跡 (天間館)	平安、中世	城郭跡	天間林村文化財調査報告書第9集
坪川	402112	二ツ森貝塚	縄文、平安	集落跡 貝塚	七戸埋蔵文化財調査報告書第71集ほか
坪川	402104	森ヶ沢遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	散布地	国立歴史民俗博物館研究報告第143集、144集
坪川	402152	後平(4)遺跡	縄文、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第607集
坪川	402154	猪ノ森(2)遺跡	縄文、奈良、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第617集
坪川	402153	舟場向川久保(2)遺跡	縄文、弥生	集落跡	令和2年度調査
坪川	402151	猪ノ森(1)遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第616集
坪川	402148	坂手根遺跡	縄文	その他 散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書第590集
坪川	420145	夷堂遺跡	縄文、平安、中世	散布地	七戸埋蔵文化財調査報告書第30集
高瀬川	402042	野森(2)遺跡	弥生、奈良	集落跡	七戸埋蔵文化財調査報告書第15集ほか
高瀬川	402001	貝ノ口遺跡 (現七戸城跡)	縄文、奈良、平安、中世、近世	集落跡 城郭跡	七戸埋蔵文化財調査報告書第15集ほか
高瀬川 (作田川)	402009	作田遺跡 (現作田(1)遺跡)	縄文、弥生	集落跡	七戸埋蔵文化財調査報告書第5集ほか
高瀬川	402080	大沢遺跡	縄文、弥生	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書第417集
高瀬川	402085	寒水遺跡	縄文、平安	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書第417集
高瀬川	402064	倉越(2)遺跡	縄文、弥生、奈良、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第389集、417集
高瀬川	402004	大池遺跡	縄文、弥生、奈良、平安、中世	集落跡 城郭跡 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第389集、417集
高瀬川	402086	太田野(2)遺跡	縄文、弥生、平安、近世	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第427集
高瀬川	402087	太田野(3)遺跡	縄文、弥生、平安、中世、近世	散布地 集落跡 その他	青森県埋蔵文化財調査報告書第427集
高瀬川	408024	大坊頭遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、近世	散布地 集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第449集
高瀬川	408025	赤平(1)遺跡	縄文、奈良、平安	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書第449集
高瀬川	408026	赤平(2)遺跡	縄文、弥生、平安、中世、近世	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第438集、449集
高瀬川	408027	赤平(3)遺跡	縄文、弥生、奈良、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第434集、449集
高瀬川	408014	八幡遺跡 (旧十三社遺跡)	奈良、平安、中世	その他 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
高瀬川	402049	作田館跡	中世	城郭跡	青森県の中世城館
高瀬川	402096	矢指跡	縄文、平安、中世	集落跡 城郭跡	青森県の中世城館 七戸町埋蔵文化財調査報告書第2集ほか
高瀬川	402048	坂本館跡	平安、中世	集落跡 城郭跡	青森県の中世城館 七戸町埋蔵文化財調査報告書第2集ほか
高瀬川	408033	戸館	中世	城郭跡	青森県の中世城館
高瀬川	408012	白旗遺跡	平安、中世	城郭跡	青森県の中世城館
中野川	402130	底田(3)遺跡	縄文、平安	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書第290集
中野川	402038	治部袋館遺跡	平安、中世	集落跡 城郭跡	青森県の中世城館 七戸町埋蔵文化財調査報告書11集ほか
中野川	402002	荒熊内(1)遺跡	中世	城郭跡	青森県の中世城館

ゴシックは調査の結果、明らかとなった年代等

猪ノ鼻(2)遺跡



北側調査区

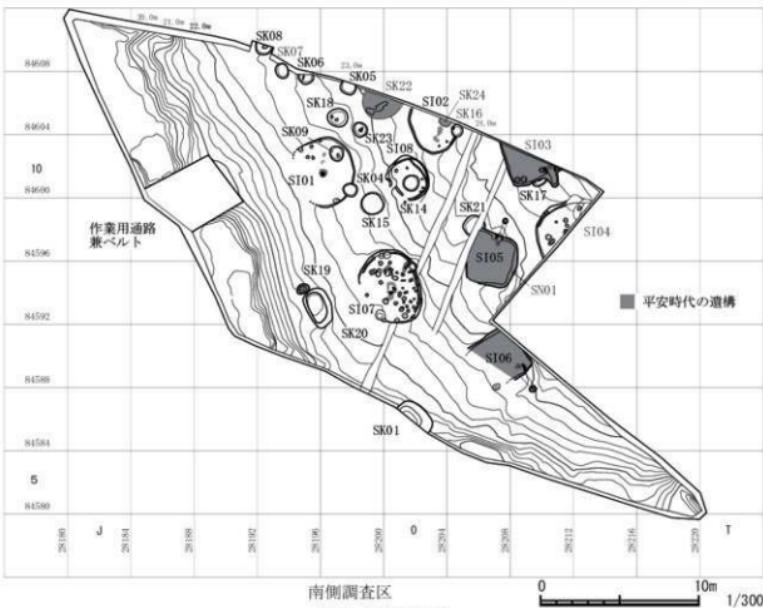


図5 遺構配置図

第2節 基本層序

猪ノ鼻(2)遺跡は坪川中流域の東岸に所在し、地形的には段丘低位面である三本木面の縁に位置している。地形と地質は1kmほど南側に位置する猪ノ鼻(1)遺跡と大差がないことから、調査員による地質原稿は猪ノ鼻(1)遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第616集）にまとめた。本節では地表面から地山面までの土層について取り扱う。

基本層序は北側調査区で観察を行った。観察地点は、北東から南西へ向かって下る傾斜地の低地側にあたる（図6）。各土層の概要は以下の通りである。

第I層 10YR2/2 黒褐色土

表土及び耕作土。

第II層 10YR2/3 黒褐色土

シルト質の黒褐色土を基調として、火山灰（To-aもしくはB-Tm）がブロック状に混在する層。

第III層 10YR1.7/1～2/1 黒色土

中粒浮石と思われる粒径1mmの大砂粒が多く含まれる層である。砂粒の多寡によりIIIa層とIIIb層に細分した。

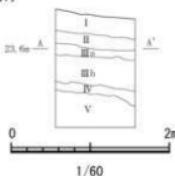
第IV層 10YR2/1 黒色土

粒径5～20mmの大黄色浮石が多量に含まれる層である。

第V層 10YR3/3 暗褐色土

地山である第VI層との漸移層で、ローム質土である。黄色浮石が多量に含まれる。

基本層序



基本層序(A-A')

第I層	10YR2/2	黒褐色土	火山灰ブロック (To-aもしくはB-Tm)3%
第II層	10YR2/3	黒褐色土	
第IIIa層	10YR2/1	黒色土	中粒浮石20%、浮石3%
第IIIb層	10YR1.7/1	黒色土	中粒浮石5%、浮石10%
第IV層	10YR2/1	黒色土	浮石10%
第V層	10YR4/6	褐色土	浮石5%

図6 基本層序

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 堪穴建物跡

南側調査区から縄文時代の堪穴建物跡5棟と奈良・平安時代の堪穴建物跡3棟を検出した。縄文時代の堪穴建物跡は出土遺物から中期前半の円筒上層式期に帰属するものと考えられる。奈良・平安時代の堪穴建物跡はTo-aの堆積状況にそれぞれ違いがある。堆積土上位にレンズ状に堆積するもの(SI05)、下位にレンズ状に堆積するもの(SI03)、ブロック状に二次堆積するもの(SI06)があり、それぞれ埋没時期が異なっている状況が分かる。なお、例言にも記したが、全体形を検出できなかつた遺構は現存値を()表記した。

第1号堪穴建物跡 (SI01、図7、8)

【位置・確認】文化財保護課の試掘調査時に土器埋設炉が検出されている。南側調査区のM・N-9・10グリッドに位置し、標高22.0~22.6m、第IV層で確認した。第4号土坑、第9号土坑と重複し、本遺構の方が古い。

【規模・平面形】斜面下方で壁を検出できなかつたが、平面形は梢円形であったと考えられる。長軸方向はN-22°-Wである。検出面での計測規模は長軸4.16m、短軸(2.78)mである。床面積は(10.04)m²である。

【堆積土】黒褐色土を主体として5層に分層した。ロームブロック等の混入が見られず、自然堆積した様相を示している。

【壁・床面】壁高は東壁32cm、南壁17cm、北壁30cmである。第V層を床面とし、概ね平坦である。

【柱穴・施設】6個の小穴を検出した。建物跡の中軸線上にあるPit2とPit3が主柱穴である可能性もある。それぞれの規模はPit1-33×26cm、深さ27cm、Pit2-42×27cm、深さ26cm、Pit3-20×18cm、深さ21cm、Pit4-20×14cm、深さ24cm、Pit5-21×20cm、深さ18cm、Pit6-22×17cm、深さ15cmである。

【炉】床面ほぼ中央から土器埋設炉、土器埋設炉の北側から焼土1、焼土2を検出した。土器埋設炉は27×(16)cmの掘方に口縁部と底部を欠いた胴部を埋設し、開口部付近に土器片を敷いている。炉体土器(図7-2)と炉内の土器(図7-1)はそれぞれ別の個体が用いられている。炉の周りは49×46cm、最大厚4cmで被熱している。焼土1は27×22cm、最大4cmの厚さで被熱、焼土2は27×(11)cm、最大5cmの厚さで被熱している。

【出土遺物】堆積土中から4,694gの土器と、剥片19点、スリ石1点(図8-4)、礫器1点(図8-5)、台石・石皿類1点(図8-6)の石器が出土した。図8-1、2は堆積土中から出土した口縁部片で円筒上層a式土器に比定される。

【小結】堆積土出土土器から円筒上層a式期に埋没段階にあった遺構と考えられる。また、隣接する第7号堪穴建物跡は出土土器、炉形態、長軸方向が同じであることなどから、本堪穴建物跡と極めて近い時期の遺構と考えられ、併存していた可能性もある。

第2号堪穴建物跡 (SI02、図9、10)

【位置・確認】南側調査区のO・P-10・11グリッドに位置し、標高23.2~24.0m、第IV層で確認した。第16土坑、第24号土坑と重複し、本遺構の方が古い。

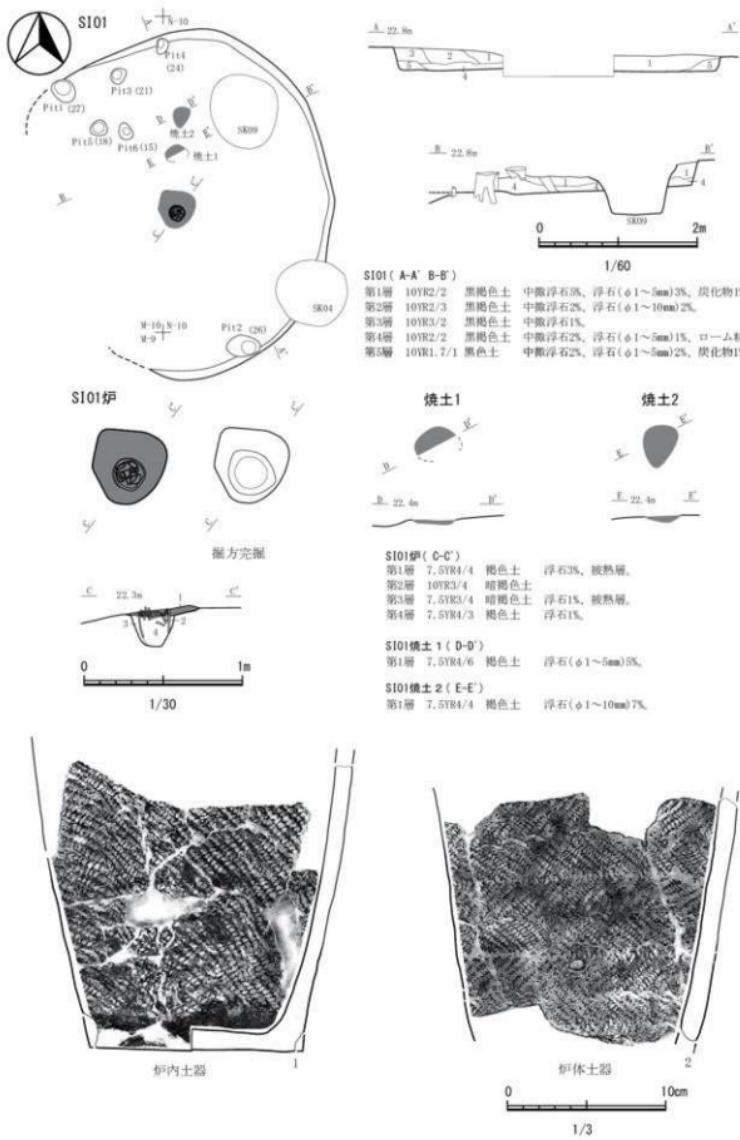


図7 第1号竪穴建物跡、出土遺物(1)

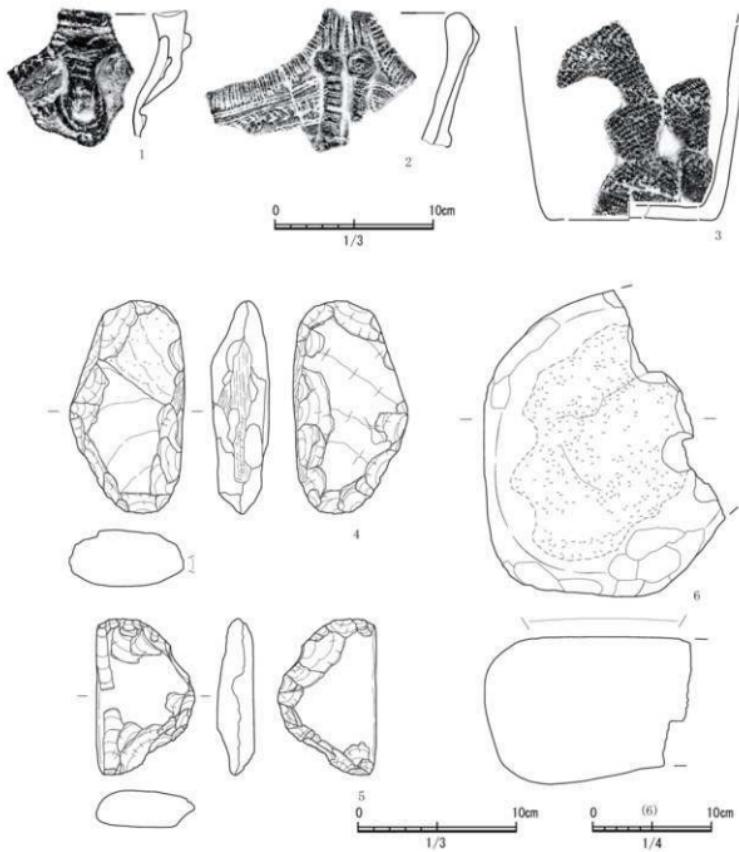
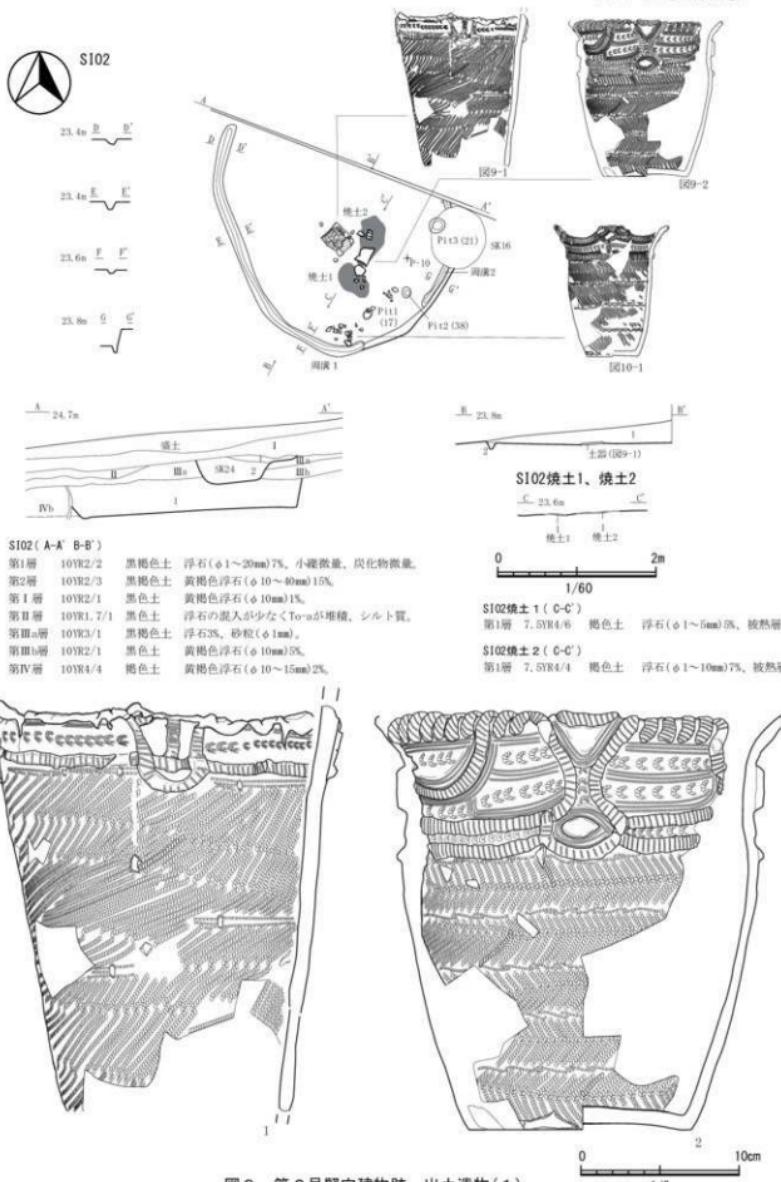


図8 第1号竪穴建物跡出土遺物(2)



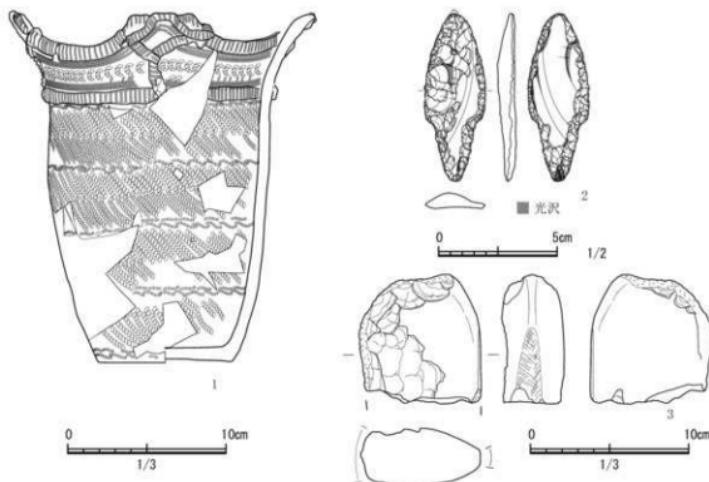


図10 第2号竪穴建物跡出土遺物(2)

【規模・平面形】調査区外へ遺構が延びているため全体形は不明であるが、楕円形を基調としたものと考えられる。長軸方向はN-21°-Wである。検出面での計測規模は長軸が(3.27)m、短軸は2.76mである。床面積は(5.34)m²である。

【堆積土】黒褐色土を主体として2層に分層した。ロームブロック等の混入が見られず、自然堆積した様相を示している。

【壁・床面】斜面下方にあたる南西側の壁は検出できなかった。現存する南東側での壁高は21cmである。第V層を床面とし、概ね平坦である。

【柱穴・施設】3個の小穴と2条の周溝を検出した。検出数が少なく柱穴配置等の詳細は不明である。それぞれの規模はPit1-13×10cm、深さ17cm、Pit2-13×11cm、深さ38cm、Pit3-21×18cm、深さ21cm、周溝1-幅11~15cm、深さ7~10cm、周溝2-幅7~9、深さ8cmである。

【炉】床面中央から若干離れた位置から焼土1、焼土2を検出した。いずれも被熱の度合いは弱い。焼土1は50×26cm、最大2cmの厚さで被熱、焼土2は67×32cm、最大2cmの厚さで被熱している。

【出土遺物】堆積土中から6,865gの土器と、石槍1点(図10-2)、石核1点、剥片13点、スリ石1点(図10-3)の石器が出土した。図9-1、2、図10-1は床面から出土したものである。いずれも口縁部に爪形状の押圧繩文が施されており円筒上層b式土器に比定される。図10-2の石槍は器面中位の表裏両面に光沢が見られる。付着部位から装着痕である可能性もある。

【小結】床面直上出土土器から円筒上層b式期に帰属すると考えられる。

第3号堅穴建物跡 (SI03、図11、12)

【位置・確認】南側調査区のP・Q-10グリッドに位置し、標高24.0～24.8m、第IV層で確認した。第17土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

【規模・平面形】調査区外へ遺構の大半が延びており全体形は不明である。方形を基調としており、主軸方向はS-22°～Eである。検出面での計測規模は長軸(3.27)m、短軸(2.91)mである。床面積は(4.30)m²である。

【堆積土】黒～暗褐色土を主体として8層に分層した。5層と7層で火山灰を検出した。5層は床面を覆うように厚さ8cmでレンズ状に堆積しており、7層ではブロック状のものが堆積していた。これらを分析したところ、いずれもTo-aとの結果が得られた（第4章参照）。

【壁・床面】検出できた壁高は西壁10cm、南壁45cmである。床面は第V層を掘り込んだ後に、埋土による床が貼られ平坦に整えられている。

【柱穴・施設】3個の小穴を検出した。検出数が少なく柱穴配置等の詳細は不明である。Pit 1はカマド脇に位置していることから、カマドに伴う施設であった可能性もある。それぞれの規模はPit1-29×27cm、深さ10cm、Pit2-37×36cm、深さ41cm、Pit3-35×34cm、深さ19cmである。

【カマド】南壁側でカマドを検出した。火床面と両袖が残存していた。袖は白色粘土を用いて構築され、最大17cmの高さで残存し、内側には被熱がみられた。火床面の範囲は32×32cmで、深さ約4cmまで被熱、硬化していた。煙道は半地下式で、煙道底面は床面から約18°の傾斜で緩やかに立ち上がる。長さは約1.2mである。軸方向は建物の軸方向と概ね一致する。

【出土遺物】建物跡の堆積土中から土師器、弥生土器、続繩文時代の土器が215.9g出土した。図11-1、2は土師器甕の口縁部で、1はカマド脇の床面直上から出土したものである。図11-3、4は堆積土中から出土したものである。3は帶繩文風の文様が施されており弥生時代後期に帰属すると考えられる。4は後北C2・D式土器で器面に三角形状の連続刺突が施されている。鉄闘遺物も出土しておりPit1の堆積土からは鉄滓（図11-5）が、カマド袖の検出面からは槍鉈（図12-1）が出土した。

【小結】To-aが床面を覆うように堆積していたことや、出土遺物などから、9世紀後半～10世紀前葉の建物跡とみられる。

第4号堅穴建物跡 (SI04、図13～17)

【位置・確認】南側調査区のQ・R-9グリッドに位置し、標高24.0～24.8m、第IV層で確認した。遺構の大半が調査区外へ延びているほか、北側の一部が搅乱されており、全体形及び長軸方向は不明である。床面が同位置で重なるように2面検出されたことから、本建物跡は短期間での建て替えが行われたものと考えられる。以下に新段階と古段階に分けて記載する。

（新段階）

【規模・平面形】円形を基調としている。検出面での計測規模は長軸(4.43)m、短軸(1.93)mである。床面積は(5.18)m²である。

【堆積土】黒褐色土を主体として4層に分層した。ロームブロック等の混入が見られず、自然堆積した様相を示している。4層は被熱層である。

【壁・床面】検出できた壁高は、北東壁38cm、北西壁15cmである。古段階建物跡の埋土を床面としている。床面は比較的堅くなつており、概ね平坦である。

【柱穴・施設】検出されなかった。

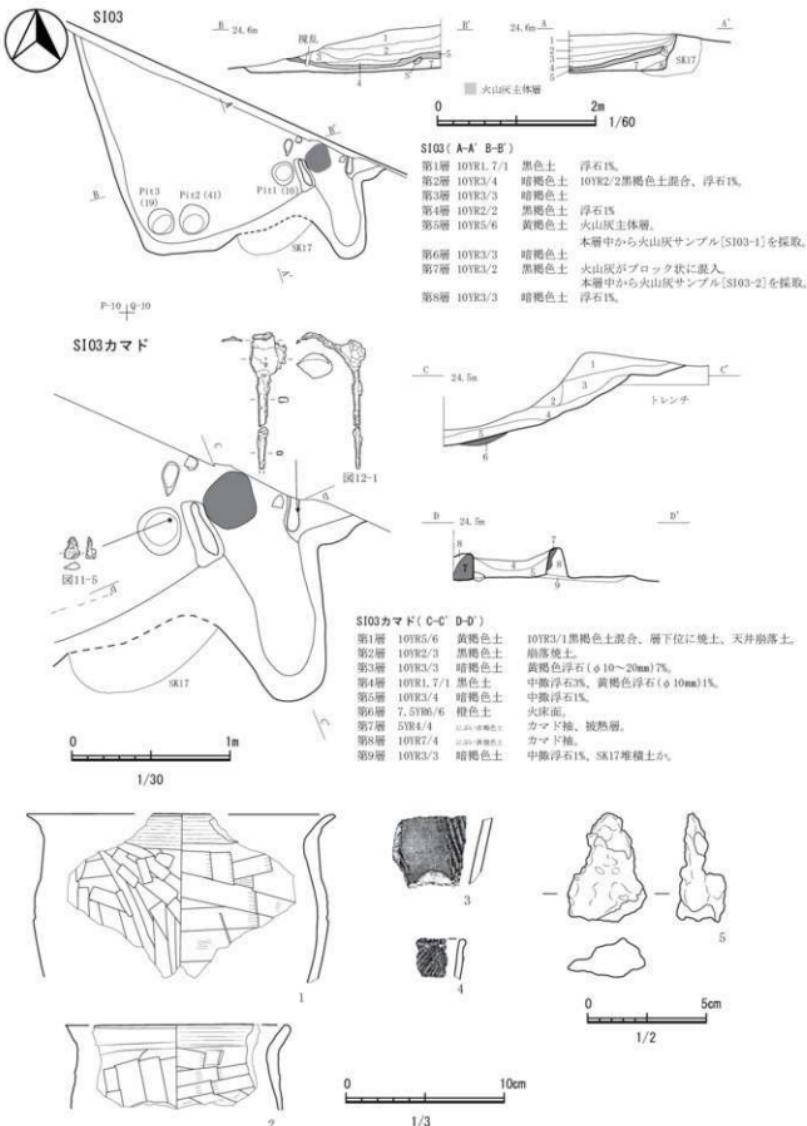


図11 第3号竪穴建物跡、出土遺物(1)

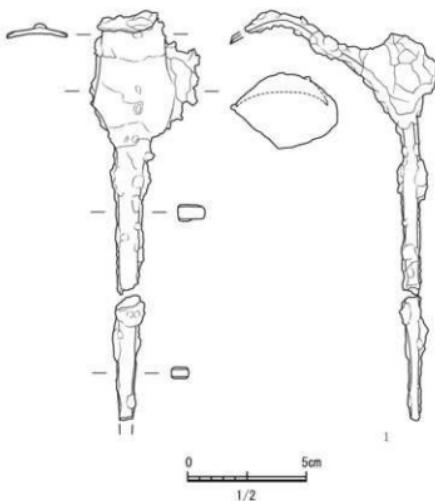


図12 第3号竪穴建物跡出土遺物(2)

〔炉〕床面中央に位置すると思われる場所から地床炉を検出した。規模は(40)×(20)cm、最大6cmの厚さで被熱している。

〔出土遺物〕堆積土中から1,398gの土器と、石鏟1点(図15-3)、石錐1点(図15-6)、両面調整石器4点(図15-4、5、8、9)、石核3点(図15-10、図16-1)、剥片32点(図16-2~4)、礫器1点(図17-1)、蔽石1点(図17-2)の石器が出土した。図14-1は堆積土上位から出土したものである。円筒上層d式土器に比定されるもので、地文として繩文が回転施文された後に粘土紐による細い隆帯が貼り付けられている。粘土紐の脇に、刻線が描かれている箇所を複数確認した。文様というより貼り付ける前の下書きとして記されたものと考えられる。また、1は口縁が大きく湾曲した器形をしている。口縁を水平にしてみると側面が大きく傾き、現存する器長では自立しない。仮に自立するとしたら非常に大型な浅鉢状の器形となるはずであるが、文様帯の構成は深鉢と変わらないことを勘案し、大きく湾曲した口縁の深鉢形土器と判断した。図15-8、9はいずれも長さが11cmを超える短冊形をしている。このうち8は両端部の縁辺が摩滅し、周辺には光沢が付着している。9の端部は摩滅していないが装着痕と思われる光沢が器体中位に付着している。2点共に器形の大きさなどから打製石斧的な使用をされた石器であると考えられる。図16は床面上から出土した石核と剥片の接合資料である。接合したのは4点であるが、同一母岩と思われる剥片が他にも出土している。図16-1の石核は剥片を得るのに適した角度を有した面が残存している。なお、本遺跡では石核の占める割合が高めである。地質調査員である根本直樹講師によると遺跡周辺には珪質頁岩を含む和田川層が存在しており、比較的の石材を入手しやすい環境があったと考えられる。

〔小結〕出土土器から円筒上層d式期に埋没段階にあった遺構と考えられる。

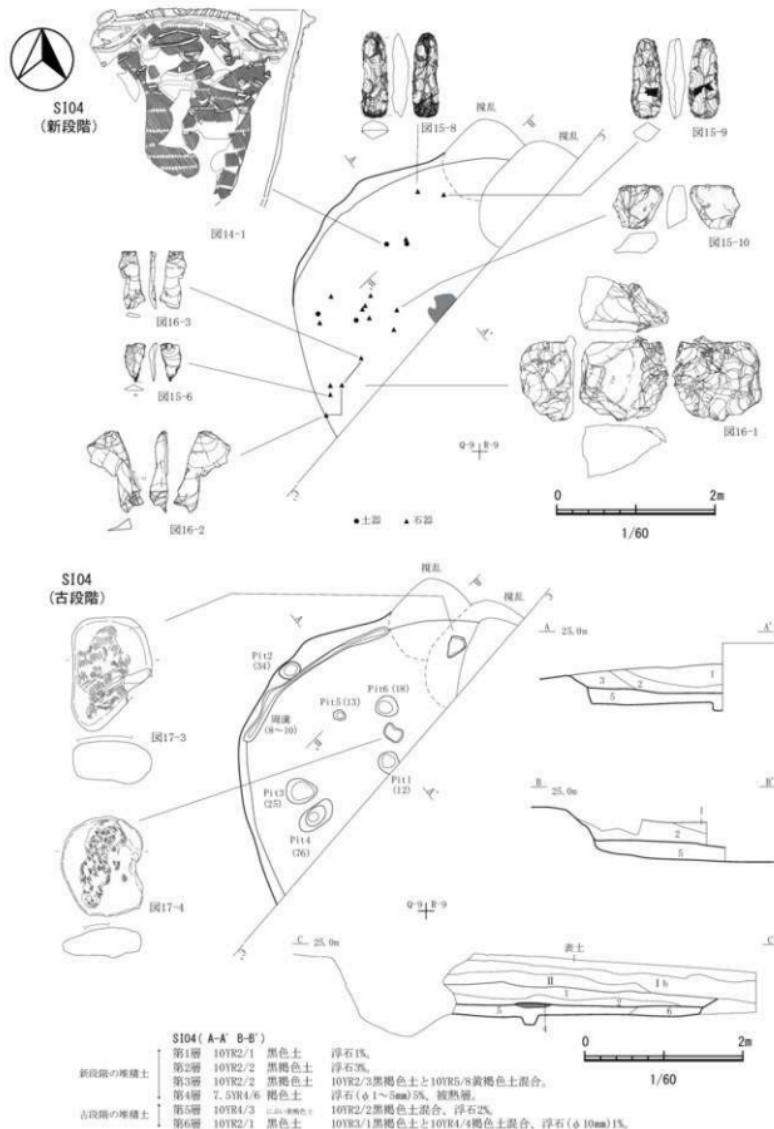


図13 第4号竪穴建物跡

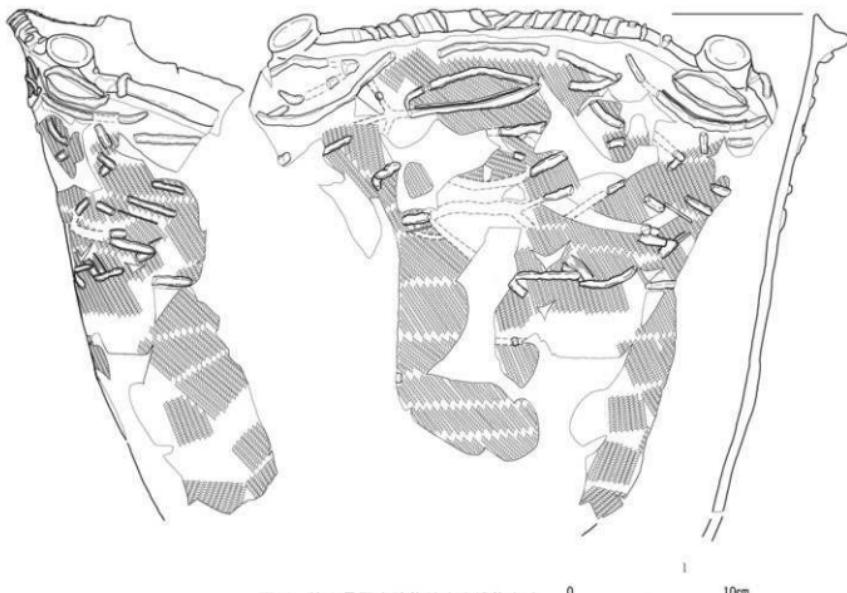


図14 第4号豊穴建物跡出土遺物(1)

0 10cm

(古段階)

【規模・平面形】円形を基調としている。検出面での計測規模は長軸(4.64)m、短軸(1.93)mである。床面積は(5.08)m²である。

【堆積土】2層に分層した。共に基質の異なる土の混合土であることから、人為的に埋め戻された土と考えられる。

【壁・床面】検出できた壁高は、北東壁38cm、北西壁35cmである。第V層を床面とし、概ね平坦である。

【柱穴・施設】6個の小穴と1条の周溝を検出した。柱穴配置等の詳細は不明である。それぞれの規模はPit1-26×(25)cm、深さ12cm、Pit2-28×18cm、深さ34cm、Pit3-40×32cm、深さ25cm、Pit4-51×25cm、深さ76cm、Pit5-16×12cm、深さ13cm、Pit6-28×27cm、深さ18cm、周溝-長さ2.2m、幅4~11cm、深さ7~10cmである。

【炉】検出されなかった。

【出土遺物】堆積土中から127gの土器と、スクレイバー1点(図15-7)、剥片20点が出土。床面からは2点の台石・石皿類が出土した(図17-3、4)。図15-1は爪形の押圧繩文が施されており、円筒上層b式土器に比定される。図15-2は地文施文後に紐状の隆帯が貼り付けられており、円筒上層d式土器に比定される。図15-7は1側縁に抉りが施されており、抉り付近の器面には広く光沢が付着している。出土した剥片は新段階の床面から出土した図16-1と同一母岩とみられるものも含まれている。

【小結】出土土器から円筒上層d式期に埋め戻された遺構と考えられる。

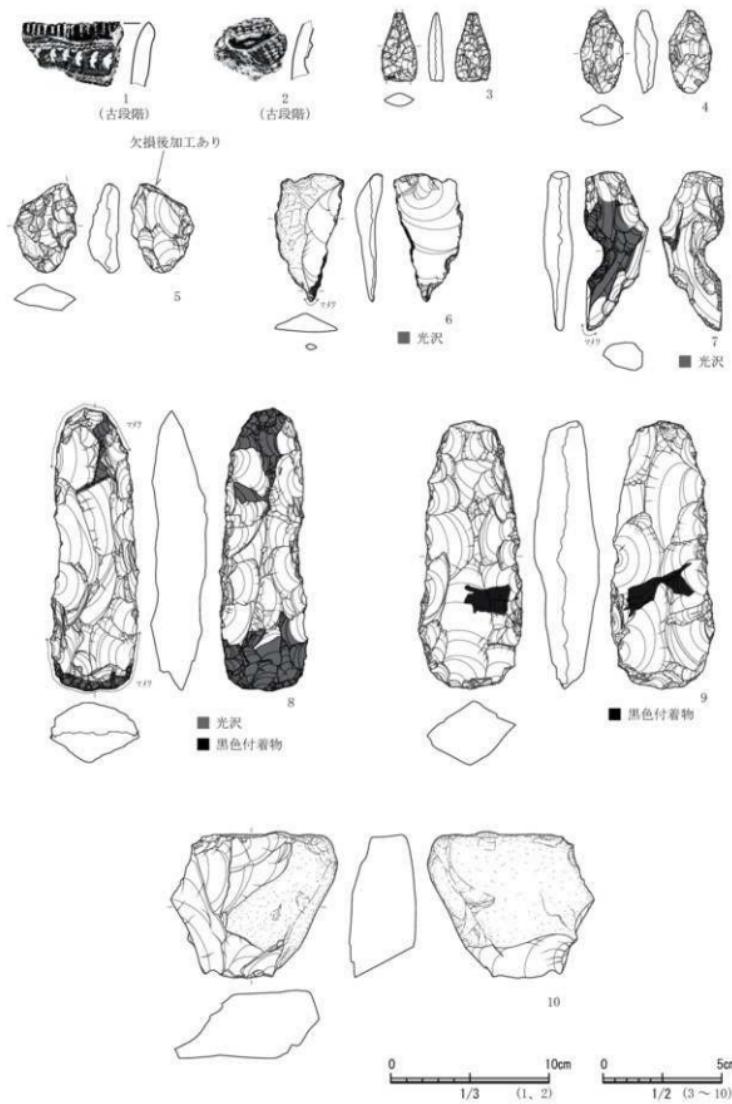


図15 第4号竪穴建物跡出土遺物(2)

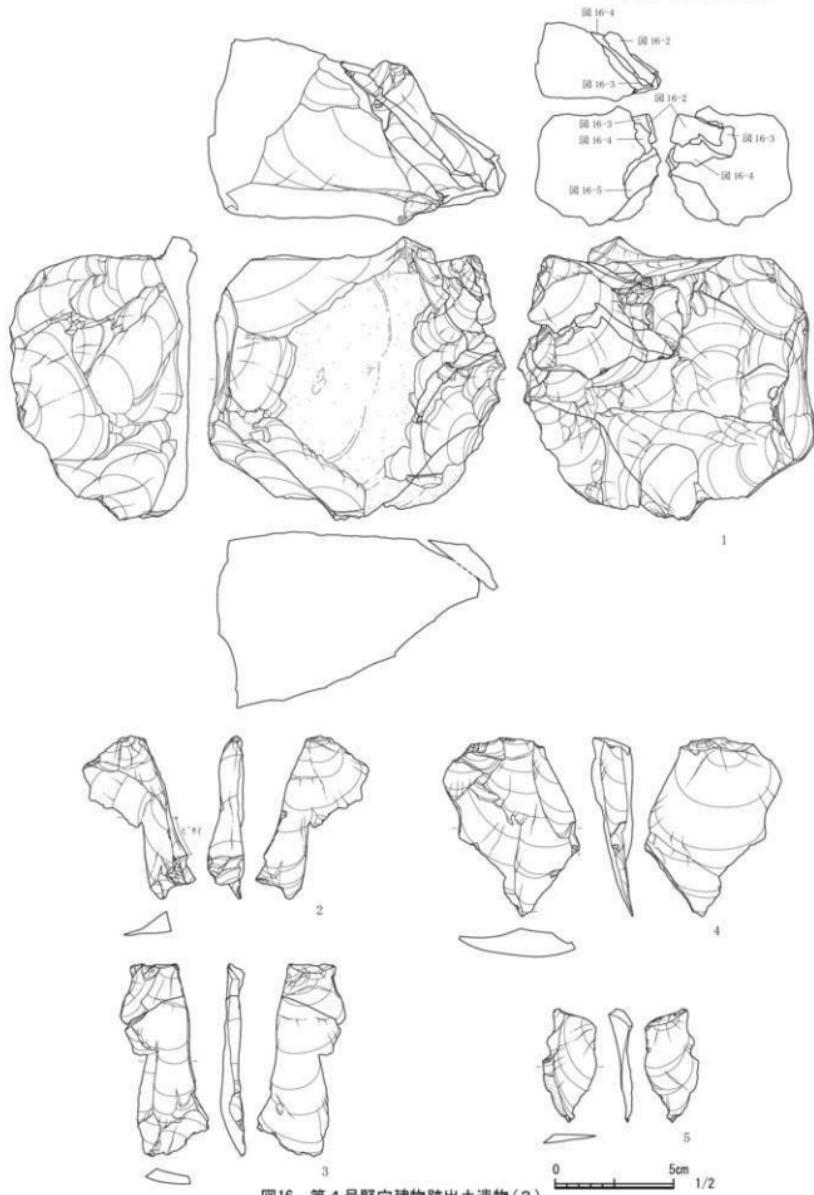


図16 第4号竪穴建物跡出土遺物(3)

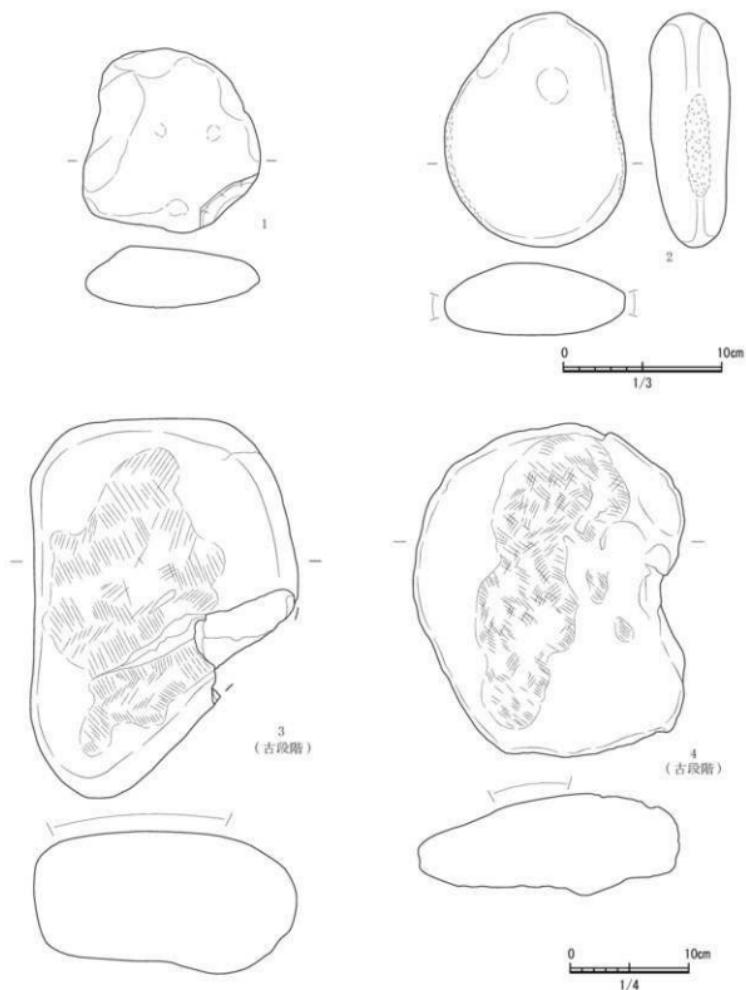


図17 第4号竪穴建物跡出土遺物(4)

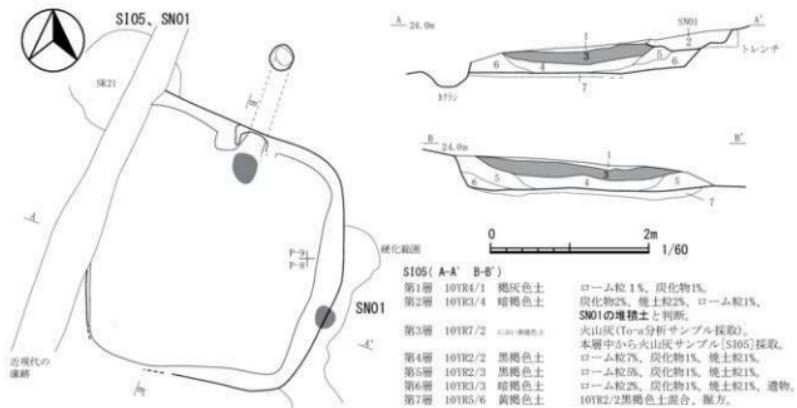


図18 第5号竪穴建物跡(1)

第5号竪穴建物跡 (SI05、図18~20)

【位置・確認】南側調査区のP・Q-8・9グリッドに位置し、標高23.2~24.0m、第IV層で確認した。第21土坑より新しく、第1号焼土跡より古い。また、近現代の溝跡に西壁側が壊されている。

【規模・平面形】平面形は方形である。主軸方向はN-20°-Eである。検出面での計測規模は長軸3.22m、短軸3.01mである。床面積は(7.85)m²である。

【堆積土】黒~暗褐色土を主体として7層に分層した。3層は火山灰層である。埋まりきらず窪地となっていたところに自然堆積した状況を示しており、その厚さは18cmほどある。これを分析したところ、To-aとの結果が得られた（第4章参照）。

【壁・床面】壁高は東壁46cm、西壁25cm、南壁7cm、北壁41cmである。床面は第V層を掘り込んだ後に、埋土による床が貼られ平坦に整えられている。

【柱穴・施設】柱穴は検出されなかった。東壁際の調査時に第V層上面が硬化し、その一部が被熱している範囲を検出した。調査時には本竪穴建物跡に付随する施設である可能性も想定していたが、建物跡出土土師器よりも新しい段階の土師器が出土したこと、土層Aラインで火山灰層を切るように堆積していた2層の存在から、整理時に別遺構であると判断して、これを第1号焼土跡とした。規模等の詳細は第3章第3節で記述する。

【カマド】北壁側でカマドを検出した。火床面と左袖が残存していた。袖は白色粘土を用いて構築され、最大20cmの高さで残存し、内側には被熱がみられた。火床面の範囲は39×32cmで、深さ約5cmまで被熱、硬化していた。煙道は地下式である。煙道底面は床面から約5°の傾斜で上がるが、煙出しの底面で一段深く掘り込まれた形状となる。天井部及び煙出しの側面には被熱がみられた。カマド方向はN-20°-Eで、建物と一致する。北壁から81cmの所に煙出しが位置する。煙出しあは上端35×29cmの楕円形で、深さ49cmで煙道と直結している。

【出土遺物】2,553gの土師器が出土した。遺物は床面南半部に集中しており、土師器と共に大型の自然礫なども床面直上から出土した。図20-1は丸底風となる壺で、カマド火床面の直上から出土し

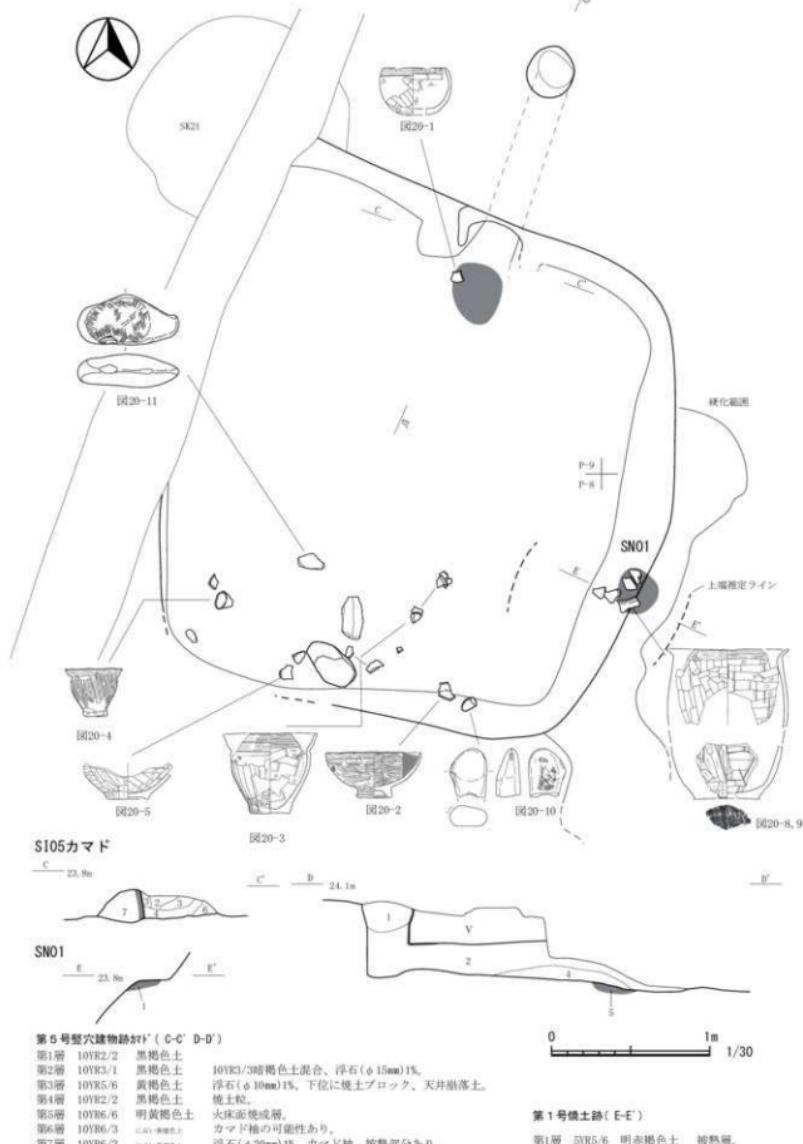


図19 第5号竪穴建物跡(2)

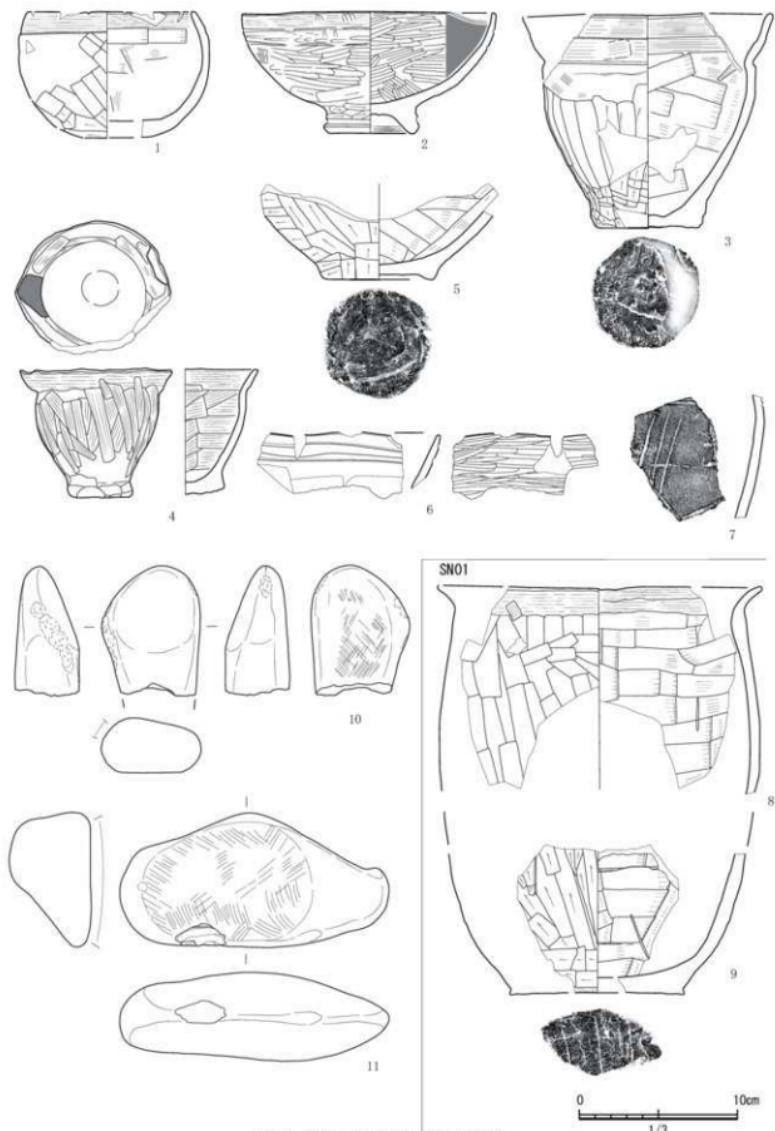


図20 第5号竪穴建物跡出土遺物

た。図20-2は高台坏で内面に黒色処理が施されている。図20-3は甕、図20-4は小型甕の略完形個体である。図20-4は口縁の一部が注ぎ口状に若干窄んでおり、その周辺の化粧土だけ剥がれている。内外面共に刷毛目による調整が施されている。図20-6は甕の口縁部片で、口縁に沿って2条の沈線が施されている。図20-9は第1号焼土跡の近くから出土したものである。図20-10、11は器面に擦痕が認められるものである。縄文時代の所産である可能性もあるが、土師器と共に床面直上から出土していることなどから平安時代の砥石である可能性もある。

〔小結〕 To-a火山灰の堆積状況、出土遺物などから、8世紀中頃～9世紀初頭の建物跡とみられる。

第6号竪穴建物跡（SI06、図21～26）

〔位置・確認〕 南側調査区のP・Q-7グリッドに位置し、標高22.6～23.2m、第IV層で確認した。

〔規模・平面形〕 東側の一部が調査区外へ延び、斜面下方にあたる西側は文化財保護課の試掘トレンチ内にあり、全体形を検出できなかった。平面形は方形を基調としている。長軸方向は不明であるが、主軸はS-35°-Eである。計測できた東西軸は3.4mである。床面積は(8.25) m²である。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体として9層に分層した。3層、4層には火山灰がブロック状に堆積している。これを分析したところ、To-aとの結果が得られた（第4章参照）。9層は振方層である。

〔壁・床面〕 検出できた壁高は南東壁44cm、北西壁38cmである。床面は第V層を掘り込んだ後に、埋土による床が貼られ平坦に整えられている。

〔柱穴・施設〕 1個の小穴を検出した。Pit1-46×39cm、深さ36cmである。

〔カマド〕 南東壁側にカマドを検出した。火床面と左袖が残存していた。袖は白色粘土を用いて構築され、最大12cmの高さで残存し、内側には被熱がみられた。火床面の範囲は38×34cmで、深さ約5cmまで被熱、硬化していた。煙道は地下式である。煙道底面は床面から約8°の傾斜で下り、煙出しの底面で一段深く掘り込まれた形状となる。天井部及び煙出しの側面には被熱がみられた。軸方向はN-35°-Wで、壁から100cmの所に煙出しが位置する。煙出しへは上端41×37cmの楕円形で、深さ59cmで煙道と直結している。煙出しの堆積土中位から、円形の自然縫が穴を塞ぐように置かれた状態で出土した。本建物跡はカマド周辺に遺物が集中しており（図21）、カマドを廃棄する際に祭祀的な行為が行われた可能性がある。煙出しに埋められた自然縫も「カマド封じ」としての意味合いが込められていたかもしれない。なお、天井部等に使用された粘土は全く出土しなかった。これは第3号、5号竪穴建物跡でも同様の状況を示しており、構築材は別の場所に廃棄したか持ち去ったものと考えられる。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器、縄文土器など6,517gの土器が出土した。石器は床面及び床面直上から台石1点（図25-2）、砥石1点（図25-1）のほか大型の自然縫が3点ほど出土。また、カマド周辺からは構築材などに使用された可能性がある6点の自然縫が出土した。そのほかに縄文時代のものと思われる両面調整石器1点（図25-3）、二次加工痕のある剥片1点、剥片1点、スリ石1点（図25-4）が出土した。鉄製品は堆積中から棒状鉄製品1点（図26-1）、カマド脇の床面から刀子1点が出土した（図26-2）。

土師器は甕（図23）、堀（図24-1、2）が出土した。破片でも坏が出土しておらず器種組成に偏りがある。須恵器は2点出土した。図24-3は壺と考えられる。外面、破断面の色調が灰色となっており、五所川原産のものとは異なった印象を受ける。また、胎土に2～5mmの大いな小礫が混入している特徴がある。焼成時に付着したと思われる焼け痕が胴部内外面共にみられる。図24-4は甕の胴部片であ

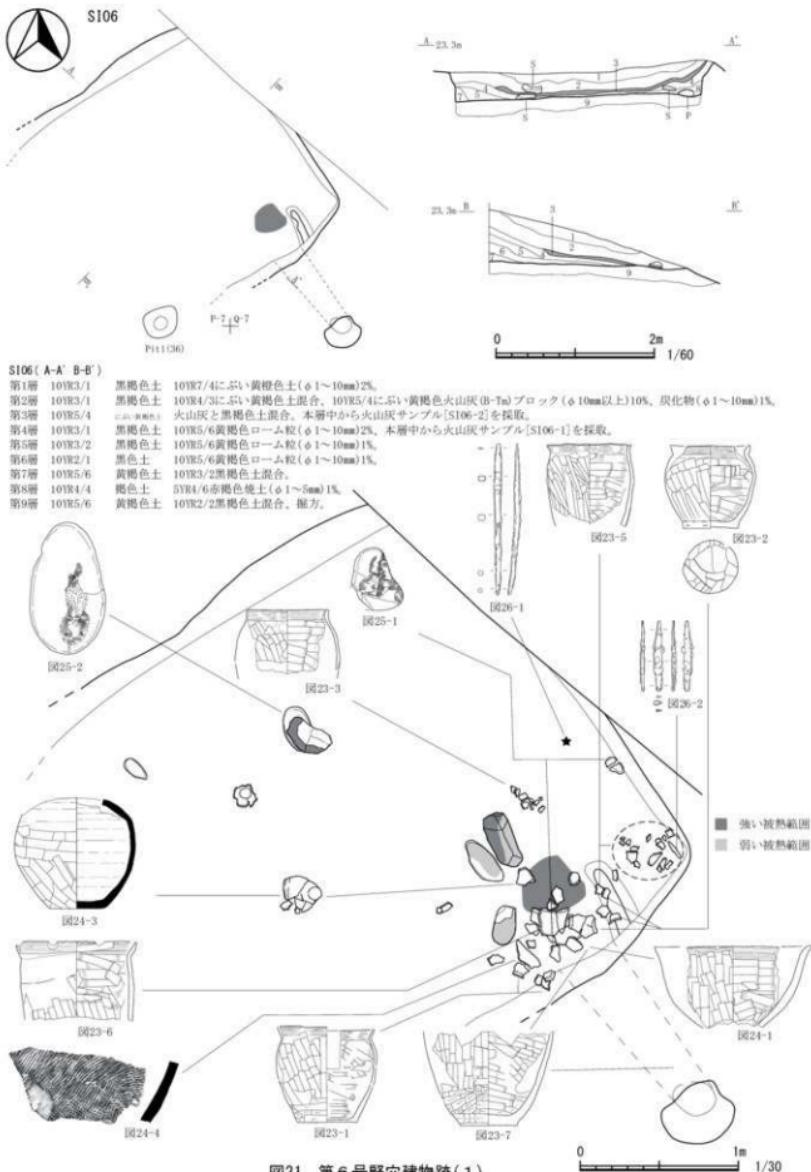


図21 第6号竪穴建物跡(1)

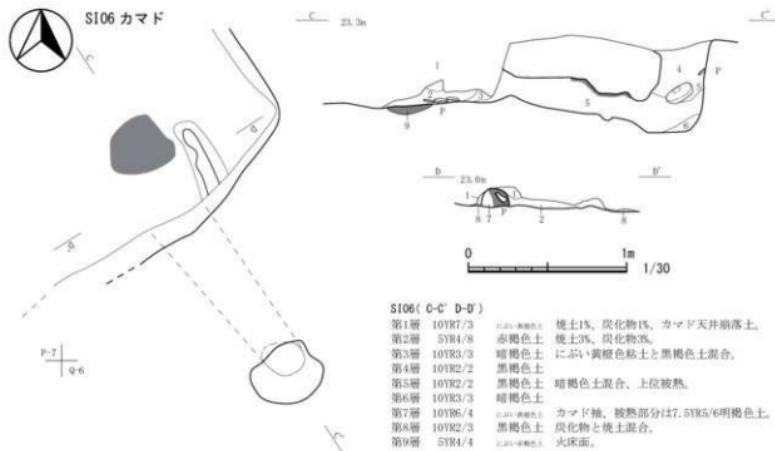


図22 第6号竖穴建物跡(2)

る。これも外面及び破断面の色調は灰色を基調としているが、3と比すると若干赤味が強い様に見える。図25-1は器面に擦痕が認められるものである。縄文時代の所産である可能性もあるが、土器と共に床面直上から出土していることなどから平安時代の砥石である可能性もある。図25-2は被熱した台石・石皿類である。被熱していることから縄文時代の台石をカマド構築材として利用した可能性がある。

【小結】To-aの検出状況から、火山灰降下後に埋没した建物跡と考えられる。また、煙道が地下式であることや出土遺物などから、9世紀後半～10世紀前半の建物跡とみられる。

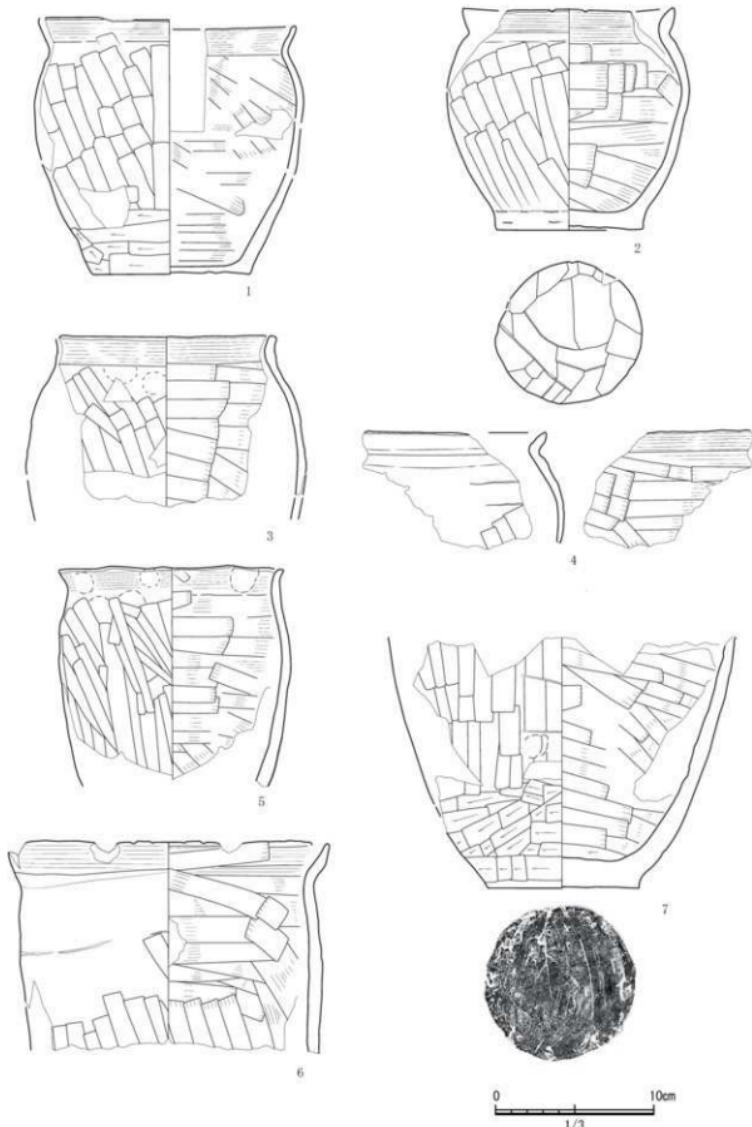


図23 第6号竪穴建物跡出土遺物(1)

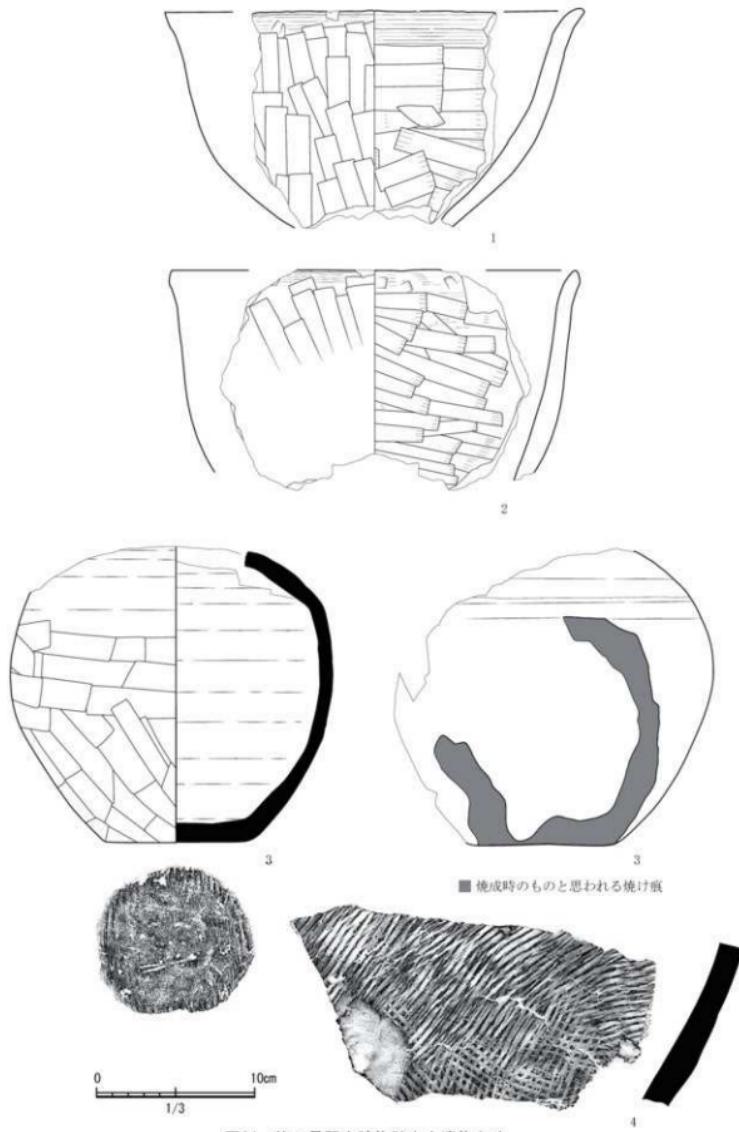


図24 第6号竪穴建物跡出土遺物(2)

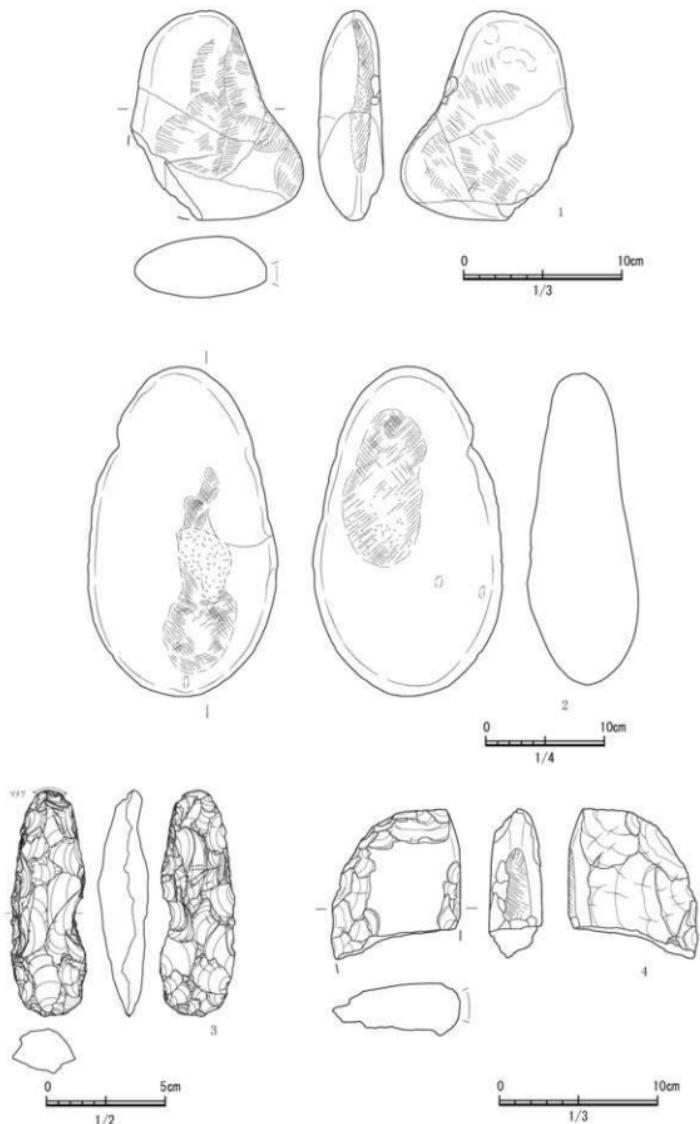


図25 第6号竪穴建跡出土遺物(3)

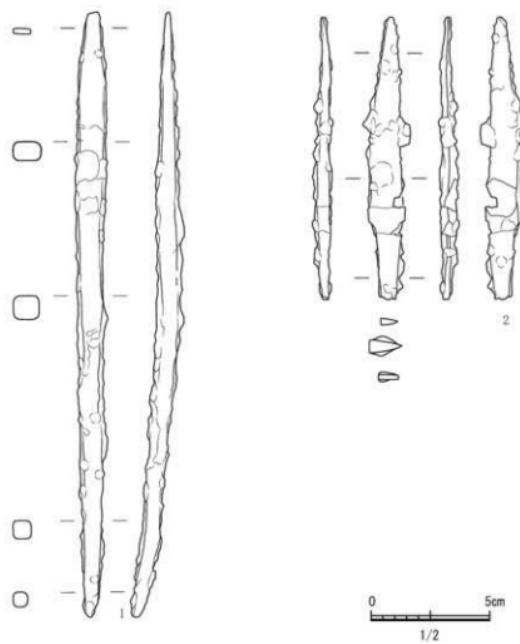


図26 第6号竪穴建物跡出土遺物(4)

第7号堅穴建物跡 (SI07、図27~31)

【位置・確認】南側調査区のN・O-8・9グリッドに位置し、標高22.2~22.8m、第IV層で確認した。床面から多数の小穴が検出されたこと、炉が造り替えられていることから、本建物跡は拡張等の建て替えが行われた建物跡と考えられる。

【規模・平面形】斜面下方で壁を検出できなかったが、平面形は楕円形であったと考えられる。長軸方向はN-21°-Wである。検出面での計測規模は長軸4.80m、短軸(3.50)mである。床面積は(12.54)m²である。

【堆積土】黒色土を主体として7層に分層した。斜面上方からの初期堆積土と思われる4層にはロームブロックが混在しているが、それ以外はほとんど含まれていない。また、基本的にレンズ状に堆積しており、自然堆積した様相を示している。

【壁・床面】壁高は東壁42cm、南壁17cm、北壁24cmである。第V層を床面とし、概ね平坦である。

【柱穴・施設】53個の小穴を検出した。計測値は表2にまとめた。Pit3、Pit4、Pit28、Pit30は建物跡の中軸線上から検出されたピットである。いずれも建物跡の中心に向かって、10~15°で傾いて掘り込まれている(図28)。Pit4-Pit28が最終段階の、Pit3-Pit30がそれ以前の主柱穴と考えられる。また、床面から周溝を検出した。周溝は斜面上方に当たる東壁側をメインに幅10~15cm、深さ10~12cmで掘り込まれており、斜面下方では開口している。

【特殊施設】斜面上方にあたる東壁側で、周堤状施設とPit48を検出した。周堤は土盛りして造られており、上面が若干硬化していた。そのため、掘り下げ時に違和感があり検出することができた。検出できた形状としてはハの字状であるが(図27)、Pit48を囲うように弧状であった可能性もある。遺存状態の良いaでは57×8cm、高さ12cmの規模を測る。断ち割って土層を観察すると周溝が掘り込まれた後に土盛りされていることが分かった。Pit48は50×48cm、深さ26cmの規模を測る。断面形状は壁面側が袋状に掘り込まれ、床面側が弱く聞くように立ち上がっている。堆積土は2層に分層した。2層にはロームブロックが多量に含まれている。人為的な埋土である可能性もあるが、壁に沿って三角堆積していることから、初期堆積時に壁崩落土由来のロームブロックが混在した可能性もある。1層は混入物も少なく自然堆積した様相を示している。遺物は出土しなかった。

表2 SI07床面Pit計測表

施設名	上端(cm)		深さ(cm)
	長軸	短軸	
Pit01	(24)	26	15
Pit02	63	62	33
Pit03	32	26	69
Pit04	34	33	60
Pit05	28	(21)	20
Pit06	21	18	16
Pit07	22	19	34
Pit08	20	17	29
Pit09	13	13	4
Pit10	(14)	14	23
Pit11	14	(7)	17
Pit12	17	14	31
Pit13	29	27	19
Pit14	16	15	19
Pit15	15	13	30
Pit16	欠番		
Pit17	19	16	20
Pit18	13	11	13
Pit19	15	12	7
Pit20	18	17	15
Pit21	37	25	10
Pit22	17	14	16
Pit23	24	19	17
Pit24	24	20	15
Pit25	19	18	15
Pit26	10	9	16
Pit27	26	22	15
Pit28	32	29	75
Pit29	18	12	25
Pit30	28	24	35
Pit31	10	8	10
Pit32	20	19	9
Pit33	20	16	22
Pit34	16	14	7
Pit35	17	14	15

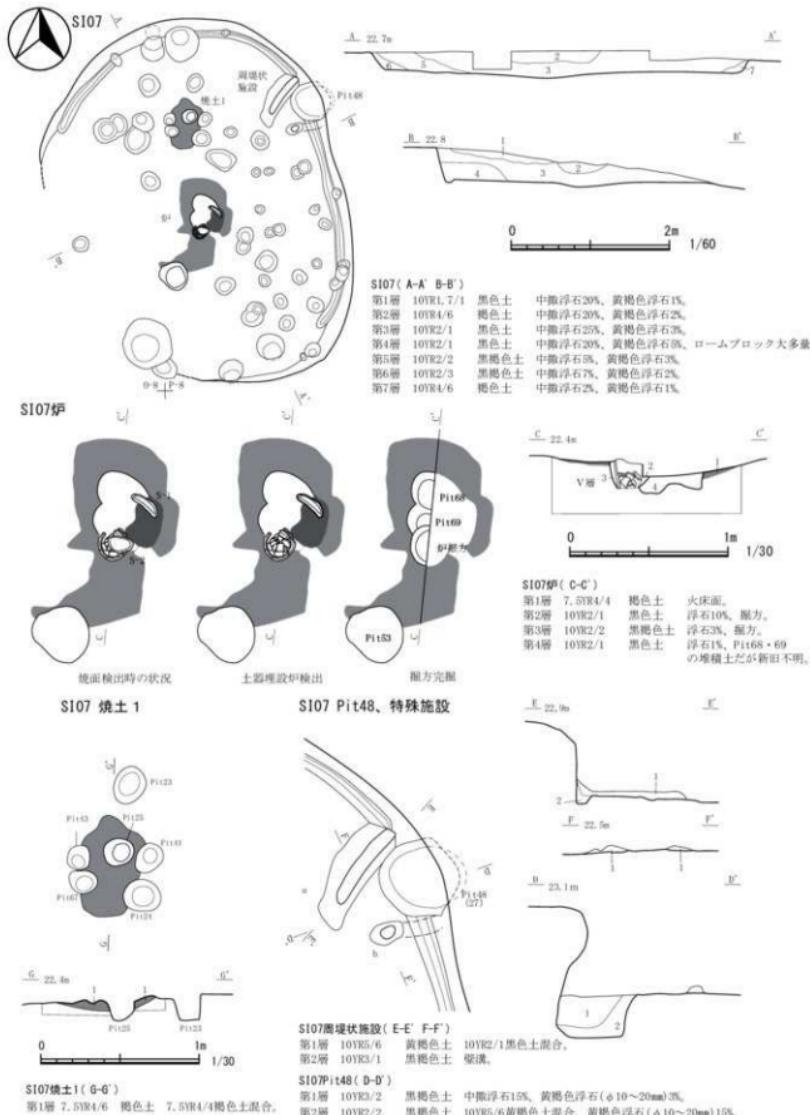


図27 第7号竪穴建物跡(1)



SI07Pit

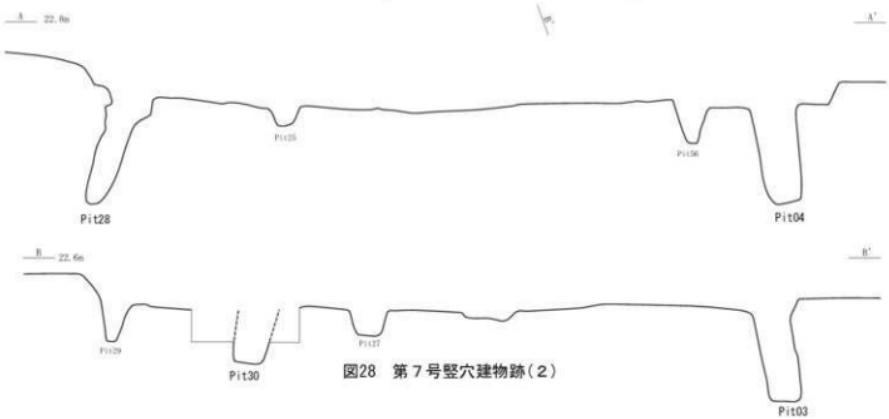
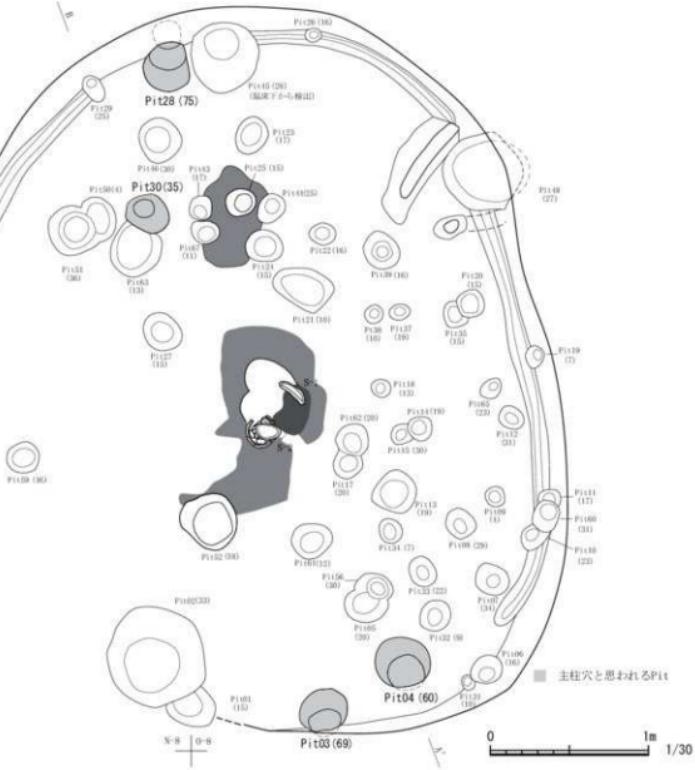


図28 第7号竪穴建物跡(2)

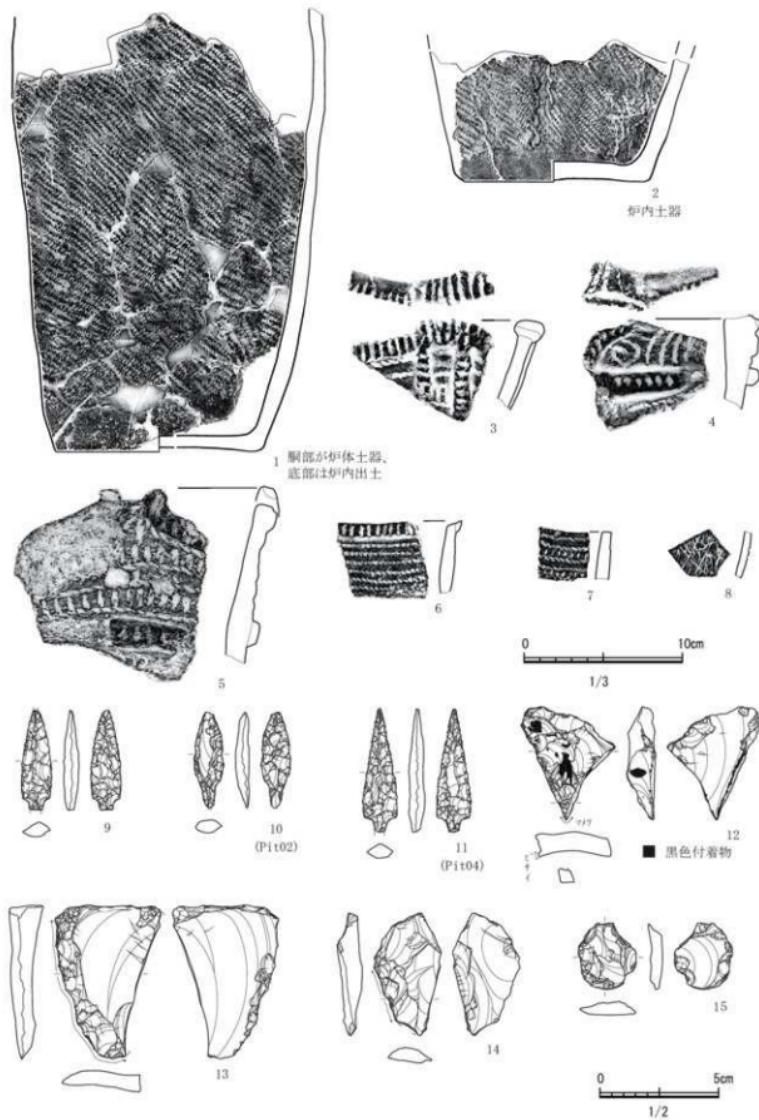


図29 第7号竪穴建物跡出土遺物(1)

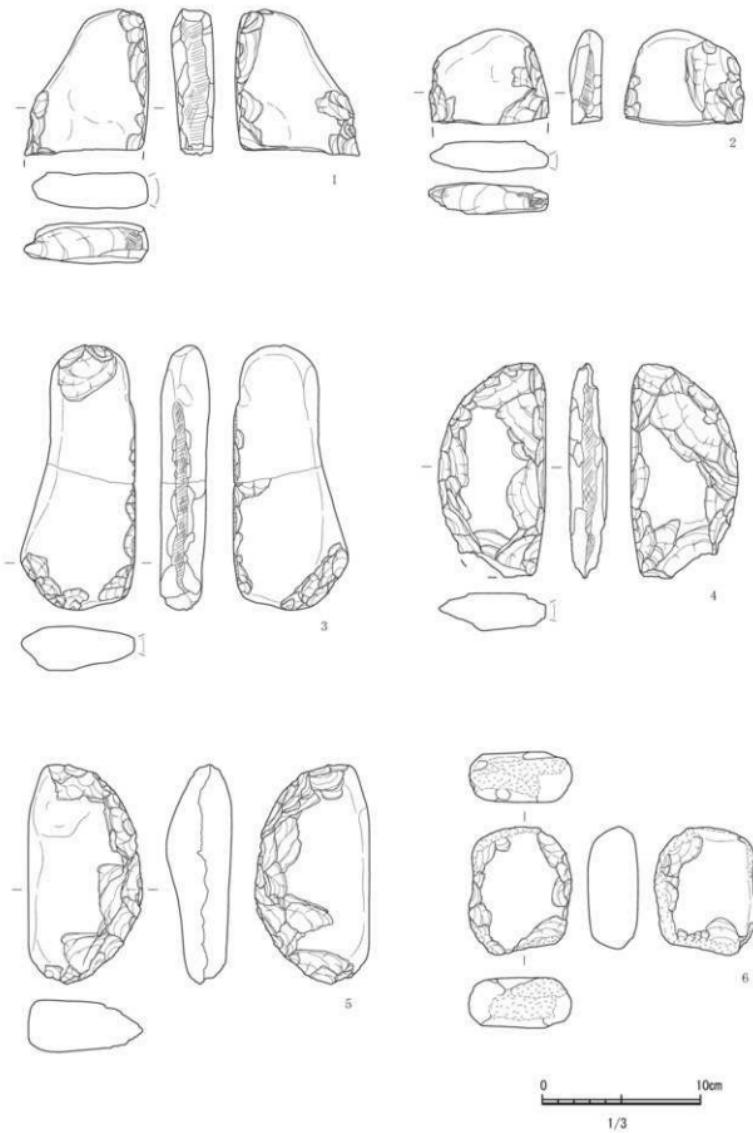


図30 第7号竪穴建物跡出土遺物(2)

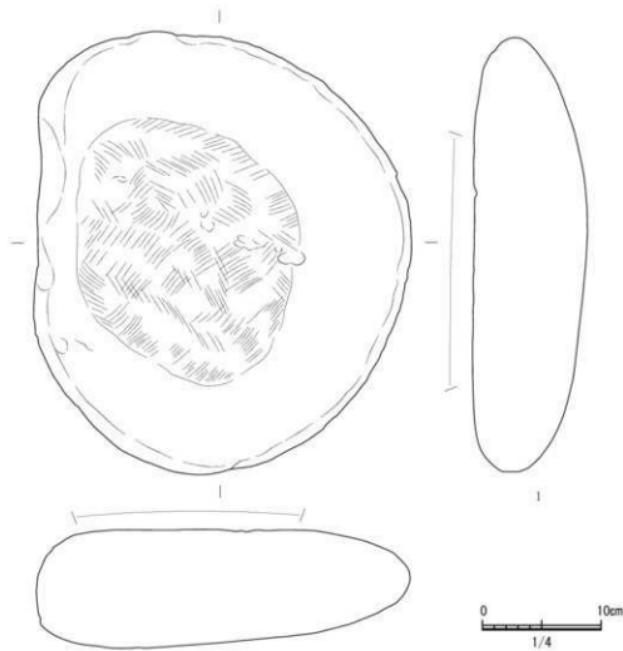


図31 第7号竪穴建物跡出土遺物(3)

〔炉〕床面ほぼ中央から土器埋設炉と2個の礎を検出した（図27-SI07炉S-1、S-2）。S-1は床面を若干掘り込んで横置きの状態で設置されており、S-2は土器埋設炉の上に倒れた状況で検出した。礎間は $30 \times 18\text{cm}$ で弱く被熱しているほか、礎自体も被熱している。検出状況から最新段階の炉になると考えられる。土器埋設炉は $25 \times (11)\text{cm}$ の掘方に口縁部と底部を欠いた胴部が埋設されている。内部には土器片が 10cm ほどの厚さで敷き詰められている。炉内から出土した土器は炉体土器（図29-1）と接合したものもあるが、別な個体も含まれている（図29-2）。なお、掘方と同規模のPitが他に2基連なって検出されていることから（Pit68、69）、Pitの数だけ炉が移設された可能性もある。炉の周りは $115 \times 70\text{cm}$ 、最大厚 4cm で被熱している。土器埋設炉の北側から焼土1を検出した。 $64 \times 40\text{cm}$ 、最大 6cm の厚さで被熱している。Pit5基と重複しているが、いずれのPitよりも古い。

〔出土遺物〕堆積土中から $4,694\text{g}$ の土器と、計90点、 2.05kg の石器が出土した。円筒上層式土器が主体を占めているが、図29-8のように縄文時代後期のものと思われる土器片も混在している。図29-5は堆積土中から出土した口縁部片で円筒上層a式土器に比定される。石器は石鏃3点（図29-9～11）、石錐1点（図29-12）、スクレイバー2点（図29-13、14）、微細削離痕のある剥片1点、両極剥片1点（図29-15）、二次加工痕のある剥片3点、石核1点、剥片70点、スリ石5点（図30-1～4）、礫器1点（図30-5）、敲石1点（図30-6）、台石1点（図31-1）が出土した。

〔小結〕堆積土出土土器から円筒上層a式期に埋没段階にあった遺構と考えられる。床面から周堤を伴うピット、いわゆる特殊施設を検出した。長軸、短軸線上から検出されるのが一般的であるが、本建物跡の検出状況はこれと異なる。斜面上方の東壁側に造られているが、この場所は、斜面下方の周溝開口部を出入り口と見なすと、室内でも奥壁に位置している。遺物は出土しなかった。主たる炉形態が土器埋設炉から礎を配する床地炉へと変化した状況を検出した。隣接する第1号竪穴建物跡は出土遺物、長軸方向、炉形態が同じであることなどから、本竪穴建物跡と極めて近い時期の遺構と考えられ、併存していた可能性もある。

第8号竪穴建物跡（SI08、図320）

〔位置・確認〕南側調査区のO-9・10グリッドに位置し、標高 $23.0 \sim 23.4\text{m}$ 、第IV層で確認した。第14土坑より古い。

〔規模・平面形〕斜面下方で遺構の一部が途切れているが、概ね全体形を検出できた。平面形は梢円形で長軸方向はN-45°-Wである。検出面での計測規模は長軸が 2.75m 、短軸は 2.31m である。床面積は 4.21m^2 である。

〔堆積土〕黒褐色土の単層である。ロームブロック等の混入が見られず自然堆積した様相を示している。

〔壁・床面〕検出できた壁高は北東壁 27cm 、南東壁 14cm 、北西壁 12cm である。第V層を床面とし、概ね平坦である。

〔柱穴・施設〕12個の小穴と3条の周溝を検出した。Pit1～8は床面から、Pit9～12は周溝内から検出されたものである。Pit5、Pit9は長軸線上に位置しており、第1号、第7号竪穴建物跡の事例から見ると主柱穴になる可能性もある。また、Pit4とPit10、Pit6とPit7はそれぞれ長軸の傾きと同じ軸線上に位置しており、対になって機能していたものと考えられる。それぞれの規模はPit1-21×18cm、深さ 11cm 、Pit2-15×11cm、深さ 28cm 、Pit3-13×12cm、深さ 5cm 、Pit4-14×13cm、深さ 15cm 、Pit5-15×12cm、深さ 8cm 、Pit6-14×12cm、深さ 5cm 、Pit7-15×11cm、深さ 7cm 、Pit8-17×15cm、

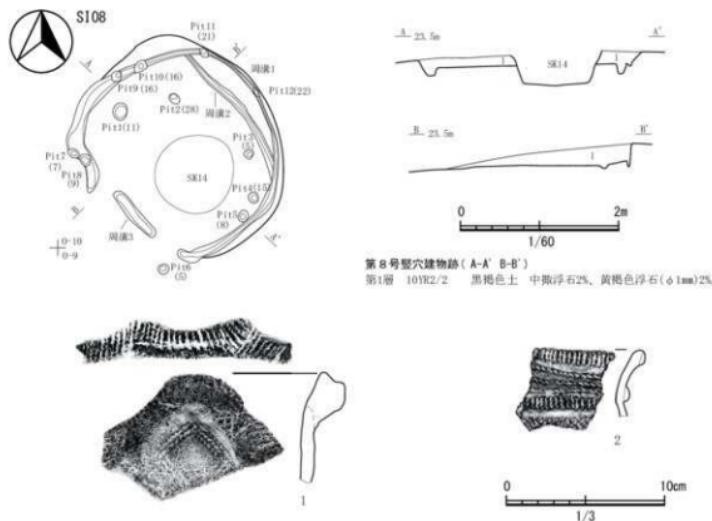


図32 第8号竪穴建物跡、出土遺物

深さ9cm、Pit9-16×13cm、深さ16cm、Pit10-17×12cm、深さ16cm、Pit11-14×10cm、深さ21cm、Pit12-11×6cm、深さ22cmである。

周溝1は壁面に沿って弧状に巡っており斜面下方の南西側で開口している。幅は4～22cm、深さは12～19cmである。周溝2は幅約10cm、深さ14cmで、周溝3は長さ73cm、幅17cm、深さ12cmで構築されている。

〔炉〕 炉が位置していたと思われる床面中央付近で第14号土坑と重複しており、検出されなかった。
〔出土遺物〕 堆積土中から300gの土器と、剥片7点の石器が出土した。図32-1は波状口縁の波頂部片、図32-2は平口縁の口縁部片である。いずれも口唇上には短い押圧繩文が、器面には2～3条押圧繩文が施され、円筒上層a式土器に比定される。

〔小結〕 堆積土出土土器から円筒上層a式期には埋没段階にあった遺構と考えられる。

(小山)

第2節 土坑

北側調査区から3基、南側調査区から18基の総数21基を検出した。縄文時代、平安時代、時期不明のものに分けられる。

- 縄文時代の土坑 17基 (SK01、04、05、06、07、08、09、10、12、14、15、16、17、18、20、21、23)
検出位置や遺構の特徴などから、さらに4細分した。

A群 底面に逆茂木痕を有する土坑 1基 (SK10)

北側調査区から検出された。これまでの調査・研究事例から縄文時代早期～前期中葉までの落とし穴とされている土坑である。

B群 平面形は円形を呈し、底面が70～90cmの規模にまとまる土坑 13基 (SK04、05、06、07、08、09、14、15、16、17、18、21、23)

南側調査区の標高22.4mラインより上からまとめて検出された1群である(図35)。本群の土坑からは分割された石皿や大型の礫が出土する事が多く、SK06、08、16では石皿が、SK09とSK15では自然礫が接合した(図39)。接合したものは完全に復元される事から、意図的に分割して土坑に入れたものと考えられる。出土状況を見ると、SK08、16では底面ないしは底面直上から出土しており、土坑が開口していた段階で入れられたものと捉えることができる。しかし、SK06は堆積土下位で20cmほど埋まった位置から出土しており、若干の違いがある(図39)。B群の時期は出土遺物から円筒上層式期に帰属すると思われるが、時期を特定できる遺物はSK14から出土した円筒上層c、d式土器、SK15から出土した円筒上層c式土器のみであり、詳細は不明である。遺構との重複関係では円筒上層a式、b式期の堅穴建物跡よりも新しい遺構があることから(SK04、09、14、16)、円筒上層b式期以降d式期以前と捉えることができる。

C群 平面形が長方形ないしは楕円形を呈する土坑 2基 (SK01、20)

これらの土坑は南側調査区の台地縁辺にあたる21.8mラインから検出されている(図35)。出土遺物から円筒上層式期に帰属すると思われるが、詳細は不明である。

D群 その他 1基 (SK12)

北側調査区から検出した土坑である(図35)。出土遺物から円筒上層式期に帰属すると考えられるが、詳細は不明である。

- 平安時代の土坑 3基 (SK19、22、21)

土師器が出土し、堆積土に火山灰が堆積している土坑である。南側調査区から検出した(図6)。

- 時期不明の土坑 1基 (SK13)

北側調査区から検出した浅い土坑である(図35)。遺物も出土せず詳細は不明である。

遺構番号は検出順に付していくが、精査の結果、遺構にならないと判断したものに関しては欠番とした。以下に検出した遺構番号順に記載していく。

第1号土坑 (SK01、図33、36)

〔位置・確認〕南側調査区のO-6グリッドに位置し、標高21.4～22.0m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕調査区外へ遺構の大半が延びており、全体形は不明である。計測規模は開口部で長軸252cm、短軸(99)cm、底面で長軸118cm、短軸(36)cmである。検出面からの深さは約60cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は浅箱型で、黒色土を主体として3層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 底面からスリ石が1点出土した（図36-1）。

〔小結〕 繩文時代の土坑（C群）である。

第2号土坑 欠番

第3号土坑 欠番

第4号土坑（SK01、図33）

〔位置・確認〕 南側調査区のN-10グリッドに位置し、標高22.4～22.6m、第IV層で確認した。第1号堅穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸89cm、短軸82cm、底面で長軸74cm、短軸66cmである。検出面からの深さは約37cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、堆積土は黒褐色土の単層である。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 繩文時代の土坑（B群）である。円筒上層a式に埋没段階にある第1号堅穴建物跡より新しい時期の遺構である。

第5号土坑（SK01、図33）

〔位置・確認〕 南側調査区のN-11グリッドに位置し、標高22.8～23.0m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 遺構の一部が調査区外へ延びており全体形を検出できなかったが、現存状況から円形と考えられる。計測規模は開口部で長軸99cm、短軸(69)cm、底面で長軸82cm、短軸(57)cmである。検出面からの深さは約64cmである。なお、調査区壁面で確認できた掘り込み面からの深さは108cmで、第III層上面から掘り込まれている。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、黒色土を主体として3層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片70.4gが出土した。小破片であるため図示しなかったが、胎土などから縄文時代中期の土器と考えられる。

〔小結〕 繩文時代の土坑（B群）である。

第6号土坑（SK06、図33、38、39）

〔位置・確認〕 南側調査区のM-11グリッドに位置し、標高22.6～22.8m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 遺構の一部が調査区外へ延びており全体形を検出できなかったが、現存状況から円形と考えられる。計測規模は開口部で長軸98cm、短軸(61)cm、底面で長軸74cm、短軸(47)cmである。検出面からの深さは約49cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、黒色土を主体として3層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 底面から20cmほど上の位置から分割された石皿が出土した（図38）。土器は出土していない。この石皿は第8号土坑、第18号土坑出土のものと接合し、完形に復元できた（図38、39）。

〔小結〕縄文時代の土坑（B群）である。石皿の接合状況から、第8号、18号土坑と同時期の遺構と考えられる。

第7号土坑（SK07、図33）

〔位置・確認〕南側調査区のM-11・12グリッドに位置し、標高22.4～22.6m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸95cm、短軸77cm、底面で長軸78cm、短軸62cmである。検出面からの深さは約51cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕断面形は箱型で、黒色土を主体として4層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕出土しなかった。

〔小結〕縄文時代の土坑（B群）である。

第8号土坑（SK08、図33、38、39）

〔位置・確認〕南側調査区のL・M-12グリッドに位置し、標高22.6～22.8m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕遺構の一部が調査区外へ延びており全体形を検出できなかったが、現存状況から円形と考えられる。計測規模は開口部で長軸108cm、短軸(56)cm、底面で長軸91cm、短軸(45)cmである。検出面からの深さは約41cmである。なお、調査区壁面で確認できた掘り込み面からの深さは108cmで、III層上面から掘り込まれている。

〔断面形・堆積土・底面〕断面形は箱型で、黒色土を主体として6層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕底面から分割された石皿が出土した。土器は出土していない。この石皿は第6号土坑、第18号土坑出土のものと接合し、完形に復元できた（図38、39）。

〔小結〕縄文時代の土坑（B群）である。石皿の接合状況から、第6号、18号土坑と同時期の遺構と考えられる。

第9号土坑（SK09、図33、38、39）

〔位置・確認〕南側調査区のN-10グリッドに位置し、標高22.4～22.6m、第1号竪穴建物跡と共に確認した。これと重複し本遺構の方が新しい。

〔平面形・規模〕平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸97cm、短軸88cm、底面で長軸78cm、短軸66cmである。検出面からの深さは63cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕断面形は箱型で、黒褐色土を主体として3層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕堆積土中から1点、8gの縄文土器と、剥片2点、スリ石1点（図36-2）の石器が出土した。土器は小破片であるため図示しなかったが、円筒上層式土器に比定されるものである。底面から分割された自然礫が出土した。この自然礫は第15号土坑出土の自然礫と接合し、完形に復元できた（図38、39）。

〔小結〕縄文時代の土坑（B群）である。自然礫の接合状況から、第15号土坑と同時期の遺構と考えられる。また、円筒上層a式に埋没段階にある第1号竪穴建物跡より新しいことから、これ以降の遺構と考えられる。

第10号土坑 (SK010、図33)

【位置・確認】 北側調査区の I-20 グリッドに位置し、標高23.2～23.8m、第IV層で確認した。

【平面形・規模】 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸107cm、短軸102cm、底面で長軸71cm、短軸71cmである。検出面からの深さは116cmである。

【断面形・堆積土・底面】 断面形は箱型で、堆積土は暗褐色土を主体として12層に分層した。自然堆積した状況を示している。底面から深さ20cmほどある3個の小穴を検出した。逆茂木痕と考えられる。

【出土遺物】 出土しなかった。

【小結】 繩文時代の土坑 (A群) で、早期後半～前期前半の落とし穴と考えられる。

第11号土坑 欠番

第12号土坑 (SK12、図34、36)

【位置・確認】 北側調査区の I-21 グリッドに位置し、標高24.8～25.2m、第IV層で5点の礫がまとまって出土した状態で検出した。

【平面形・規模】 遺構の一部が調査区外へ延びており全体形を検出できなかったが、現存状況から円形と考えられる。計測規模は開口部で長軸61cm、短軸(41)cm、底面で長軸53cm、短軸(38)cmである。検出面からの深さは26cmである。

【断面形・堆積土・底面】 断面形は浅箱型で、堆積土は暗褐色土の単層である。底面は平坦である。

【出土遺物】 堆積土中から1点、14gの繩文土器が出土した(図36-4)。また、検出時に出土した5点の礫のうち、石器は1点だけ含まれており、敲石であった(図36-3)。図36-4は円筒上層式土器の胴部片である。

【小結】 繩文時代の土坑 (D群) である。

第13号土坑 (SK13、図34)

【位置・確認】 北側調査区の E・F-20・21 グリッドに位置し、標高22.6～22.8m、第IV層で確認した。

【平面形・規模】 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸108cm、短軸103cm、底面で長軸82cm、短軸73cmである。検出面からの深さは22cmである。

【断面形・堆積土・底面】 断面形は浅皿状で、堆積土は暗褐色土の単層であるが、ロームブロックを多量に含んでおり、人為堆積した様相を示している。底面は平坦である。

【出土遺物】 出土しなかった。

【小結】 時期不明の土坑である。

第14号土坑 (SK14、図34、36)

【位置・確認】 南側調査区の O-10 グリッドに位置し、標高23.0～23.2m、第8号竪穴建物跡と共に確認した。これと重複し、本遺構の方が新しい。

【平面形・規模】 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸103cm、短軸97cm、底面で長軸83cm、短軸80cmである。検出面からの深さは40cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、黒褐色土を主体として4層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器33点、679.1gと石鏃1点（図36-7）、両面調整石器1点（図36-8）、剥片4点、スリ石1点（図36-9）の石器が出土した。図36-5は円筒上層d式土器、図36-6は円筒上層c式土器に比定される。

〔小結〕 縄文時代の土坑（B群）である。重複関係から円筒上層a式に埋没段階にある第8号竪穴建物跡より新しく、出土土器から円筒上層d式期には埋没段階にあった遺構と考えられる。

第15号土坑（SK14、図34、37）

〔位置・確認〕 南側調査区のN-9・10グリッドに位置し、標高22.4～22.8m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸140cm、短軸129cm、底面で長軸153cm、短軸144cmである。検出面からの深さは82cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形はフラスコ型で、堆積土は黒色土を主体として6層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器16点、178.3gと剥片11点、敲石1点（図37-1）、礫器1点（図37-2）の石器が出土した。そのほかに分割された自然礫が出土しており、第9号土坑の底面から出土した自然礫と接合した。図37-3は円筒上層c式土器に比定される。

〔小結〕 縄文時代の土坑（B群）である。自然礫の接合状況から、第9号土坑と同時期の遺構と考えられる。また、出土土器から円筒上層c式期には埋没段階にあった遺構と考えられる。

第16号土坑（SK16、図34、37）

〔位置・確認〕 南側調査区のP-10・11グリッドに位置し、標高23.6～24.0m、第IV層で確認した。第2号竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸78cm、短軸69cm、底面で長軸52cm、短軸50cmである。検出面からの深さは約51cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、堆積土は黒褐色土の単層である。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から石錐1点（図37-4）、剥片1点が出土した。図37-4は石鏃からの転用品である。

〔小結〕 縄文時代の土坑（B群）である。円筒上層b式土器が床面から出土した第2号竪穴建物跡より新しいことから、これ以降の遺構である。

第17号土坑（SK17、図34）

〔位置・確認〕 南側調査区のQ-10グリッドに位置し、標高24.2～24.6m、第IV層で確認した。第3号竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が古い。

〔平面形・規模〕 重複により遺構の一部が壊されており全体形を検出できなかったが、現存状況から円形と考えられる。計測規模は開口部で長軸(94)cm、短軸79cm、底面で長軸68cm、短軸60cmである。検出面からの深さは約50cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、黒褐色土を主体として2層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から円筒上層式土器に比定される底部片が1点、25.4g出土した。

〔小結〕 繩文時代の土坑（B群）である。

第18号土坑（SK18、図34、38、39）

〔位置・確認〕 南側調査区のN-11グリッドに位置し、標高22.6～22.8m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸127cm、短軸113cm、底面で長軸93cm、短軸82cmである。検出面からの深さは約60cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、黒色土を主体として3層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 底面上から分割された石皿、台石が出土した。この石皿は第6号土坑、第8号土坑出土のものと接合し、完形に復元できた（図38、39）。

〔小結〕 繩文時代の土坑（B群）である。石皿の接合状況から、第6号、8号土坑と同時期の遺構と考えられる。

第19号土坑（SK19、図34）

〔位置・確認〕 南側調査区のM-8グリッドに位置し、標高21.2～21.8m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸83cm、短軸59cm、底面で長軸24cm、短軸20cmである。検出面からの深さは約47cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は浅箱型で、黒色土を主体として3層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器1点、39.6gが出土した。

〔小結〕 平安時代の土坑であるが、詳細な時期は不明である。

第20号土坑（SK20、図34、37）

〔位置・確認〕 南側調査区のM・N-7・8グリッドに位置し、標高21.2～22.0m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形である。計測規模は開口部で長軸244cm、短軸158cm、底面で長軸130cm、短軸90cmである。検出面からの深さは約92cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、壁は底面から段を有して立ち上がっている。堆積土は暗褐色土を主体として8層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から繩文土器2点、7.5gと4点の剥片が出土した。図37-5は2条の押圧繩文が施されており、円筒上層a～b式土器に比定される。

〔小結〕 繩文時代の土坑（C群）である。

第21号土坑（SK21、図35、37）

〔位置・確認〕 南側調査区のP-9グリッドに位置し、標高23.4～23.8m、第IV層で確認した。第5号堅穴建物跡と重複し、本遺構の方が古い。また、近現代の構跡により遺構の一部が壊されている。

〔平面形・規模〕 重複により遺構の一部が壊されており全体形を検出できなかったが、現存状況から円形と考えられる。計測規模は開口部で長軸134cm、短軸124cm、底面で長軸119cm、短軸100cmである。

る。検出面からの深さは約28cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は浅皿状で、堆積土は黒褐色土の単層である。底面は凹凸がある。

〔出土遺物〕 堆積土中から剥片1点、二次加工剥片1点、礫器1点（図37-6）の石器が出土した。

〔小結〕 調文時代の土坑（B群）である。

第22号土坑（SK22、図35、37）

〔位置・確認〕 南側調査区のN・O-11グリッドに位置し、標高23.0～23.4m、第III層掘り下げ時に粘土、焼土跡の拡がりを確認した。その後、検出作業を行ったが遺構プランを検出できなかつたため、調査区壁で確認した土層と粘土範囲を記録して第IV層面まで掘り進めた。

〔平面形・規模〕 平面形は不明である。土層観察面での開口部規模は(289)cm、底面規模は(148)cmで、深さは(73)cmである。第II層から掘り込まれている。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は壁が大きく開く浅皿状で、堆積土は黒色土を主体として2層に分層した。1層中には白色火山灰がブロック状に堆積している。底面は凹凸がある。

〔出土遺物〕 粘土範囲周辺から土師器20点、259.6gが出土した。図37-7は甕の底部で、ケズリにより底部が丸底風になっている。

〔小結〕 平安時代の土坑である。火山灰がブロック状に堆積している事から、火山灰降下後の遺構と考えられる。

第23号土坑（SK23、図35、37）

〔位置・確認〕 南側調査区のN-10・11グリッドに位置し、標高22.8～23.0m、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。計測規模は開口部で長軸93cm、短軸86cm、底面で長軸78cm、短軸61cmである。検出面からの深さは約60cmである。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、黒色土を主体として2層に分層した。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 底面直上から打割された石皿1点（図37-8）、台石1点（図37-9）が出土した。

〔小結〕 調文時代の土坑（B群）である。

第24号土坑（SK22、図35）

〔位置・確認〕 南側調査区のO・P-10グリッドに位置し、標高23.6～24.0m、調査区壁面で確認した。第2号堅穴建物跡より新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は不明である。土層観察面での開口部規模は(127)cm、底面規模は(65)cmで、深さは(32)cmである。第IIIa層から掘り込まれている。

〔断面形・堆積土・底面〕 断面形は箱型で、堆積土は黒褐色土を主体として2層に分層した。2層中には白色火山灰がブロック状に堆積している。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 平安時代の土坑である。火山灰がブロック状に堆積している事から、火山灰降下後の遺構と考えられる。

（小山）

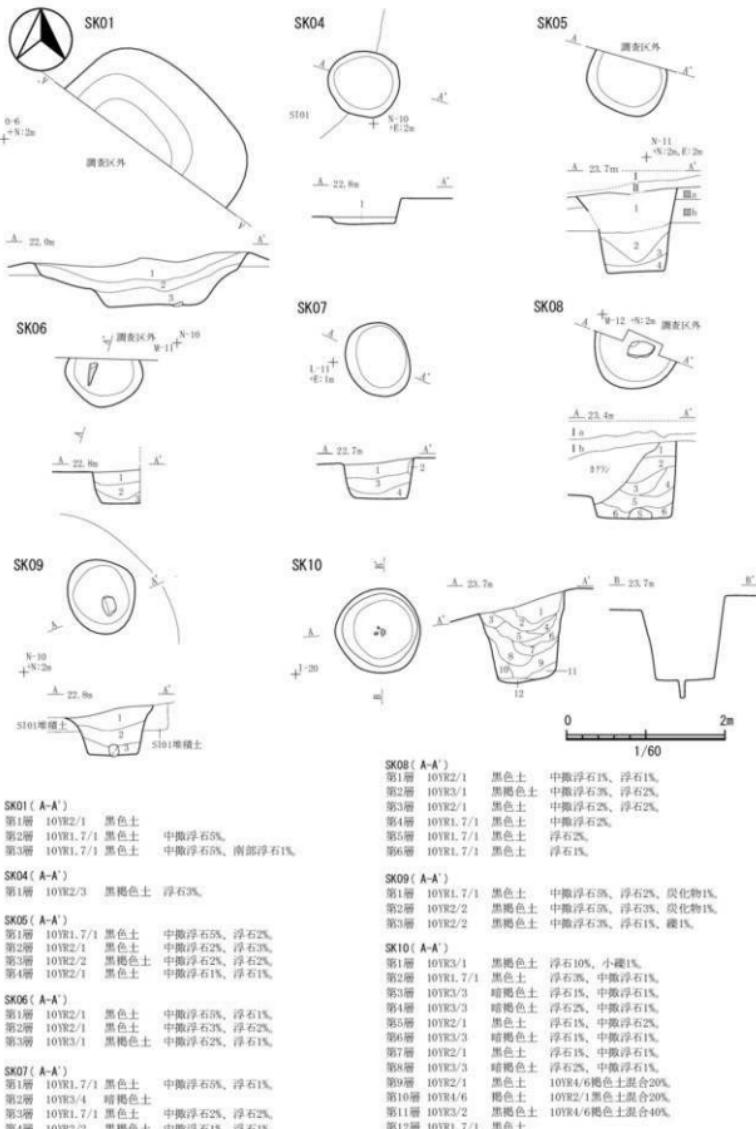


図33 土坑(1)

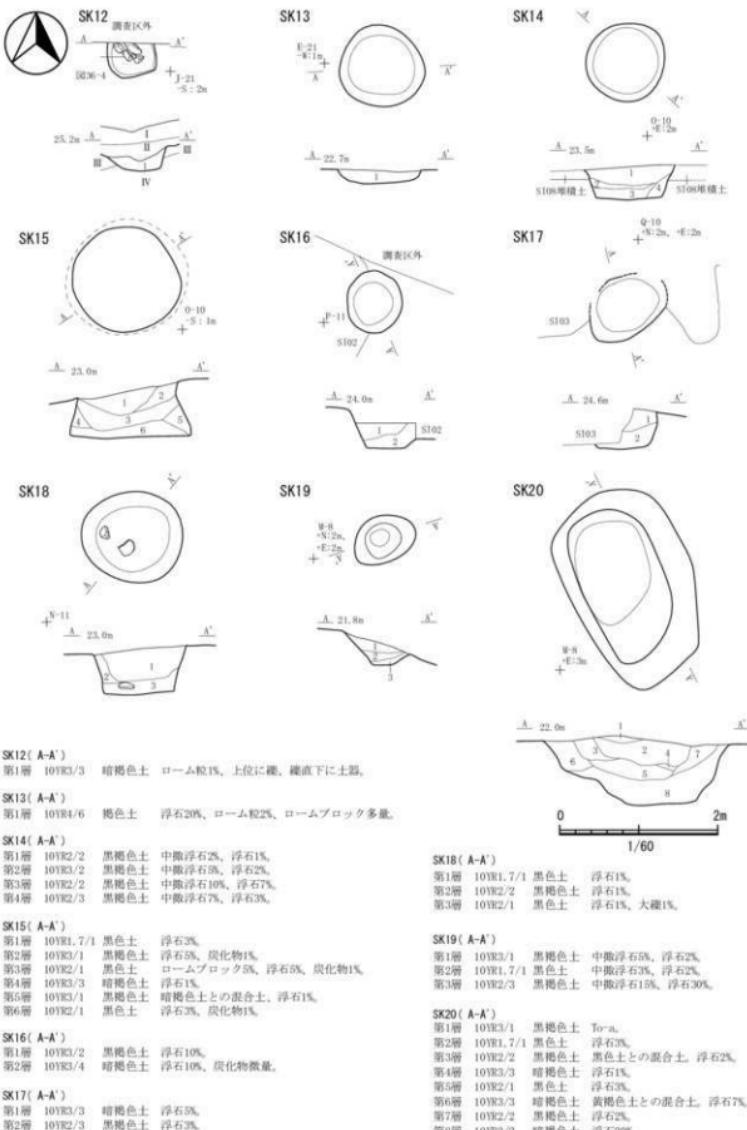


図34 土坑(2)

猪ノ島(2)遺跡

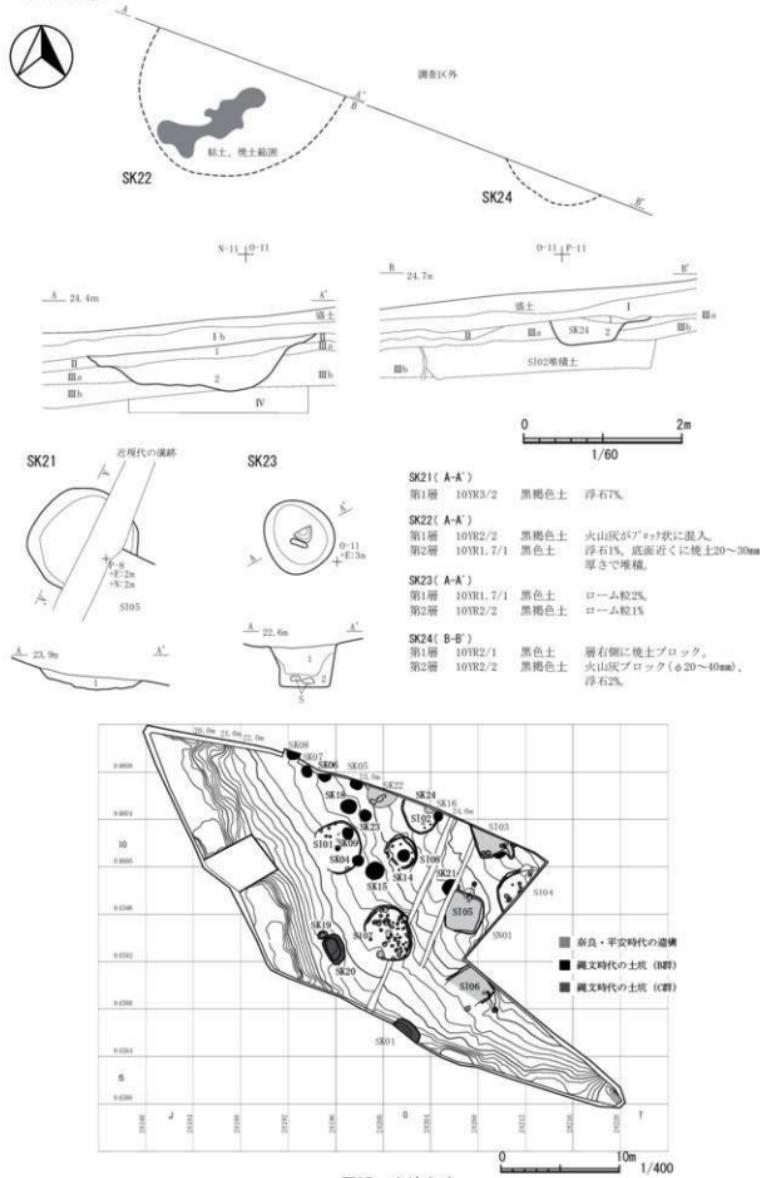


図35 土坑(3)

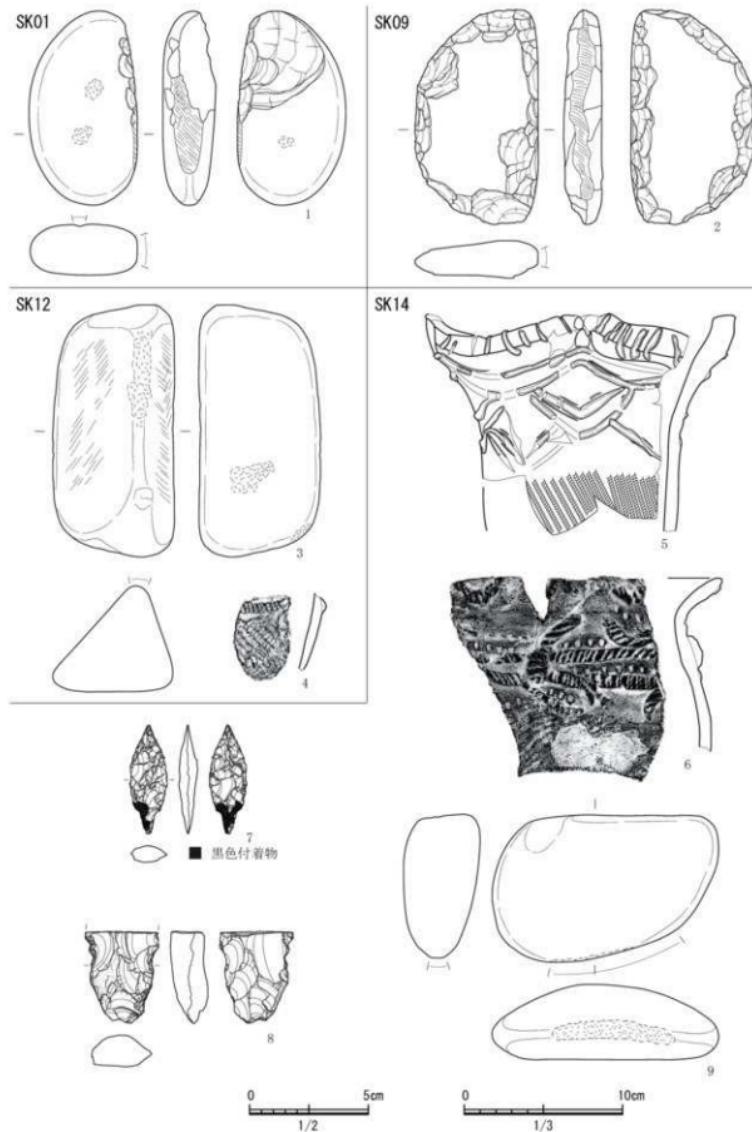
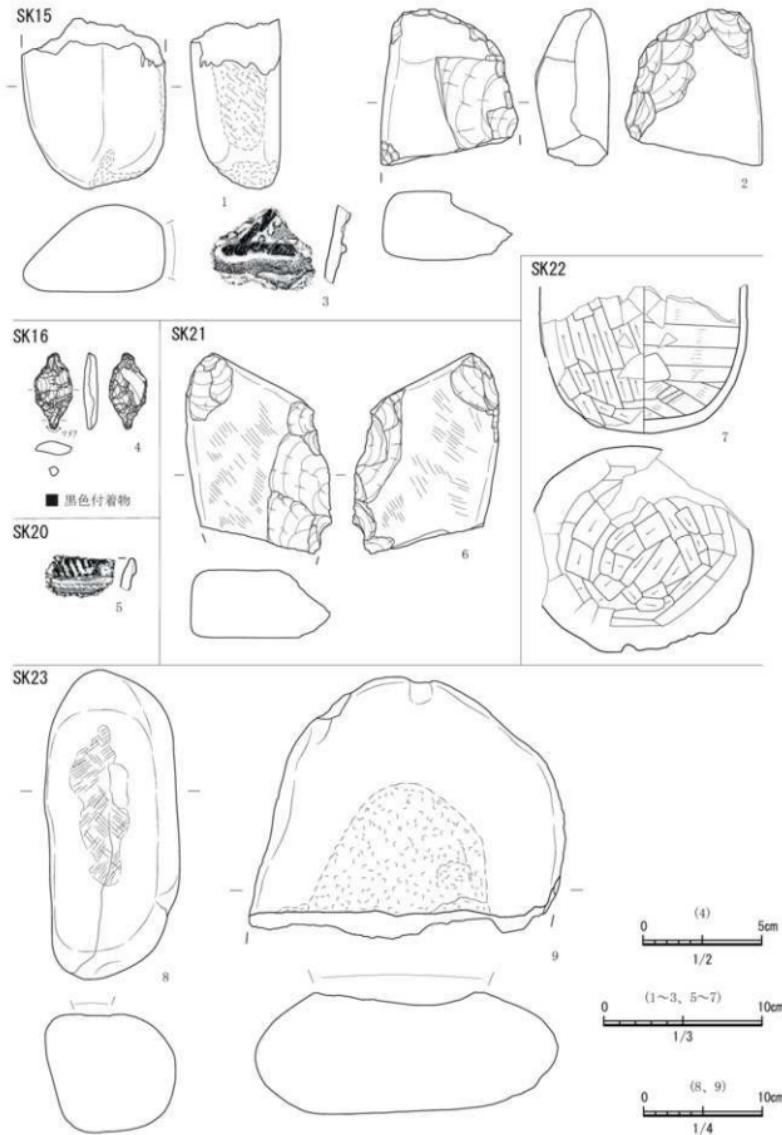


図36 土坑出土遺物(1)



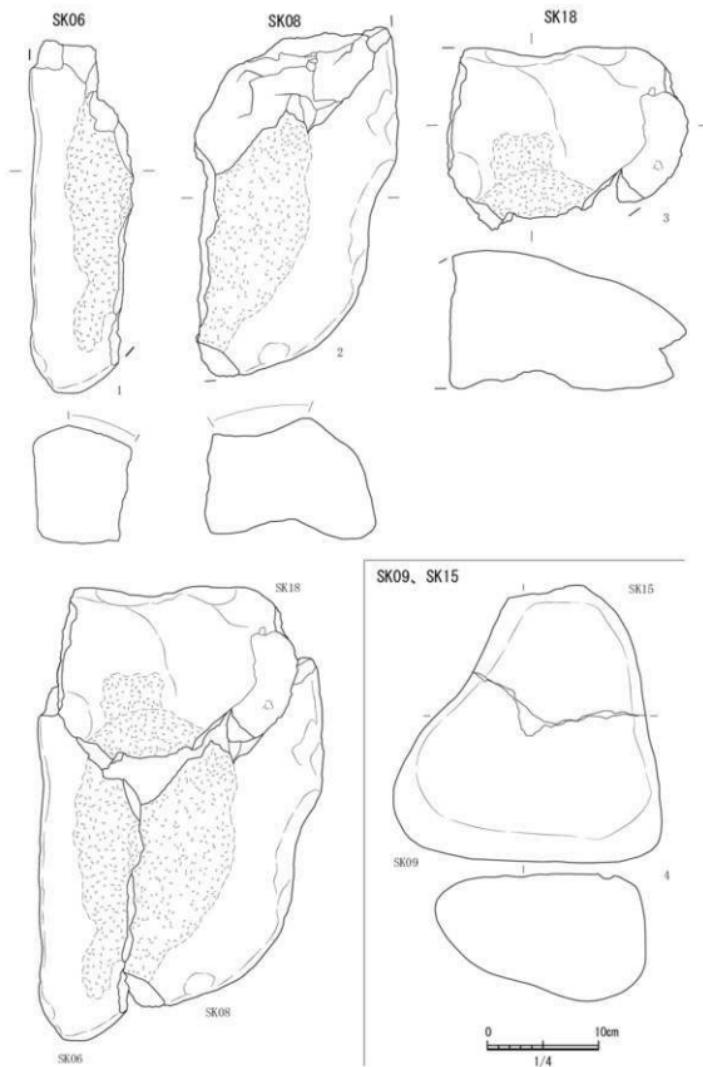


図38 土坑出土遺物(3)

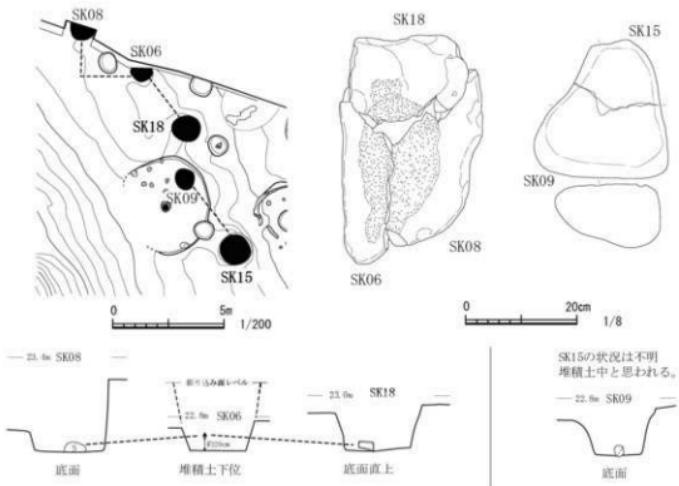


図39 土坑出土遺物(4)

第3節 焼土跡

南側調査区から1基の焼土跡を検出した。

第1号焼土跡 (SN01、図18~20)

【位置・確認】南側調査区のQ-8グリッドに位置し、標高23.6~23.8m、第5号竪穴建物跡の東壁際調査時に第V層上面が硬化し、その一部が被熱している範囲を検出した。調査時には竪穴建物跡に付随する施設の可能性を想定していたが、建物跡出土土師器よりも新しい段階の土師器が出土したこと、第5号竪穴建物跡の土層Aラインで焼土跡付近の堆積土が火山灰層を切るように堆積していたことなどから、整理時に別遺構であると判断して、これを第1号焼土跡とした。

【平面形・規模】平面形は不明である。硬化範囲は2.9m×0.5mの規模で拡がっており、被熱範囲は硬化範囲の中心付近に位置し、27×13cm、最大厚5cmの規模で被熱している。

【堆積土】第5号竪穴建物跡の土層Aラインで火山灰層を切るように堆積している2層が本遺構の堆積土であると考えられる。

【出土遺物】調査時に第5号竪穴建物跡のP-1として取り上げたものが本遺構に帰属するものと思われる(図19、図20-8、9)。図20-8は土師器甕の口縁から胴部片である。口縁は短く外反し、最大径は口縁部と胴部にある器形である。9は底部片で、底面に木葉痕がある。いずれも外面にはケズリ調整、内面にはヘラナデ調整が施されている。

【小結】自然堆積したTo-aを掘り込んで構築されていることから、火山灰降下後の遺構と考えられる。

(小山)

第4節 沢跡 (図40~45)

南側調査区の西側は標高22.0mから急激に落ち込んでいる。沢跡として調査を行ったが、地形的には本遺跡が立地する三本木面を開析している谷底平野（図40）にあたる。

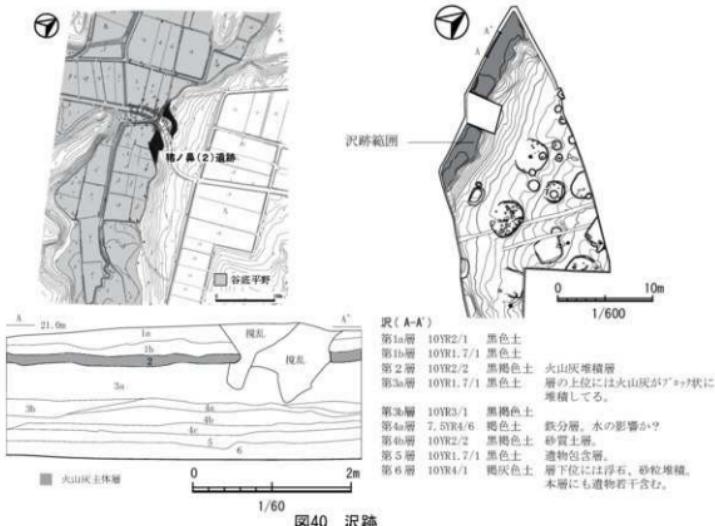
【位置】南側調査区のJ～M-7～12グリッドに位置し、最も低い地点の標高は19.4mで、丘陵縁辺の22.0mラインからは2.6mの比高差がある。

【堆積土】6層に大別した。2層はTo-aもしくはB-Tmと考えられる火山灰層が10～15cmの層厚で堆積している。3層はシルト質の黒色土層、4層は砂が互層に堆積しているほか、土中の鉄分が酸化して土色が赤変するなど水流の影響を受けたと思われる痕跡がある。5層はシルト質の黒色土、6層は地山との漸移層となる。5層及び6層から遺物が出土した。

【出土遺物】縄文土器を主体として5,679gの土器が出土した。図41-1～3は円筒上層a式土器、図41-4は円筒上層b式土器、図41-5は円筒上層c式土器に比定される。そのほかに、若干ではあるが後期前葉の土器（図41-7）、弥生時代中～後期の土器（図41-8～10）なども出土した。石器は石槍（図41-11）、両面調整石器（図41-12～14）、スクレイバ～（図41-15、図41-2）、石錐（図42-1）、石核（図41-3）、二次加工痕のある剥片、微細剝離痕のある剥片、剥片、敲石（図42-4～図43-1）、スリ石（図43-2～図44-3、図45-1）、礫器（図44-4、5）、石錘（図45-2）、石皿（図45-5）、台石（図45-4）、石製品（図45-3）など計62点、約20kgが出土した。

【小結】出土土器から縄文時代中期前葉の頃には、谷底平野は既に開析していたことが明らかとなった。集落を形成した縄文人達は、眼前が急激に落ち込む丘陵縁辺部を意図的に選地したものと考えられる。

(小山)



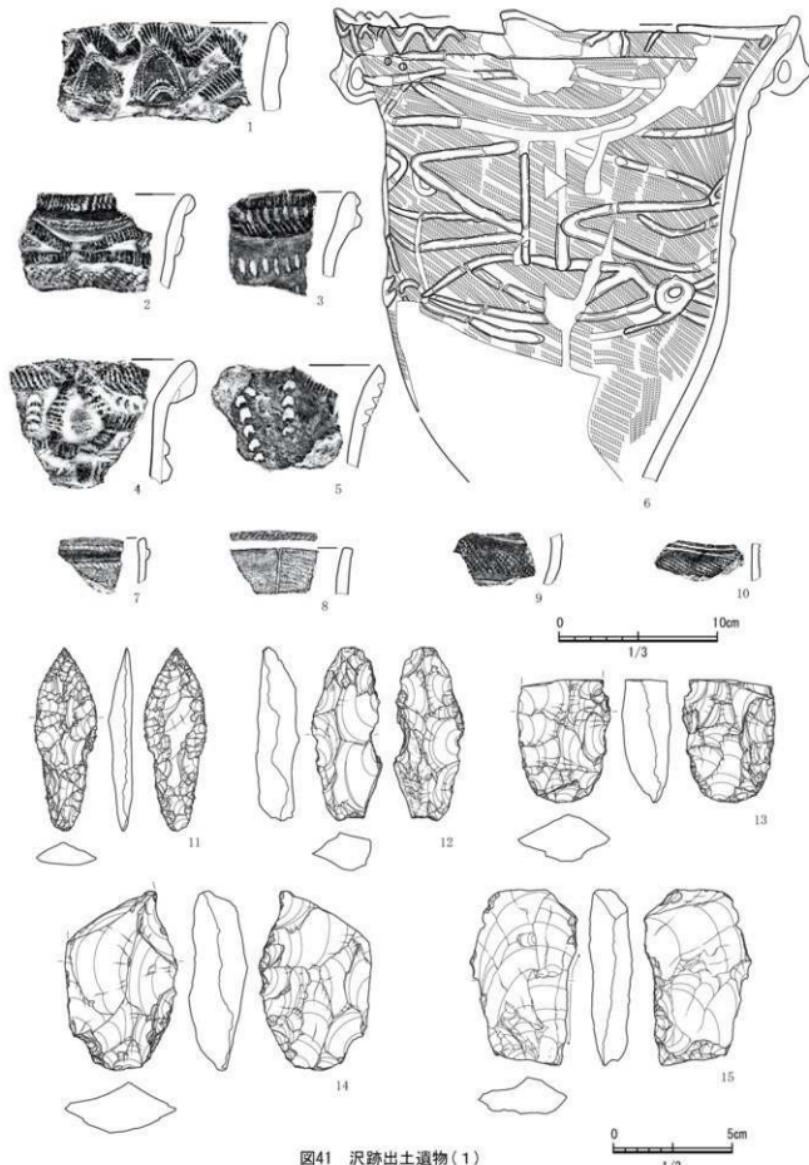


図41 沢跡出土遺物(1)

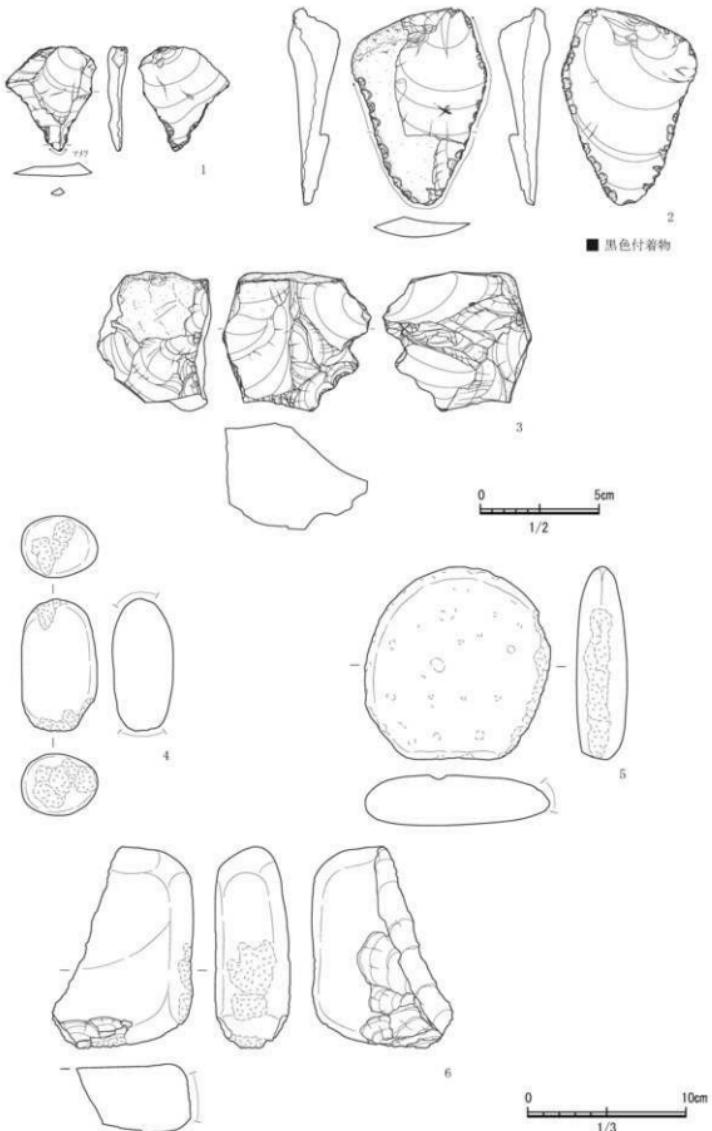


図42 沢跡出土遺物(2)

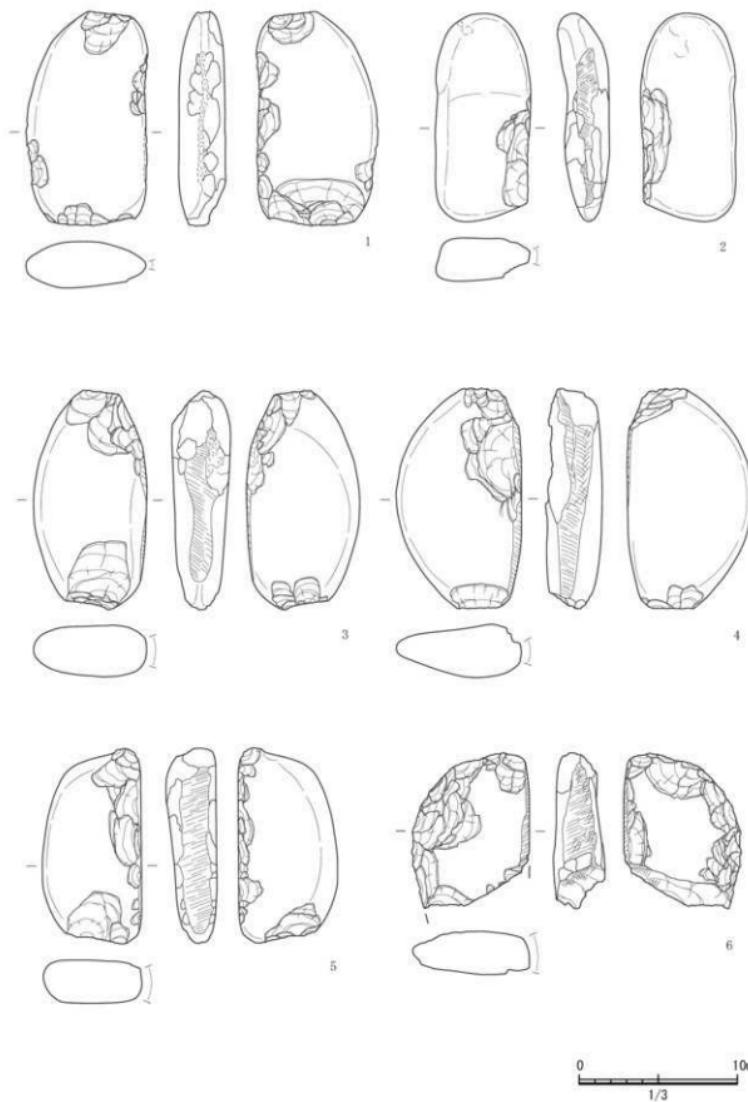


図43 沢跡出土遺物(3)

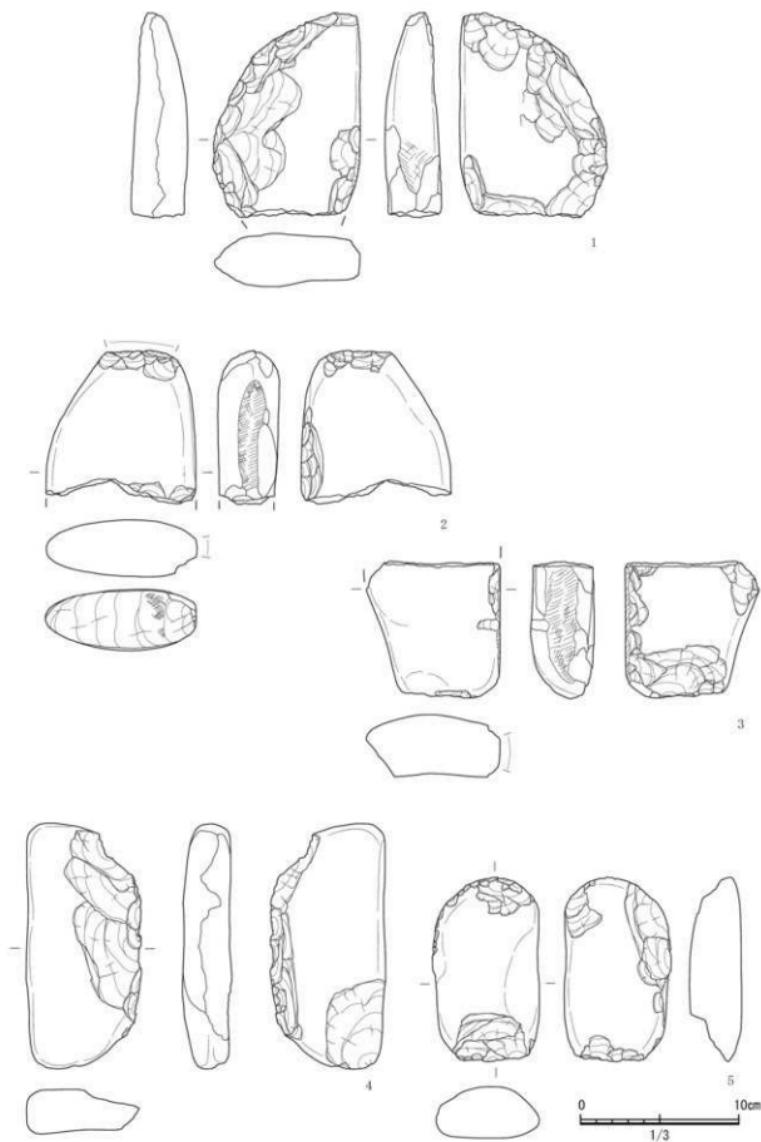


図44 沢跡出土遺物(4)

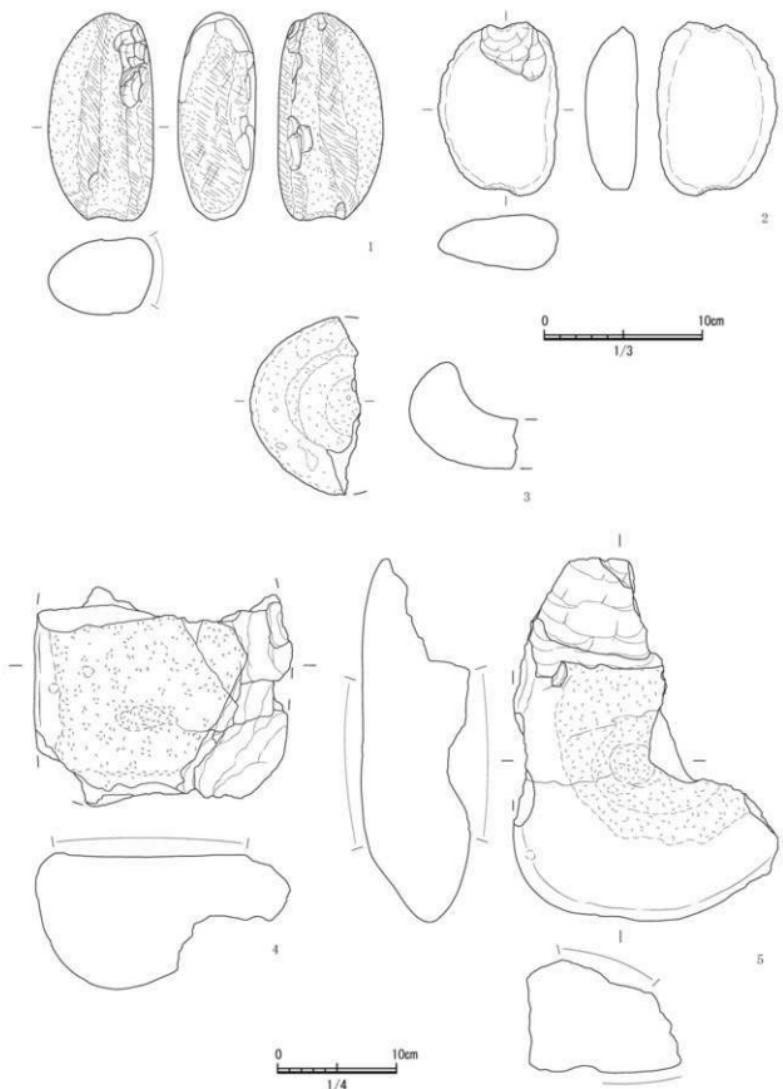


図45 沢跡出土遺物(5)

第5節 遺構外出土遺物（図46～51）

遺物は段ボール箱24箱出土した。このうち遺構外からは約7kg、341点の土器と、127点、11.8kgの石器が出土した。土器は縄文時代中期前半の円筒上層式土器を主体として、縄文時代早期中葉、後期前葉、弥生時代中期～後期、土師器が出土した。縄文土器以外の出土点数は弥生土器20点、土師器70点程度である。遺物はⅢ層ないしはⅣ層から出土した。なお、礫石器は遺構内から出土した分も含めて記載した。

1 土器（図46）

縄文時代早期中葉の土器（図46-1）

斜行する多条の沈線により施文されているものでムシリI式に比定されるものである。

縄文時代中期前半の土器（図46-2～11）

円筒上層式土器に比定されるものである。図46-2は口縁部文様帶の上下に2～3条の横走する押圧縄文が施され、その間に交差する斜行の押圧縄文が施されており、本段階でも古手のものと考えられる。図46-3、4は円筒上層a式土器、図46-5～7は円筒上層b式土器、図46-8は円筒上層c式土器、図46-9は円筒上層d式土器にそれぞれ比定される。図46-10、11は型式認定するメルクマールが欠けており詳細な土器形式は不明であるが施文文様、胎土などから円筒上層式土器に期属するものと考えられる。

縄文時代後期前葉の土器（図46-12、13）

2点共に長方形状の沈線が施文されているもので、十腰内I式土器に比定されるものである。

弥生時代中期～後期の土器（図46-14～22）

図46-14、15は口縁部片である。14は弱い波状口縁で、口唇部に連続する刻みと極小の円形刺突が施されている。この円形刺突は、口縁に沿って貼り付けられている隆帶上にも施されている。器面にはRL縄文が回転施文されているが、その条間は広い。15も口唇部に連続する刻みが施されている。16～18はRL縄文が、19、20はLR縄文が回転施文されている胴部片である。RL縄文が回転されているものは、条間が広くなる特徴がある。21は重層的な沈線が施文されているものである。22は底部片である。

平安時代の土器（図46-23）

残存状態の良い1点を図示した。ロクロ成形された土師器甕で、内面はヘラナデ調整が施されている。

2 石器（図47～51）

剥片石器（図47、48）

剥片石器は石鏃7点、石槍1点、両面調整石器3点、石錐1点、スクレイバー2点、両極剥片1点、石核5点、二次加工痕のある剥片4点、剥片79点、が出土した。使用される石材は珪質頁岩が9割以上を占めている。玉髓も使用されているが1割にも満たない。以下に、器種毎に記載する。

石鏃（図47-1～7）

全て有茎鏃である。

石槍（図47-9）

長さが12cmを超える大型の石槍である。尖頭部は押圧剥離による丁寧な調整が施されている。

両面調整石器（図47-8、10、11）

図47-10は器面中位の両面に黒色付着物が観察された。装着痕である可能性もある。

石錐（図47-12）

剥片素材の一端に尖端部を作出しており、端部は摩滅している。

スクレイパー（図47-13、14）

剥片素材の側縁に刃部を作出しているものである。14は刃部に光沢が認められた。

両極剥片（図47-15～図48）

両極技法により打削されている。主要剥離面には周縁加工が施されている。背面には原礫面が多く残存している。

二次加工痕のある剥片（図47-16）

本報告書中では剥片に二次加工が施されているが、明確な刃部を有しないものについて本類に一括した。16は断面形が三角形状をしている。底辺側から剥離作業を行いやすい角度を有しており、石器を作る際の素材である可能性もある。

石核（図48）

図48-1、3は素材が悪くこれ以上打削できないものと判断される。図48-2は主要剥離面側から数カ所直接打撃が施されている。背面には原礫面を多く残しており、剥離作業を行うのに適した角度を有している。
(小山)

礫石器（図49～51）

調査により、古代堅穴建物跡のカマド構築材等に使用された石も含め、総数101点の礫岩が出土している。この内、礫石器は79点あり、自然礫1点を含む69点を図化掲載した。

器種毎の内訳は、磨製石斧2点、敲石類13点(複合機能を有する2点含む)、スリ石類33点(内29点掲載)、礫器8点(スリ石に含まれるものも含む)、砥石1点、石錐2点、石製品1点、台石・石皿類16点(内12点掲載)である。

各石器の出土位置については観察表に記した。遺構内と沢跡を含む遺構外での出土点数は、前者が36点、後者が39点と大きく変わらないが、自然礫を含む台石等の大型礫は遺構内からの出土数が多く、スリ石類は遺構外からの出土数が多い。

礫石器の石材は概ね、安山岩と凝灰岩に二分される。敲石では安山岩が多く使われ、スリ石や礫器、台石・石皿類ではほぼ半々の割合である。他に流紋岩と石英安山岩が各1点使われている。

検出遺構の時期が繩文時代中期前葉～中葉、奈良と平安時代であることから、出土礫石器の大半が、それらいずれかの時期に帰属するものと考えられる。以下、器種毎に記述する。

磨製石斧：遺構外から2点出土している。

図49-1は刃部と基部を欠失する。器体には擦痕と中央部に僅かな敲打痕を残す。同図-2は、器体に擦り切り痕の残る小型石斧である。

敲石：遺構内から6点、沢跡と遺構外から13点出土している。

楕円形や長楕円形および扁平円錐を素材に、礫端部や側縁に敲打痕があるもので、周縁を使用しているもの(図30-6)、長楕円錐の端部を使用するもの(図42-4、図49-7)、側縁を使用するもの(図17-2、図29-10、図36-3・9、図42-5・6、図43-1、図49-3・4)、端部と側縁を使用するもの(図

37-1)がある。この内スリ石としても使用された複合機能を有するものが4点(図20-10、図36-3、図49-5・7)ある。図36-3と図49-3は、所謂三角柱状磨石に類似し、図43-1は抉入扁平打製石器にも属する。

スリ石: 遺構内から10点、沢跡と遺構外から19点出土している。

能動的にスル(磨・擦・撃)機能面を有したものとスリ石とした。大多数が縦の一側縁(面)に直線状の機能面を有したもので、素材の形状と機能面の差異、成形剥離による形態の違いから分けられる。

縦のほぼ周縁を剥離して半円状(弧状)に成形した所謂半円状扁平打製石器(図8-4、図25-4、図30-4、図36-2、図43-6、図44-1、図50-4~7)が10点、縦の両端部を主体に剥離成形した、抉入扁平打製石器(図10-3、図30-3、図43-3~5、図44-3)が6点のほか、上條(上條2014)の言う、扁平石器(図30-1・2、図37-6、図43-2、図44-2、図49-6・8、図50-2・3)が8点、側縁摩耗系磨石(上條同)(図36-1、図49-7、図50-1)が3点、北海道式石冠類似(図45-1)が1点、その他(図20-11)が1点ある。これらは、機能面の有無を除けば後述の礫器のなかにも、剥離成形と全体形状が酷似し同じ器種名で呼称されるものがある。

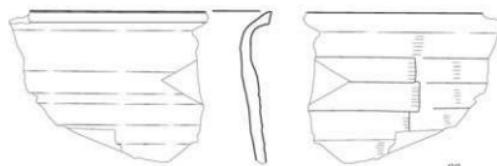
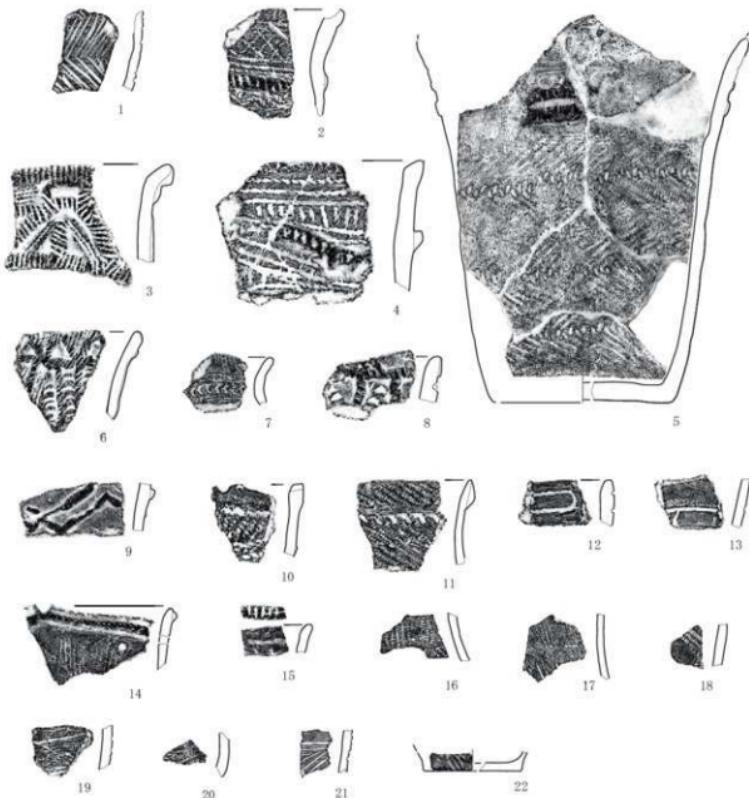
半円状扁平打製石器と抉入扁平打製石器については、これまでの調査報告例から特に逸脱するものはみられない。

これらスリ石類の破損断面の一部に摩耗した箇所がみられるものが11点(2点不掲載)ある。半円状扁平打製石器に2点(図43-6、図44-1)、抉入扁平打製石器に3点(図10-3、図30-3、図44-3)、扁平石器に4点(図30-1・2、図44-2、図50-2)である。この破断面の摩耗についても既に論じられており(茅野2000)・(齋藤2003)、上記3種の破断面摩耗箇所が機能面側の端部に限られることから、似通った動作で使用されていた可能性が推察される。

側縁摩耗系磨石では、図36-1の幅広のスリ面が剥離により壊されている。図45-1は成形と幅広スリ面が北海道式石冠に類似する、小島が指摘する(小島1999)北東北を主体に分布する北海道式石冠の形態である。梢円形礫を素材に、全面を磨った後に側縁と器体中央部を敲打により成形しており両端部は敲打で凹まされている。側縁の幅広いスリ面は片減りしている。図49-7は器体成形のための敲打やスリ、深い端部の抉りは見られないが(両端部は浅く敲打されている)、特に断面形状と幅広のスリ面は北海道式石冠様である。図50-1も幅広の機能面を有し、敲打と剥離の違いはあるが両端部が加工されている。その他の図20-11は不整形礫の一面が使用されるもので小型の台石ないしは砥石の可能性もある。

礫器: 遺構内から5点、沢跡と遺構外から3点出土している。

ここで礫器としたものは、扁平な梢円および長楕円形礫に剥離だけを施したものであり、側面などにスリや敲打等の機能面が無い石器の一群とした。前述のスリ石で細分された半円状扁平打製石器、抉入扁平打製石器、扁平石器の未使用の石器という考えもあるが、未使用である確証が得られないであえて分けた。図17-1は一つの剥離だけが石錐の可能性もある。図8-5と図30-5、図51-1は直線的な一側縁を除いた周縁に両面剥離が施されており、形的には半円状扁平打製石器である。破損しているが図37-2も含まれるだろう。図37-6の器面には擦られた痕が見られる。図37-6と図44-4は扁平長楕円礫の側縁に剥離が施されるもので、名称的には扁平石器にも属する。同図-5は



0 10cm
1/3

図46 遺構外出土遺物(1)

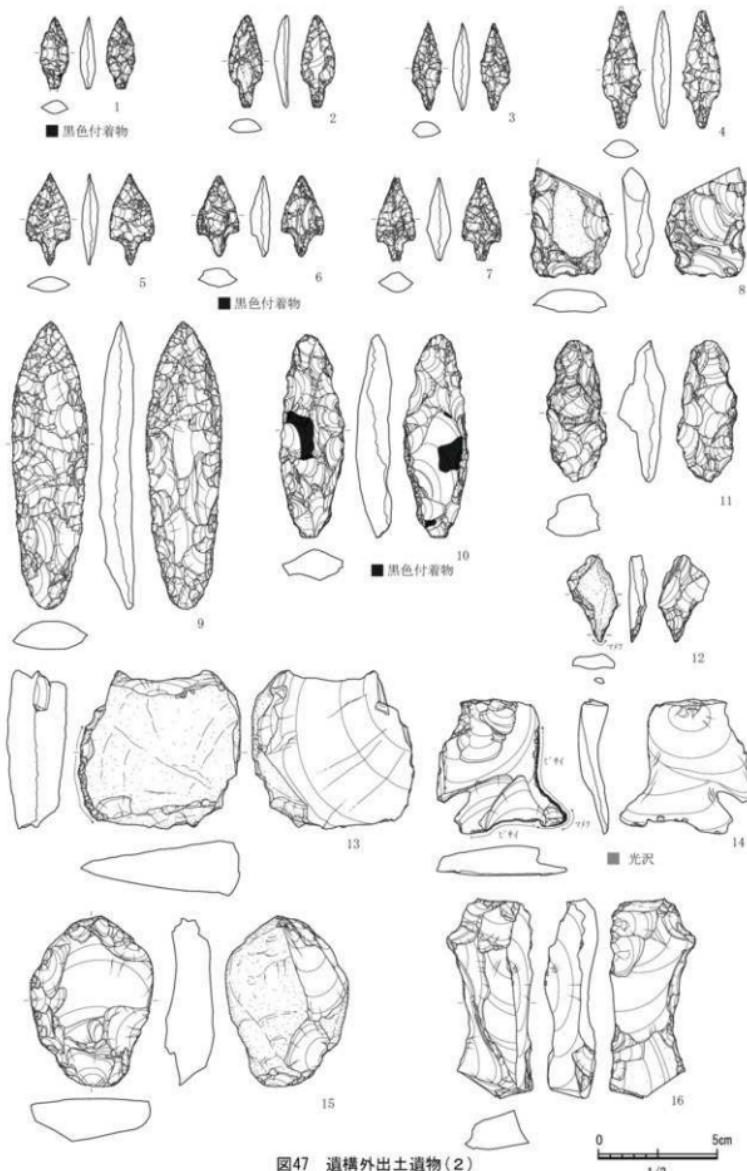


図47 遺構外出土遺物(2)

1/2

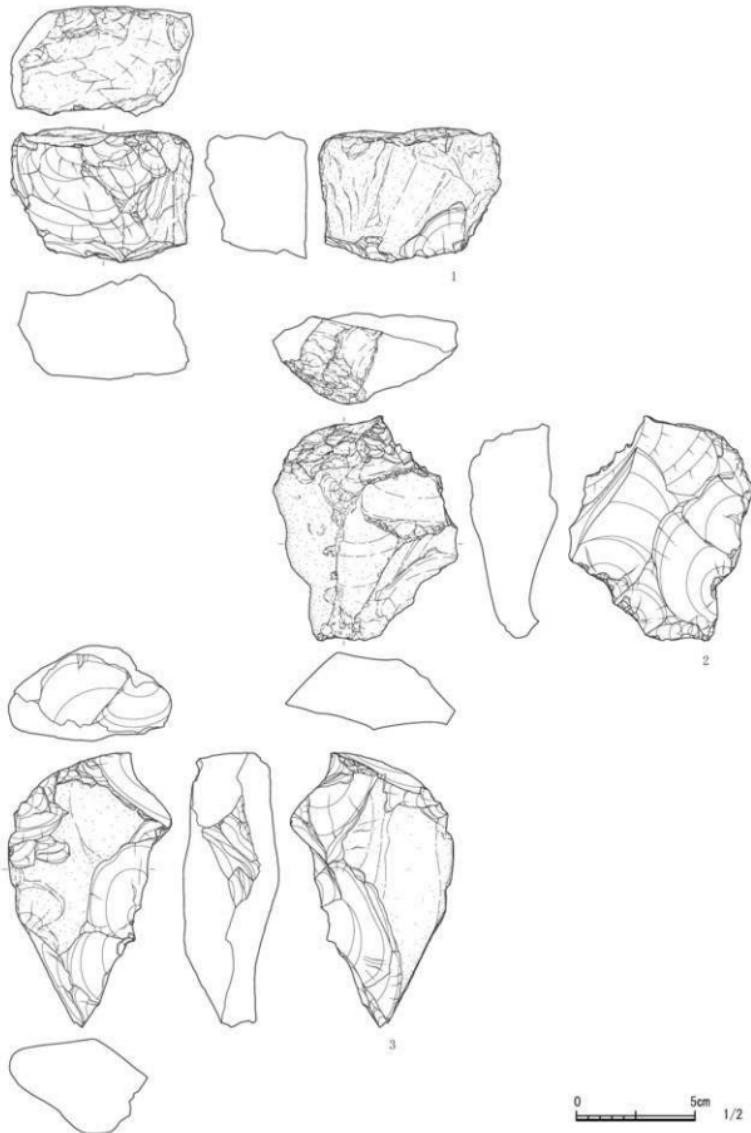


図48 遺構外出土遺物(3)



図49 遺構外出土遺物(4)

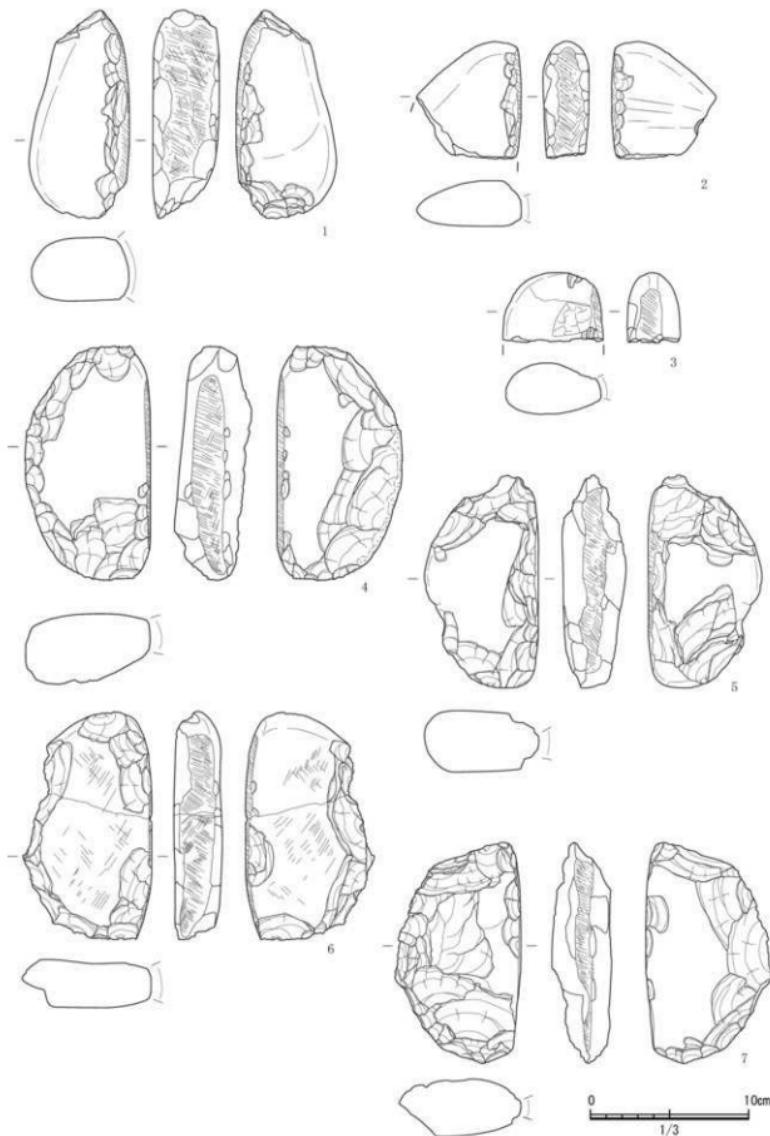


図50 遺構外出土遺物(5)

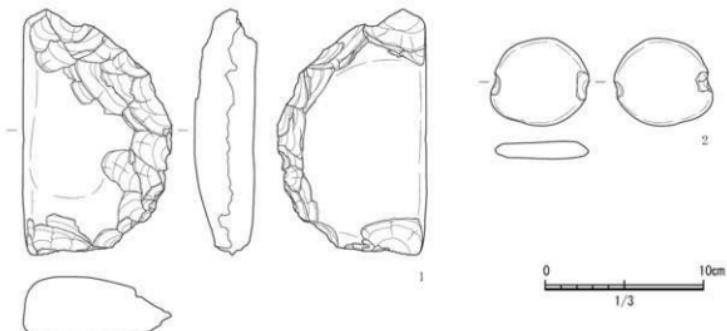


図51 遺構外出土遺物(6)

楕円形礫の長軸両端部を主体に剥離が施され形状的に抉入扁平打製石器には属する。

砥石：遺構内(SI06)から1点出土している(図25-1)。

被熱破損により一部を欠失している。両器面に擦痕が明瞭で、一侧縁は敲打にも使用されている。石材は唯一、流紋岩である。

石錐：沢跡と遺構外から各1点出土している。

図45-2は、偏平楕円礫の両端部を敲打により凹ませ、片面の一端部に剥離を施して抉りを入れている。図51-2は、薄い扁平礫の長軸両端に両面剥離を施している。

石製品：沢跡から1点出土している(図45-3)。

器体のほぼ半分が欠失している。厚手の円礫が素材と思われ、敲打により碗形に成形されている。

台石・石皿類：完成品と破損品が遺構内から10点、沢跡から2点出土している。

厚手の大型礫を素材に裏面がそのまま使用されているもので、二面使用のものが2点(図25-2、図45-5)のほかは一面使用である。

使用面が、スリ面(擦痕)のもの(図17-3・4、図31-1、図37-8)と、敲打痕のもの(図8-6、図37-9、図38-1～3、図45-4・5)がある。土坑と沢跡出土台石は、敲打による凹みが明瞭で、特に図45-5は播り鉢状に深く凹む。また10点中、5点が被熱しており6点が破損している。

(小田川)

第4章 自然科学分析

猪ノ鼻(2)遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科
佐々木 実

試料

分析を行った試料は、表1に示す5試料である。

分析方法および分析結果

上記5試料の火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子の実体顕微鏡による観察、および粒径250 μm のふるいを通過した試料を紫外線硬化樹脂により封止したスミアスライドの偏光顕微鏡による観察を行った。火山ガラスおよび火山灰起源鉱物の有無を確認し、その形態、構成鉱物の種類を記載した。

分析結果を、表2に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を、図1に示す。

火山灰の帰属

いずれの試料も、堅穴建物跡に堆積していた火山灰であるとされており、白頭山一苦小牧テフラか十和田aテフラに帰属すると予想されている。

白頭山一苦小牧テフラ(B-Tm)は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山(長白山)の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている(Oppeheimer et al., 2017; Hakozaiki et al., 2018)。

十和田aテフラは、平安時代に起きた十和田カルデラの最新噴火の噴出物である。軽石型およびバブル型の無色火山ガラスのほかに、褐色を呈する気泡の少ないガラス片を含む特徴がある。鉱物は斜長石、直方輝石、普通輝石を含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は從来AD915年とされてきたが(町田ほか, 1981; 早川・小山, 1998), 白頭山苦小牧テフラの年代がAD946年とされたことにより(Oppeheimer et al., 2017; Hakozaiki et al., 2018), 今後再検討される可能性がある。

上記2テフラは、褐色ガラスの有無、無色鉱物の種類(斜長石およびアルカリ長石)、有色鉱物の種類(普通輝石、直方輝石およびエジリンオージャイト)に違いが見られ、各試料にどのテフラに由来する物質が含まれているのかを推定できる。

表2に示す特徴から、いずれの試料も十和田aテフラに帰属すると推定される。SI03-1およびSI06-1については、微量の普通角閃石が含まれるため、試料中に十和田八戸テフラに由来する物質が含まれていると判断される。これは上下の土壌からの混入の可能性が考えられる。

引用文献

- Hakozaki, M., Miyake, F., Nakamura, T., Kimura, K., Masuda, K., & Okuno, M. (2018) Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774–775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*, 60, 261–268.
- 早川由紀夫・小山真入(1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日
—十和田湖と白頭山—。火山, 43, 403–407.
- Horiuchi, K., Sonoda, S., Matsuzaki, H. and Ohyama, M. (2007) Radiocarbon analysis of tree rings from a 15.5- calkyr BP pyroclastically buried forest: a pilot study. *Radiocarbon*, 49, 1123–1132.
- 町田 洋・新井房夫(2003), 新編火山灰アトラス ～日本列島とその周辺～。東京大学出版会,
336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, 562–569.
- Oppenheimer, C., L. Wacker, J. Xu, J.D. Galván, M. Stoffel, S. Guillet, C. Corona, M. Sigl, N. Di Cosmo, I. Hajdas, B. Pan, R. Breuker, L. Schneider, J. Esper, J. Fei, J.O.S. Hammond, U. Büntgen (2017) Multi-proxy dating the 'Millennium eruption' of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*, 158, 164–171.

表1 猪ノ鼻(2)遺跡 火山灰サンプル

試料記載	分析に使用した重量(g)	洗浄後重量(g)
SI03-1 (5層)	10.4	2.1
SI03-2 (7層)	7.8	1.9
SI05 (3層)	11.1	3.1
SI06-1 (4層)	2.3	0.7
SI06-2 (3層)	5.0	1.6

表2 猪ノ鼻(2)遺跡 火山灰記載

試料記載	火山ガラス			鉱物						帰属	
	bw	pm	br	pl	af	opx	aug	ag-aug	ho	opq	
SI03-1 (5層)	○	○	○	○	–	○	○	–	+	○	To-a (+To-H)
SI03-2 (7層)	○	○	○	○	–	○	○	–	–	○	To-a
SI05 (3層)	○	○	○	○	–	○	○	–	–	○	To-a
SI06-1 (4層)	○	○	○	○	–	○	○	–	+	○	To-a (+To-H)
SI06-2 (3層)	○	○	○	○	–	○	○	–	–	○	To-a

○:含まれる；+ :微量に含まれる；–:含まれない

bw: バブル型ガラス, pm: 軽石型ガラス, br: 褐色ガラス, pl: 斜長石, at: アルカリ長石

opx: 直方輝石(斜方輝石), aug: 普通輝石, ag-aug: エジンオージャイト, ho: 普通角閃石,

opq: 不透明鉱物

To-a: 十和田aテフラ, B-Tm: 白頭山苦小牧テフラ, To-H: 十和田八戸テフラ

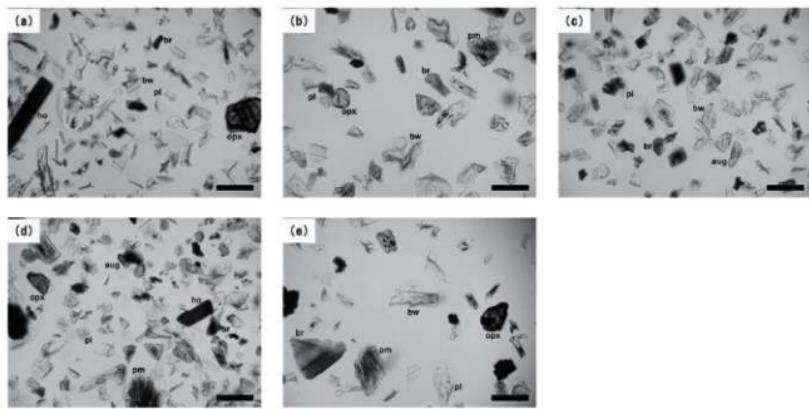


図1 火山灰試料の偏光顕微鏡写真 下方ポーラのみ（オープンニコル）。左下スケールの長さは 200 μm 。記号は表2と同じ。

(a) : SI03-1, (b) : SI03-2, (c) : SI05, (d) : SI06-1, (e) : SI06-2

第5章 総括

猪ノ鼻(2)遺跡からは、縄文時代と奈良・平安時代の遺構・遺物が発見され、複合遺跡であることが明らかとなつた。縄文時代の遺構は竪穴建物跡5棟、土坑17基、奈良・平安時代の遺構は竪穴建物跡3棟、土坑3基、焼土跡1基が検出されたほか、時期不明の土坑1基が検出されている。

遺物は縄文時代中期前葉～中葉の円筒上層式土器を主体として、縄文時代早期中葉、後期前葉、弥生時代中～後期、続縄文時代の後北C2・D式土器、奈良・平安時代の土師器と、これらに伴う剥片石器、礫石器などが段ボール箱で24箱出土した。円筒上層式土器、土師器以外の出土はごく少数である。

以下に竪穴建物跡、縄文時代の土坑についてまとめる。

縄文時代の竪穴建物跡 5棟 (SI01、SI02、SI04、SI07、SI08)

【時期】出土土器から以下の3期に分けられる。

- ・円筒上層 a 式期 (SI01、SI07、SI08)
- ・円筒上層 b 式期 (SI02)
- ・円筒上層 d 式期 (SI04)

【検出位置】円筒上層 a 式期の建物跡は丘陵端部の標高22.0～23.2mに位置している。特にSI01、SI07は並んで位置しているほか、炉形態や主軸方向なども似ており、併存していた可能性もある。円筒上層 b 式、d 式期は円筒上層 a 式期よりも標高の高い23.4～25.0mに位置しており、時期が新しくなるにつれて高い方へと遷移している。【平面形】円筒上層 a 、b 式期では楕円形を基調としたものと考えられる。円筒上層 d 式期はSI04が全体を検出できなかつたため不明である。【柱穴】円筒上層 a 式期のSI07では建物跡の長軸線上に位置するPitが対になって斜めに掘り込まれている状況を検出した（図28）。SI01、SI08でも長軸線上にPitが位置しており、主柱穴である可能性が考えられる。b 、d 式期では検出数が少なく不明である。【炉】円筒上層 a 式期では土器埋設炉と地床炉のセットとなる（SI01、SI07）。土器埋設炉は床面中央に、地床炉はそこから離れた場所に位置している。土器埋設炉の炉内にはいずれも土器片が敷かれている。なお、SI07では床面中央にある炉が土器埋設炉から地床炉へと変化した状況を検出した。円筒上層 b 、d 式期は地床炉である。【周構】円筒上層 a 式期のSI07、SI08では壁に沿って構築され、斜面下方で開口している。円筒上層 b 式期では全周に近い状況で巡り、円筒上層 d 式期では壁際の一部に構築されている。【特殊施設】SI07から周堤状の土盛りと、その内側からピットを検出した。これまでの調査・研究事例から特殊施設と呼ばれるものに相当する。建物跡の長軸線上に位置するのが一般的であるが、SI07では長軸、短軸の軸線上から外れた所に位置している。斜面上方にあたる東壁側から検出した。この場所は、斜面下方の周溝開口部を出入り口と見なすと、室内でも奥壁に位置している。周堤状の土盛りはハの字状に検出されたが、ピットを開くように弧状であったとも考えられる。Pitは壁を袋状に掘り込んで造られている。堆積土内及び周辺から特殊な遺物は出土しなかつた。

縄文時代の土坑 17基

検出状況や遺構の特徴から4細分した（第3章第2節）。この中で主体を占めているのはB群とした13基である（SK04、05、06、07、08、09、14、15、16、17、18、21、23）。南側調査区の標高22.4mラインより上からまとめて検出されている。B群からは分割された石皿や大型の礫が出土する土坑が多く、これらが接合した5基の土坑を検出した（図39）。SK06、08、18では石皿が、SK09とSK15では自然礫が接合した。接合した石皿と礫は完形に復元される事から、意図的に分割して土坑に入れ

たものと考えられる。出土状況を見ると、SK08、18では底面ないしは底面直上から出土しており、土坑が開口していた段階で置かれたものと捉えることができる。しかし、SK06は堆積土下位で20cmほど埋まった位置から出土しており、若干の違いがある（図39）。SK06、SK18の堆積状況は、遺物の上位に黒色土がレンズ状に堆積している。また、SK08では遺物の上に何層か堆積しているが、均一な土質で混入物も少なく自然堆積した状況を示している。いずれの土坑も基質の異なる土が混合して堆積したような状況ではない。このことから、土坑は礫が置かれた後も開口したままであった可能性がある。B群の時期は出土土器や遺構との重複関係から、円筒上層b式期以降d式期以前と捉えることができる。他に縄文時代前期前葉以前の落とし穴と思われる底面に逆茂木痕を有する土坑が1基（SK10）、標高21.8m付近で並んで検出された大型の土坑2基（SK01、20）、詳細不明の1基（SK12）がある。

奈良・平安時代の竪穴建物跡 3棟（SI03、SI05、SI06）

【時期】To-aの堆積状況と出土遺物から以下の3期に分けられる。

- ・8世紀中頃～9世紀初頭（SI05）
- ・9世紀後半～10世紀前葉でTo-a降下以前（SI03）
- ・9世紀後半～10世紀前半代でTo-a降下以後に埋没（SI06）

【検出位置】標高22.8～24.6mに位置している。【堆積状況】To-a火山灰の堆積状況は以下のとおりである。堆積土上位にレンズ状に堆積（SI05）、下位にレンズ状に堆積（SI03）、ブロック状に二次堆積（SI06）【カマド】8世紀中頃～9世紀初頭のSI05では北側に造られ、煙道は地下式。9世紀後半～10世紀前葉のSI03では東側に造られ、煙道は半地下式、9世紀後半～10世紀前半代のSI06では東側に造られ煙道は地下式である。いずれの遺構もカマドは壙されているが、構築材に使われた粘土は床面から出土しなかった。粘土は持ち去ったか、別なところに廃棄したものと考えられる。SI06ではカマド周辺に遺物が集中し、煙出し孔を塞ぐように自然礫が埋められていたことから、カマドを廃棄する際に祭祀的な行為が行われた可能性がある（図21、22）。【出土遺物】SI05では壺、高台壺、甕、小型甕の略完形個体が1点ずつ出土した（図20）。なお、ロクロ調整が施されているものは出土しなかった。SI03では土師器の出土が少なかったが、槍鉋がカマド袖の検出面から出土した（図11、12）。SI06は前述したようにカマド周辺に遺物が集中していたが、出土した器種は甕、壠だけで、壺が全く含まれておらず器種組成に偏りがある（図21）。鉄製品は刀子のほか器種不明の棒状鉄製品が出土した（図26）。

小結

本遺跡は縄文時代の早期中葉頃から土地利用の痕跡が見られ、縄文時代前期前葉以前には主に狩猟場として使われていた。この状況は、当該期の坪川中流域に見られる傾向と一致する。その後、縄文時代中期前葉の円筒上層a式期に集落が営まれ始め、中期中葉の円筒上層d式期に至るまで続く。なお、谷底平野の底から円筒上層a式土器が出土しており、集落開始期には谷が開拓していたものと考えられる。縄文人は、眼前が急激に落ち込んでいる丘陵縁辺部を意図的に選地したのである。しかし、時と共に居住域は標高の高い方へと移っていき、集落の後半には調査区内で土坑群が造られるようになる。これ以降、調査区内では奈良・平安時代に至るまで集落は造られないが、縄文時代後期前葉、弥生時代中～後期、統縄文時代の遺物が少ないながらも出土していることから、何らかの人的活動があったと思われる。8世紀中頃～9世紀初頭になると再び集落が造られ、その後、10世紀代前半まで続く。竪穴建物跡は3棟しか検出されなかったが、南に2kmほど離れた猪ノ鼻（1）遺跡では当該期の竪穴建物跡が相当数検出されており、遺跡周辺において人的活動が活発化していた状況がうかがえる。

引用・参考文献

- 青森県 2005 『青森県史 資料編 考古3』
- 青森県 2013 『青森県史 資料編 考古2』
- 青森県教育委員会 2018 『夷堂遺跡・塚長根遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 590 集
- 青森県教育委員会 2019 『後平（1）遺跡・後平（2）遺跡・後平（3）遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第 591 集
- 青森県教育委員会 2020 『後平（4）遺跡・後平（1）遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第 607 集
- 七戸町教育委員会 2007 『二ツ森貝塚』七戸町埋蔵文化財調査報告書第 71 集
- 村越 潔 1976 「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』
- 沼宮内陽一郎 1998 「半円状扁平打製石器の機能面について」『桜峯（1）遺跡調査報告書』
(青森市埋蔵文化財調査報告書 第 36 集) 青森市教育委員会
- 小島朋夏 1999 「研究ノート北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第 35 輯
- 茅野嘉雄 2000 「南郷村畠内遺跡出土のすり石について」『研究紀要』第 5 号
青森県埋蔵文化財調査センター
- 藤原秀樹 2002 「半円状扁平打製石器について」『八雲町山越 3 遺跡・山越 4 遺跡』
北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第 166 集
財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 齋藤 岳 2003 「研究ノート三内丸山遺跡第 6 鉄塔地区の石器組成と抉入扁平磨製石器の使用
法について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』第 6 号 青森県教育委員会
- 三宅徹也 2011 「半円状扁平打製石器について」『向田（36）遺跡』
(野辺地町文化財調査報告書 第 17 集) 野辺地町教育委員会
- 上條信彦 2014 「『扁平石器』の形態的分布からみた円筒土器文化圏の動態 ～半円状扁平打製石器、
抉入扁平打製石器、抉入扁平磨製石器を中心に～」
『青森県考古学』第 22 号 青森県考古学会

表3 土器観察表

図番	出土位置	層位	P番	型式・種別	器種	部位	文様等
7 1	SI01 SI01 0-10	炉体、炉内 覆土 II層	-	円筒上層式	深鉢	胴部～底部	底径13.0cm LR横回、縦位の練絵文。
7 2	SI01炉	炉体、炉内	-	円筒上層式	深鉢	口縁	結束1羽状(LR、RL)
8 1	SI01	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
8 2	SI01	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	口唇：LR側圧、器面及び隆帯上側圧、ハの字状側圧。
8 3	SI01 M-10	覆土 II層	-	円筒上層式	深鉢	胴部～底部	結束1羽状(LR、RL)、底径(11.0cm)。
9 1	SI02	床直	-	円筒上層b式	深鉢	胴部	口径22.0cm 口縁部：R側圧(直線状、弧形)隆帯貼付、隆帯上R側圧、胴部：結束(LR)横回、繩端結節。
9 2	SI02	床直 覆土	-	円筒上層b式	深鉢	略完形	口径(25.0cm)、高さ26.0cm、底径13.0cm 口唇：隆帯貼付、隆帯上側圧。口縁部：L、R側圧(直線状、弧形)、隆帯、隆帯上R側圧、胴部：結束1羽状(LR、RL)横回、繩端結節。
10 1	SI02	床面 覆土	P-2	円筒上層b式	深鉢	略完形	口径19.0cm、高さ22.0cm、底径8.6cm 口唇：隆帯貼付、隆帯上側圧、口縁部：L側圧(直線状)弧形)隆帯、隆帯上側圧、胴部：結束1羽状(LR、RL)横回、繩端結節。
11 1	SI03†?	覆土	P-1	土師器	甕	口縁	口径(19.4cm)、(外面)ヨコテナリ、タケリ、(内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
11 2	SI03	覆土	-	土師器	甕	口縁	口径(10.4cm)、(外面)ヨコテナリ、タケリ、(内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
11 3	SI03	床面	-	弥生 (中～後期)	甕	胴部	RL横回、文様間の間隔が空いている。
11 4	SI03	覆土	-	統説文 後北C2-b式	甕	口縁	口唇：両端に連続刻み、器面：三角形状の連続刻み、微隆帯、RL縦回。
14 1	SI04	1層 3層	P-1	円筒上層d式	深鉢	口縁～胴部	口縁が大きく渋曲している器形である。文様構成、復元された器高から深鉢と判断した。 口縁に突起が貼り付けられている。現存している突起は2単位。口唇部：細縫帶貼付。地文としてRL横回後に細縫帶を貼り付け文縫帶を区画。隆帯の脇に刻線が記されているところもある。
15 1	SI04(古)	覆土	-	円筒上層b式	深鉢	口縁	口唇に縱位のR側圧、器面R、L側圧、爪形側圧。
15 2	SI04(古)	覆土	-	円筒上層式	深鉢	胴部	RL横回、隆帯。
20 1	SI05†?	覆土	P-7	土師器	壺	略完形	口径10.5cm、器高(8.0)cm、丸底、底部の接地面径(3cm)外面)タケリ、ヨコテナリ。
20 2	SI05	床面 覆土	P-10 P-2	土師器	高台壺	略完形	口径(16.0cm)、高さ7.7cm、底径6.0cm (外面)ヨコテナリ、口縁部に弱い沈縫状のヨコテナリ、胴部上半は「泡張」、下半はタケリ、(内面)ヨコテナリ、黒色処理。
20 3	SI05	床面 覆土 覆土	P-8 P-9 P-10 P-4	土師器	甕	略完形	口径(15.8cm)、高さ13.6cm、底径7.0cm 口縁：内窪(弱い段有り)して立ち上がる。 (外面)ヨコテナリ、胴部下半タケリ、胴部上半弱タケリ、ハナテナリ(内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
20 4	SI05	覆土	P-6	土師器	小型甕	完形	口径6.6cm、高さ8.1cm、底径3.6cm (外面)タケリ、タケリ、ハナテナリ、(内面)タケリ。
20 5	SI05	床面 覆土	P-10 P-3	土師器	甕	底部	底径6.7cm、(外面)タケリ、(底面)タケリ、(内面)ハナテナリ。
20 6	SI05	覆土	-	土師器	甕	口縁	(外面)沈縫(内面)ミガキ。
20 7	SI05	覆土	-	後期前葉	深鉢	胴部	沈縫(3本一组か?)横、斜位。
20 8	SN01	覆土	P-1	土師器	甕	口縁～胴部	(外面)ヨコテナリ、タケリ、タケリ (内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
20 9	SN01	覆土	P-1	土師器	甕	底部	底径(10.8cm)、(外面)タケリ、(底部)外縫帶、(内面)ハナテナリ。
23 1	SI06 SI06†?	床面 2層 覆土 排煙部覆土 排煙部覆土 上層	P-3 P-8 P-14	土師器	甕	略完形	口径16.2cm、器高16.1cm、底径10cm (外面)ヨコテナリ、タケリ、タケリ (内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
23 2	SI06†?	覆土 左袖	- P-13	土師器	甕	略完形	口径(13.4cm)、高さ14cm、底径9.2cm (外面)ヨコテナリ、タケリ (内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
23 3	SI06	床面	P-4	土師器	甕	口縁	口径(14.0cm)(外面)タケリ、(内面)ハナテナリ。
23 4	SI06†?	1層	P-10	土師器	甕	口縁	(外面)ヨコテナリ、タケリ、(内面)ヨコテナリ、ハナテナリ。
23 5	SI06 SI06†?	床面、覆土 左袖、 煙道覆土 カマド2層	P-5 P-10 P-13 P-7	土師器	甕	口縁～胴部	(口径)14cm (外面)タケリ、ヨコテナリ、(内面)ハナテナリ、ヨコテナリ。

図番	出土位置	層位	P番	型式・種別	器種	部位	文様等
23 6	S106 か7-*	火床面上	P-12	土師器	甕	口縁	口径(20.4cm)、(外面)ココナ、ケツリ、(内部)ココナ、ヘラナ。
23 7	S106 か7-*	1層 焼造覆土 排煙部覆土	P-10	土師器	甕	胴部～底部	底径9.8cm、 (外面)ケツリ、(内部)ヘラナ。
24 1	S106 か7-*	1層 床面	P-10 P-5	土師器	壺	口縁～胴部	口径(26.5cm) (外面)ココナ、ケツリ、(内部)ココナ、ヘラナ。
24 2	S106 か7-*	1層	P-10	土師器	壺	口縁	口径(26.0cm) (外面)ココナ、ケツリ、(内部)ココナ、ヘラナ。
24 3	S106 か7-*	床直、覆土 カマド2層	P-1 P-2 P-6	須恵器	甕	胴部～底部	口径(26.4cm) 口縁整形、(外面)ケツリ、(内部)ヘラナ。 外面に形成時のものと思われる煤付着。
24 4	S106 か7-*	2層	P-9	須恵器	甕	胴部	(外面)リ目、修復痕?削り取り痕? (内部)アサ。
29 1	S107 爐 S107	炉体、炉内 覆土	-	円筒上層式	深鉢	胴部～底部	底径13.0cm LR横回。
29 2	S107 爐	炉体、炉内	-	円筒上層式	深鉢	胴部	底径12cm、LR横回、縦位の線絵文。
29 3	S107 爐	-	P-1	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
29 4	S107Pit5	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、器面及び隆帯上LR側圧。
29 5	S107	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
29 6	S107	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
29 7	S107	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	RL側圧。
29 8	S107	覆土	-	後期前葉	深鉢	胴部	沈線(格子目状)。
32 1	S108	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
32 2	S108	覆土	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
36 4	SK12	覆土	-	円筒上層式	深鉢	胴部	器面LR横回、隆帯LR側圧。
36 5	SK14	覆土	-	円筒上層d式	深鉢	口縁～胴部	4単位の波状口縁、開口部径(19.6cm)、口縁部文様帯には細隆帯貼り付け、胴部はLR横回。
36 6	SK14	覆土	-	円筒上層c式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上側圧、器面には竹管状工具による刺突、LR横回。
37 3	SK15	覆土	-	円筒上層c式	深鉢	胴部	隆帯、隆帯上刻み、器面には竹官状工具による刺突。
37 5	SK20	覆土	-	円筒上層式	深鉢	口縁	口縁、器面、LR側圧。
37 7	SK22	覆土	-	土師器	甕	底部	底径(9.0cm)、(外面)ケツリ(内部)ヘラナ。 底部丸底黒。
41 1	沢 K-11	沢5層	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧。
41 2	沢 K-11	沢5層	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	口唇、器面、隆帯: RL側圧。
41 3	沢 K-11	沢5層	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上側圧、器面RL側圧。
41 4	沢 K-11	沢6層	-	円筒上層b式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上?: 側圧、器面L側圧(爪形)。
41 5	沢 J-12	沢3層	-	円筒上層c式	深鉢	口縁	口唇: LR側圧。器面に竹管状刺突、隆帯。
41 6	沢 L-8	沢4層 沢5層	-	円筒上層d式	深鉢	口縁～胴部	口径30.0cm、口縁: 平口縁で4単位の突起がある。突起は鱗状となっており、その下位には橋状把手が貼り付けられている。文様: 地面としてLR横回後、細隆帯貼付。隆帯により文様帯を区画しており、幅は器体の3分の2程度。被絞孔。
41 7	沢 L-8	沢5層	-	後期前葉	深鉢	口縁	隆帯。LR側圧。
41 8	沢 K-11	沢5層	-	甕?	甕?	口唇	口唇: LR回転、外面: 沈線、LR回転。
41 9	沢 K-11	沢5層	-	甕?	甕?	胴部	RL横回、沈線(平行)。
41 10	沢(北)	I層	-	甕?	甕?	胴部	RL横回、沈線。
46 1	N-10	I層	-	早期 ルミ式	深鉢	胴部	沈線(羽状)。
46 2	M-10	II層	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	器面LR側圧、隆帯、結節回転文。
46 3	O-8	III層	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	器面、隆帯上側圧。
46 4	N-9	II層	-	円筒上層a式	深鉢	口縁	口唇部に微小な刺突、隆帯、器面・隆帯上にLR側圧。
46 5	N-O-8	II層	-	円筒上層b式	深鉢	胴部～底部	底径(11.0)mm、口縁部: 隆帯、隆帯上側圧(原体不明)、器面、R、L側圧(直線状、爪形)、胴部: 結束1羽状(LR, RL)。
46 6	O-8	III層	-	円筒上層b式	深鉢	口縁	隆帯、隆帯上及び器面にLR側圧、器面には他爪形側圧。
46 7	試掘 トラン	-	-	円筒上層b式	深鉢	口縁	口唇: 縄の側圧(r?)、器面: L側圧(爪形、直線的)。
46 8	O-8	III層	-	円筒上層c式	深鉢	胴部	隆帯、隆帯上側圧、器面竹管状刺突。
46 9	O-11	II層	-	円筒上層d式	深鉢	口縁	細い隆帯、隆帯上無文。
46 10	O-11	II層	-	円筒上層式	深鉢	口縁	山形突起(小)LR側圧、回転、隆帯。

図番	出土位置	層位	P番	型式・種別	器種	部位	文様等
46 11	O-11	II層	-	円筒上層式	深鉢	口縁	口縁に隆帯貼付、隆帯上RL横回、器面RL横回 (調査回収文もあり)。
46 12	表採	-	-	後期前葉	深鉢	口縁	沈線(長方形状)。
46 13	E-20	II層	-	後期前葉	深鉢	胴部	沈線(長方形状)。
46 14	O-8	II層	-	弥生 (中~後期)	甕?	口縁	口唇: 圆形突起、頂部に連続刺突、口唇に沿って隆帯、隆帯上にも連続刺突、器面: RL斜肩、文様間の幅が広い。補修孔。
46 15	N-8	III層	-	弥生 (中~後期)	甕?	口縁	口唇刻み。
46 16	表採	-	-	弥生 (中~後期)	甕?	胴部	RL回転。
46 17	O-7	II層	-	弥生 (中~後期)	甕?	胴部	RL横回。
46 18	Q-10	II層	-	弥生 (中~後期)	甕?	胴部	RL回転。
46 19	K-12	I層	-	弥生 (中~後期)	鉢? 甕?	胴部	LR回転、沈線。
46 20	M-10	II層	-	弥生 (中~後期)	鉢? 甕?	胴部	LR回転。
46 21	H-21	II層	-	弥生 (中~後期)	鉢? 甕?	胴部	沈線(重層的)。
46 22	M-11	II層	-	弥生 (中~後期)	鉢? 甕?	底部	底径(62mm)、RL横回(条の間隔が広め)。
46 23	P-8	II層	-	土師器	甕?	口縁	##整形、(内面)ヨコナフ、ヘラテ。

表4 石器・石製品観察表

図番	器種(部分)	出土位置	層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
8 4	スリ石 (手刃伏砥平打製石器)	S101	覆土	安山岩	135	72	37	443.6	周縁剥離、一侧縁スリ面
8 5	礪器	S101	覆土	安山岩	99	62	24	165.1	弧状に剥離。直線的側縁未加工自然面
8 6	台石・石皿類	S101	確認面	安山岩	257	(173)	123	9140.0	被熱、破損、厚手縁、一面使用
10 2	石槍	S102	覆土	珪質頁岩	(70.7)	25.8	7.8	(11.5)	
10 3	スリ石 (手刃伏砥平打製石器)	S102	覆土	安山岩	(77)	73	37	316.7	破損、側縁スリ面・敲打、破断面磨滅
15 3	石鍬	S104	1	珪質頁岩	(28.8)	14.7	6.1	(2.7)	破損品
15 4	両面調整	S104	覆土	珪質頁岩	(34.8)	17.9	9.2	(5.2)	破損品
15 5	両面調整	S104	覆土	珪質頁岩	(37.5)	(26.2)	13.0	(10.4)	破損品
15 6	石鍬	S104	3	珪質頁岩	53.8	28.8	11.2	10.6	S-2
15 7	スカイバー ⁺	S104(古)	床直	珪質頁岩	66.9	26.8	11.9	17.7	抉入
15 8	両面調整 (右端)	S104	3	珪質頁岩	119.3	37.2	25.0	103.1	端部摩滅、S-15
15 9	両面調整	S104	3	珪質頁岩	112.9	43.8	27.2	114.1	同一母岩の剥片が相当数出土。S-16
15 10	石核	S104	3	珪質頁岩	61.7	70.0	29.7	144.2	S-12
16 1	石核	S104	3	珪質頁岩	119.5	125.2	78.8	1161.4	同一母岩の剥片が相当数出土。S-4
16 2	剥片	S104	3	珪質頁岩	68.9	47.8	15.3	18.1	S-1
16 3	剥片	S104	3	珪質頁岩	81.4	37.2	10.5	14.7	S-5
16 4	剥片	S104(古)	床直	珪質頁岩	75.5	(57.5)	17.6	(45.1)	
16 5	剥片	S104	3	珪質頁岩	48	22.9	10	4.7	S-1
17 1	礪器	S104	3	凝灰岩	117	112	39	459.9	片面一剥離、S-6
17 2	敲石	S104	3	安山岩	140	108	48	954.1	二側縁敲打、S-3
17 3	台石	S104(古)	床面	安山岩	320	225	120	11960.0	被熱、厚手縁、一面使用、S-2
17 4	台石	S104(古)	床面	安山岩	282	229	86	7300.0	扁平縁、一面使用、S-1
20 10	敲石・スリ石	S105	覆土	安山岩	(83)	63	41	301.1	破損、一側縁敲打、一面擦痕、S-2
20 11	スリ石 (その他スリ石)	S105	床面	安山岩	171	85	56	908.1	一面面擦痕、S-4
25 1	砥石	S106	床直	流紋岩	(122)	88	41	477.1	被熱、破損、両器面擦痕。一側縁敲き・擦痕、S-7
25 2	台石	S106	床面	凝灰岩	279	160	94	4280.0	被熱、橢円形縁、二面使用、S-3
25 3	両面調整	S106	覆土	珪質頁岩	95.4	31.6	20.9	58.9	
25 4	スリ石 (手刃伏砥平打製石器)	S106	覆土	凝灰岩	(90)	77	32	291.3	破損、周縁剥離、一侧縁スリ面
29 9	石鍬	S107	床面	珪質頁岩	(42.0)	12.7	6.4	(3.2)	
29 10	石鍬	P102	覆土	珪質頁岩	(40.2)	12.4	5.6	(2.7)	
29 11	石鍬	S107 P104	覆土	珪質頁岩	(51.8)	14.6	6.6	(3.2)	

国 番	器種 (縦分)	出土位置	層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
29	12 石錐	SI07	覆土	珪質頁岩	47.6	39.5	12.0	13.1	
29	13 スリ(バ'-	SI07	覆土	珪質頁岩	64.7	(44.6)	14.0	(32.2)	
29	14 スリ(バ'-	SI07	床直	珪質頁岩	51.6	28.1	10.4	(11.4)	S-6
29	15 両種	SI07	覆土	玉髓	27.9	24.3	6.4	4.5	
30	1 スリ石 (扁平石器)	SI07	覆土	安山岩	(93)	79	27	269.6	破損、両側縁剥離、一側縁スリ面、或は断面摩滅
30	2 スリ石 (扁平石器)	SI07	覆土	凝灰岩	(60)	76	21	130.1	破損、両側縁剥離、一側縁スリ面、或は断面摩滅
30	3 スリ石 (投入扁平打製石器)	SI07 Pit64	覆土	凝灰岩	168	72	31	207.8	両端部剥離、一側縁スリ面、或は断面摩滅、S-3
30	4 スリ石 (投入扁平打製石器)	SI07	床面	安山岩	136	68	24	275.9	周縁剥離、一側縁スリ面、S-1
30	5 碓器 (手円状扁平打製石器)	SI07	覆土	凝灰岩	138	73	42	472.1	一側縁弧状剥離、一側縁自然未加工
30	6 敲石	SI07	覆土	凝灰岩	82	65	32	296.9	周縁崩き痕
31	1 台石	SI07	覆土	安山岩	374	315	100	17980.0	大型扁平確、一面使用
36	1 スリ石 (削出摩耗系磨石)	SK01	底面	凝灰岩	123	69	34	332.0	一側縁スリ面、両面凹み、S-1
36	2 スリ石 (投入扁平打製石器)	SK09	覆土	凝灰岩	136	78	25	391.9	周縁剥離、一側縁スリ面
36	3 敲石・スリ石	SK12	検出面	凝灰岩	160	77	67	1131.3	三角柱状窪、一側縁敲打、器面擦痕・浅い凹み、S-2
36	7 石砲	SK14	覆土	珪質頁岩	45.8	15.6	7.8	4.4	
36	8 両面調整	SK14	覆土	珪質頁岩	38.6	30.9	15.6	18.7	破損品
36	9 敲石	SK14	覆土	安山岩	142	93	48	999.5	一側縁敲打
37	1 敲石	SK15	覆土	安山岩	(108)	91	57	810.6	破損、端部敲打、一側縁敲打・弱いスリ面
37	2 碓器 (手円状扁平打製石器)	SK15	覆土	安山岩	(99)	87	46	515.7	破損、周縁剥離のみ
37	4 石錐	SK16	覆土	珪質頁岩	32.0	15.6	5.8	2.9	石錐の軽用品
37	6 碓器 (扁平石器)	SK21	覆土	凝灰岩	(117)	92	43	834.7	破損、側縁剥離、両器面弱い・擦痕
37	8 台石・石皿	SK23	覆土	安山岩	261	114	100	5120.0	厚手構造、一面使用、S-1
37	9 台石・石皿	SK23	覆土	凝灰岩	(221)	261	102	6380.0	破損、一面使用、敲打弱い・凹み面、S-2
38	1 台石・石皿	SK06	覆土	凝灰岩	(318)	(93)	(120)	3820.0	破壊、一面使用、敲打凹み、S-1
38	2 台石・石皿	SK08	覆土	凝灰岩	(315)	(185)	(109)	6060.0	破壊、一面使用、敲打凹み、S-1
38	3 台石・石皿	SK18	覆土	凝灰岩	(217)	(165)	126	4460.0	破壊、一面使用、敲打凹み
38	4 自然礫	SK09	覆土	安山岩				6840.0	
		SK15	覆土	安山岩	250	241	115	2800.0	
41	11 石槍	沢L-8	沢4	珪質頁岩	(76.9)	26.1	10.1	(16.6)	
41	12 両面調整	沢L-8	沢4	珪質頁岩	73.0	29.6	18.0	35.6	
41	13 両面調整	沢K-11	沢5	珪質頁岩	(51.7)	38.9	20.4	(42.4)	
41	14 両面調整	沢K-11	沢5	珪質頁岩	(75.5)	47.2	24.5	(72.7)	
41	15 スリ(バ'-	沢K-11	沢5	珪質頁岩	74.1	45.0	18.2	55.8	
42	1 石錐	沢L-8	沢4	珪質頁岩	44.0	37.8	8.0	8.8	
42	2 スリ(バ'-	沢L-8	沢4	珪質頁岩	83.0	56.9	21.5	55.9	
42	3 石核	沢K-11	沢4	珪質頁岩	58.8	62.4	47.8	175.8	
42	4 敲石	沢K-11	沢5	安山岩	85	49	39	206.1	柱状窪、両端部使用
42	5 敲石	沢K-11	沢5	安山岩	124	113	32	660.2	扁平円錐、一側縁使用
42	6 磨石	沢L-8	沢4	安山岩	(129)	(90)	(48)	700.2	平手鍬、剥離後破損、側縁(端)使用
43	1 敲石 (投入扁平打製石器)	沢L-8	沢4	安山岩	137	77.5	30	470.0	両端部両面剥離、側縁敲打
43	2 スリ石 (扁平石器)	沢L-8	沢4	安山岩	133	61	(29)	398.1	一側縁両面剥離、同一側面スリ面
43	3 スリ石 (投入扁平打製石器)	沢L-8	沢4	安山岩	140	72	37	555.4	両端部両面剥離、一側縁スリ面、一部敲打
43	4 スリ石 (投入扁平打製石器)	沢K-11	沢5	凝灰岩	141	80	36	604.3	両端部両面剥離、片面一側縁剥離、一側縁スリ面
43	5 スリ石 (投入扁平打製石器)	沢L-8	沢4	安山岩	125	63	32	405.1	一端部と一側縁両面剥離、同一側面スリ面
43	6 スリ石 (手円状扁平打製石器)	沢K-11	沢5	凝灰岩	(100)	75	33	314.6	破損、破断面摩滅、周縁剥離、一側縁スリ面
44	1 スリ石 (手円状扁平打製石器)	沢K-11	沢5	凝灰岩	(131)	94	36	642.5	破損、破断面摩滅、周縁剥離、一側縁弱い・擦痕
44	2 スリ石 (扁平石器)	沢L-8	沢4	石英安山岩 (?)付)	98	96	40	592.6	破損、破断面摩滅、端部側縁剥離、一側縁スリ面
44	3 スリ石 (投入扁平打製石器)	沢K-11	沢5	凝灰岩	(88)	(86)	(41)	457.6	破損、破断面摩滅、片面に剥離、一側縁スリ面
44	4 碓器 (扁平石器)	沢K-11	沢5	凝灰岩	157	74	32	544.8	一側縁両面剥離、片面一端部剥離

国番	器種 (分類)	出土位置	層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
44 5	礪器 (鉄人頭平打製石器)	沢L-8	沢4	安山岩	118	68	33	370.6	両端部両面削離
45 1	スリ石 (北海道式右冠類似)	沢L-8	沢4	安山岩	133	67	50	694.5	全面擦り面、両面中央弧状側縁両端部敲打、一個縁スリ面
45 2	石鍬	沢K-11	沢5	凝灰岩	111	76	33	299.3	扁平稍円錐、片側一部斜削離、両面両端部敲打で抉り
45 3	石製品 (石錐)	沢L-8	沢4	凝灰岩	114	(70)	68	405.8	破損、小型ルツボ状、全面敲打成形
45 4	台石・石皿	沢K-11	沢5	凝灰岩	(186)	(218)	(115)	5260.0	被熱、破損、厚手錐、一面使用
45 5	台石・石皿	沢L-8	沢5	凝灰岩	(301)	(223)	102	4340.0	被熱、破損、厚手錐、二面使用、敲打すり跡込み
47 1	石鍬	0-8	III	珪質頁岩	(30.1)	11.8	6.1	(1.9)	
47 2	石鍬	N-8	III	珪質頁岩	38.7	14.1	6.1	3.0	
47 3	石鍬	0-8	III	珪質頁岩	(36.5)	12.1	6.7	(2.5)	
47 4	石鍬	N-0-9	II	珪質頁岩	(49.4)	15.9	7.6	(5.1)	
47 5	石鍬	保溝課 レシナ	埋土	珪質頁岩	(38.2)	18.4	6.6	(3.5)	
47 6	石鍬	0-8	III	玉髓	33.9	17.6	8.0	3.6	
47 7	石鍬	Q-9	II	珪質頁岩	(34.6)	16.2	9.9	(3.7)	
47 8	両面調整	0-8	III	珪質頁岩	(46.2)	33.9	12.9	(19.2)	破損
47 9	石槍	0-8	III	珪質頁岩	121.2	31.9	14.5	51.9	
47 10	両面調整	擾乱	擾土	珪質頁岩	85.5	27.2	14.9	30.2	
47 11	両面調整	0-8	III	珪質頁岩	59.5	25.2	19.6	20.7	
47 12	石鍬	N-8	III	珪質頁岩	(36.6)	(21.1)	7.4	(4.5)	
47 13	スレート	P-6	II	珪質頁岩	66.9	68.2	24.9	122.9	
47 14	スレート	N-8	III	珪質頁岩	56.8	54.6	12.4	21.8	
47 15	両撫	0-8	III	珪質頁岩	71.9	51.7	21.2	78.0	石核
47 16	二次加工	N-10	II	珪質頁岩	84.2	36.1	22.4	59.9	
48 1	石錐	N-8	III	珪質頁岩	56.8	76.8	46.1	287.1	
48 2	石核	L-11	II	珪質頁岩	94.8	77.7	38.3	241.3	
48 3	石核	表採		珪質頁岩	115.6	68.5	40.0	258.0	
49 1	磨製石斧	K-11	I	安山岩	(106)	52	31	272.2	刃部・基部破損、両面擦痕。一部敲打痕残る
49 2	磨製石斧	N-0-8	II	珪質頁岩	85	24	12	35.6	小型石斧(石鑿)、擦り切り痕
49 3	敲石	L-11	II	安山岩	139	81	75	1091.3	厚手椎円形錐、一側縁敲打面
49 4	敲石	M-7	III	安山岩	(86)	(58)	(30)	177.8	扁平椎円形錐、破損、一側縁敲打
49 5	敲石・スリ石	R-6	I	安山岩	109	52	40	316.1	柱状椎円錐、一側縁敲打、一側面弱い擦痕
49 6	スリ石	0-8	III	凝灰岩	109	81	26	372.6	扁平椎円錐、両端部削離、一側縁スリ面
49 7	スリ石・敲石 (削山摩耗石の石)	M-7	III	凝灰岩	133	65	52	418.9	柱状椎円錐、一側縁幅広スリ面、両端部敲打
49 8	スリ石 (削山摩耗石)	P-8	II	安山岩	139	68	36	567.7	長楕円錐、両側縁両面削離、一側縁スリ面(薄肉)
50 1	スリ石 (削山摩耗系磨石)	M-7	III	凝灰岩	133	64	43	558.4	長楕円錐、両側縁両面削離、両端剥離(結穴)一側縁スリ面
50 2	スリ石 (削山右部)	P-8	II	安山岩	75	30	29	225.4	破損、被削面減滅、一側縁両面削離・スリ面、露面状跡
50 3	スリ石 (削山右部)	0-8	II	凝灰岩	(45)	65	34	125.3	被削、破損。一側縁スリ面
50 4	スリ石 (削山右部)	-	表採	安山岩	140	75	47	621.6	周縁削離、一側縁スリ面
50 5	スリ石 (削山右部敲打製石器)	N-10	II	安山岩	136	73	42	548.3	周縁削離(両端部主)、一側縁スリ面
50 6	スリ石 (削山右部敲打製石器)	P-8	II	凝灰岩	146	82	31	551.1	破損接合、周縁削離、一側縁スリ面
50 7	スリ石 (削山右部敲打製石器)	N-10	II	安山岩	141	80	38	562.1	周縁削離、一側縁スリ面
51 1	礪器	L-11	II	安山岩	158	96	38	777.7	弧状に削離。直線的側面未加工自然面
51 2	石鍬	-	表採	凝灰岩	57	63	11	63.5	扁平小椎円錐、長軸方向両端部削離抉り

表5 鉄製品観察表

国番	整理番号	器種	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
11 5	376	鉄塊	S103	pit 3 覆土	46	34	21	24.0	
12 1	377	鉈	S103	カマド	(173)	(47)	刀3・柄7	66.1	柄端部破損
26 1	378	棒状鉄製品	S106	覆土	256	14	12	111.5	両端部細身
26 2	379	刀子	S106	床面	119	20	9	80.5	柄差しみ込み部端部破損